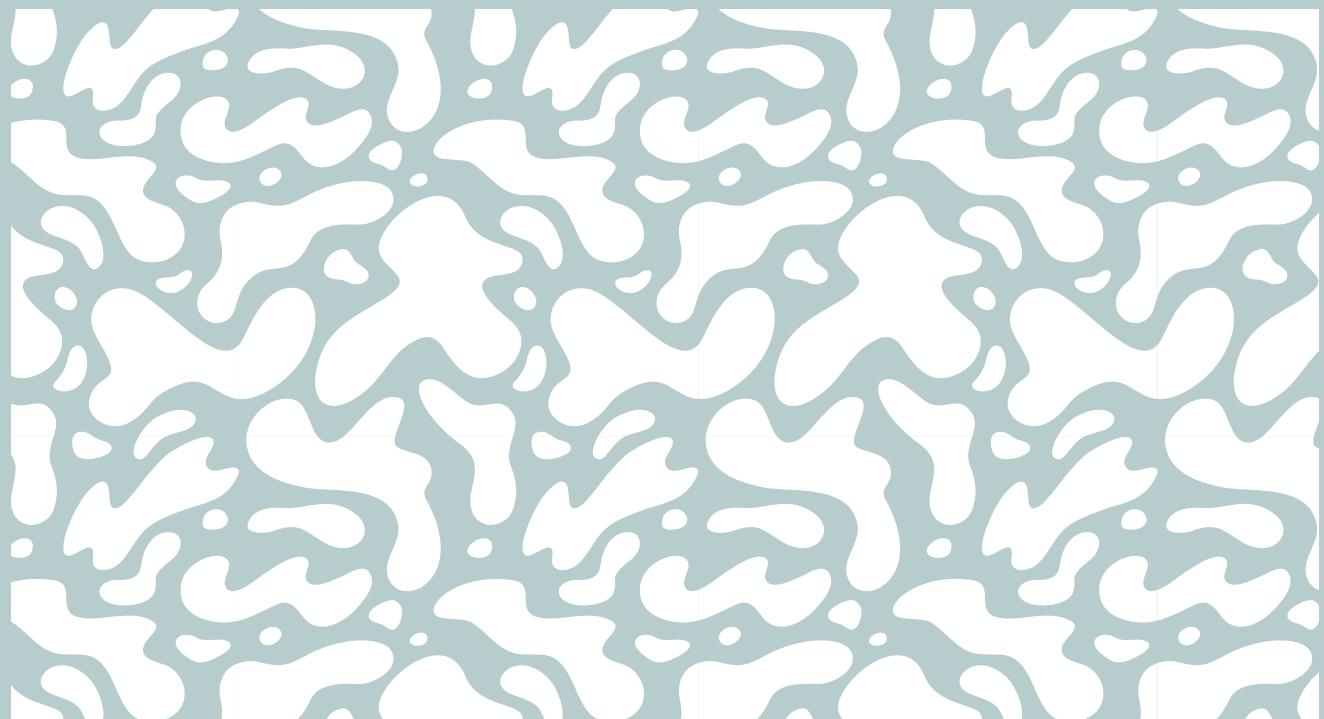


# COMMONS vol.5

## 『コモンズ』



卷頭言 02-03 『コモンズ』第5号 卷頭言 山本 貴光

査読論文 04-27 チェスプレイヤーは如何にして衰えるか  
——ある元日本チャンピオンによるオートエスノグラフィ——  
渡辺 眩

28-42 島岡達三の縄文象嵌—「個性」「無名性」という観点から  
佐々 風太

43-60 日本の都道府県におけるソーシャルメディアポリシーの比較分析  
Jin Wen

61-73 **Displacement and Reinvention:  
Cowboy Masculinity in Cormac McCarthy's *All the Pretty Horses***  
Qin Rong

74-91 内発的発展論における「キー・パースン」の創造性の応答的生成過程  
—潜在的実在に着目した地域実践記述試論—  
村上 竜雄

92-93 投稿規程

94-95 委員会規定

# 卷 第 『コモンズ』 頭 5 言 号

『コモンズ』第5号をお送りします。

本誌『コモンズ』は、2022年に〈未来の人類研究センター〉の機関誌として創刊されたオンラインジャーナルです。当センターの創設メンバーであり、前センター長の伊藤亜紗さんを中心として創刊されました。

当センターでは、毎年リベアルアーツ研究教育院からメンバーを迎えて「利他」をメインテーマとして、専門分野の垣根を超えた協働研究を行っています。メンバーはそれぞれが2年間研究活動にとりくんで「卒業」してゆくという入れ替え式です。

と、このような仕組みをお話しするのは、本誌の編集に関わるからでした。本誌では、号ごとにセンターに所属するメンバーから成る編集委員が編集にあたります。その際、そのつどの編集長に担当号の編集方針も委ねられています。

これまで発行されてきたバックナンバーをご覧になるとお分かりのように、第1号から第3号までは、「利他」「余白」「遊び」といった特集テーマが設定されており、掲載する文章も、査読論文や研究ノー

トのほかに、論評やエッセイ、対談などが入っています。それに対して第4号では、投稿論文と研究ノートを中心とする構成が選ばれています。これらはいずれも、各号の編集担当チームが選んだ方針によるものでした。

本号も投稿された査読論文を中心とする構成です。それぞれの論文については、ぜひお読みいただくとして、ここでは本誌の性格について一言述べてみたいと思います。〈未来の人類研究センター〉の特徴にも関わります。

本センターでは、異分野の研究者が集まって、「利他」をテーマに掲げていると先ほど書きました。これまでのセンターの歩みのなかで、あるいはさまざまな試行錯誤を通じて、利他という状態が、実に多様なかたちをとり、また、ままならないなにかである次第も浮かび上がってきました。「思いがけず利他」とは、元メンバーの中島岳志さんの本の書名ですが、利他には意図して実現される場合もある一方で、たいていは思いがけず現れるという性質をじつによく捉えた言葉だと思います。

学術研究にも同様のことが言えます。ちょっとした関心に導かれて目を通した論文や、読んでみた文章が、あとで思いがけずなにかと結びついて、新たな思考や創意をもたらすといったことは、学術や発見の歴史をそのつもりで眺めれば、分野を問わず目にります。『コモンズ』もまた、そのような場となればなによりであると考えています。

また、本センターは特定の学術分野の専門家集団というよりは、異分野のメンバーが集ってああでもないこうでもないと話しながら、互いの問いや知をもちよって、交換したり共有したりするのが特徴です。本誌が掲載する論文の分野を制限していないのは、そうした問いや知の交換が起きる場であることをよしとするからであります。

といっても、なんでもありの混沌というわけではありません。本誌は東京科学大学を舞台として行われている研究の多様さの一端を映しだす鏡のようなものもあります。気になる研究と出会ったら、ぜひそこからつながる多様な糸を辿ってみてください。きっと思いがけない場所に導かれるに違いありません。

山本貴光

Title

# チェスプレイヤーは如何にして衰えるか

## ——ある元日本チャンピオンによるオートエスノグラフィ——

Name

渡辺 晓

### 抄録

チェスというゲームを高いレベルでプレイするためには、様々な技術が必要であるが、そのような能力のうち、どのような部分が特に衰え、どのような部分は比較的保たれるのであろうか。本稿はかつてチェスの日本チャンピオンであった筆者が、10年ぶりに引退を撤回して競技に復帰した過程を分析するオートエスノグラフィである。競技チェスからの長いブランクと加齢により、筆者のチェスの実力は大幅に低下し、多くの自分よりも順位（レーティングという点数で表される）の低いプレイヤーに敗北を喫した。その一方で筆者は、一部の能力についてはそこまで衰えていないと感じた。具体的には、計算能力が極端に衰える一方で、ポジショナルなスキル（局面を評価したり駒の配置をデザインしたりといった、局面の正確を判断する能力）は、比較的保たれており、それがなんとか実力低下に歯止めをかけたと考えられる。

キーワード：チェス・老化・論理的思考と感情・認知パフォーマンス

謝辞：本稿の執筆の過程で多くの方々にお世話になりました。大変有益なコメントを下さった匿名の査読者のお二人、丁寧にご対応下さった編集委員会の先生方、そしてもちろん紹介したゲームの対戦相手の皆様、特に私に新しいチェスの見方を教えてくれた Alyssa Ng さんに、厚く御礼を申し上げます。なお、この「オートエスノグラフィ」は、筆者が学生として、研究者として、教員として、そして一人の人間として大変お世話になった、人類学者の故・木村秀雄先生に捧げられます。木村先生、本当にありがとうございました。

Title

## **How Chess Playing Skills Decline: An Autoethnographical Analysis of a Former National Champion's Return to Competition**

Name

**Akira Watanabe**

### **Summary**

Playing chess at a high level requires a complex set of different skills. Some of these skills deteriorate sharply with age and prolonged inactivity, while other skills remain relatively intact. This paper analyzes how a chess player's skills decline, based on the author's experience, a former Japanese champion, who came back to tournament chess after a decade of complete absence from the game. Due to his lack of practice and age, the author inevitably suffered huge decline in his chess skills, which resulted in many losses to lower rated players. Despite this, the author also perceived that at least some of his skills were still intact. While his calculation ability declined significantly, his positional skills (skills related to evaluation of the game and designs of the pieces) and the general understanding of the game saved him from a complete disaster.

Keyword: chess · aging · logical thinking and emotions · cognitive performance

## はじめに

チェスは世界で最もポピュラーなボードゲームの一つであり、人間の思考のプロセスを考えるための事例研究の対象としてもたびたび取り上げられて来た。こうした研究には、マスター（上手いプレイヤー）と一般の愛好家の思考のプロセスの違いはどこにあるのかを探ったデフロートの古典的な研究（de Groot 2008/1969：ただし、本研究の元になったインタビューは1938年に実施されている）を嚆矢とし、近年では、自身もチェスのグランドマスターである経済学者、スマードンらによる、チェスプレイヤーは一般人や肉体的アスリートに比べて短命なのかを調査した研究（Tran-Duy, Smerdon, and Clarke, 2018）や、COVIDによるマスク着用がチェスプレイヤーのパフォーマンスに影響するのかを探った研究（Smerdon, 2022）などが知られている<sup>1</sup>。

本稿ではこうした、チェスをテーマとした思考についての研究として、チェスプレイヤーはどのようにして衰えていくのだろうか、というテーマについて考えてみたい。モデルとなるのは、筆者自身（以下プレイヤーAとする）である。Aはかつて日本チャンピオンであった50代前半のプレイヤーである。10代後半にチェスを本格的に始め、20代後半（1990年代後半）にピークを迎えた。その後仕事の都合でチェスから距離を置くようになり、約10年前に引退を決意したが、あるきっかけがあって、再びチェスの大会に出ることになり、2024年11月に全日本チーム選手権に、そして2025年7月には台湾で行われた東南アジアの国々の選手が参加する国際大会に出場した。いずれの大会においても大いに苦戦し、実力の衰えを痛感させられる結果となつたが、逆にこうした苦闘のプロセスを分析することで、チェスの能力がどのようなものかを分析できるのではないかと考え、オートエスノグラフィとして本稿を執筆することにした。

チェスは様々な要素を持つ複雑なゲームであり、Aの実力の総合的な衰えは、それらの様々な要素ごとに分析することで、より詳しく理解できるはずである。本稿ではAの事例を通して、チェスにおいて衰えるとは何か、特に衰える能力そして比較的衰えない部分とは何か、そしてそれらの多様なスキルはどのように相関するのかについて考察していく。

## 1 先行研究と本稿の問題意識

### 1-1 チェスにみる老化

冒頭に紹介した研究をはじめとして、チェスはこれまで様々な目的で心理学の分野を中心として分析されてきたが、年齢とチェスの実力の関係についても、いくつかの先行研究がある。1981年のチャーンズの論文は、若いプレイヤー（中心値20歳）と年を取ったプレイヤー（中心値54歳）に数秒間チェスの局面を見せ、彼らの記憶力を試すという実験を行ったところ、若いプレイヤーたちの方が記憶力がよく、その差は局面を見せる時間がのびるとともに開いていったことを報告している（Charness, 1981）。また、2023年のシーラの論文は、チェスとカードゲームが老化防止に貢献する可能性を指摘し、そのことを実証するための調査（60歳以上の老人に対するサーベイ調査）の計画を公開している（Shi et al., 2023）。

本稿にとって最も重要な先行研究は、過去125年間の世界チャンピオン達のゲームを分析した、ストリットマーラによる研究である（Strittmatter et al., 2020）。彼らは25000局以上の試合をAIで分析し、同一プレイヤーの

強さが年齢によってどのように変化するかを、最善手 (optimal moves = AI が最善と判断する手) をどのくらい出せるか、その割合を持って判断した。その結果、プレイヤーの実力は 20 代前半までは急激に伸び、その後一定の力を保ったあと、30 代半ばから少しづつ後退していくと著者たちは指摘する (Strittmatter et al., 2020, p.27256)。

この研究はもちろん統計的な分析として大変有意義であるが、さまざまな批判を受けている。例えば、20 歳を過ぎてからチェスを本格的に学んで米国のナショナルマスター (NM) となり、現在は自身のような、チェスを大人になってから本格的に勉強したいというプレイヤー向けに、データに基づいたチェスの棋力向上を目指すウェブサイト (ChessGoals.com) を運営する、チェスコーチのジェンセンは、自らのサイト上でサービスを根拠に、伸びしろのあるアマチュアの場合は、35 歳を過ぎてもチェスの棋力向上は可能だと主張する (Jensen, 2023)。心理学者のハイマーも人気チェスサイト Chessable のコラムでストリトマーらの研究を引用し、同サイトのメンバーを対象にしたサービスにおいて、40 歳台の回答者が一番多かったことをあげ、トップクラスのプレイヤーの低年齢化が進む一方で（昨年 12 月にはインドのグケシュが 18 歳で世界チャンピオンとなり、これまでで最も若いチャンピオンとなった）、チェスにおいては「大人」も上達の過程を楽しめるゲームなのではないか、と指摘している (Hymer, 2021a) <sup>2</sup>。

彼らが批判しているのは、世界チャンピオンとその相手たちという、非常にレベルの高いプレイヤーをもって、全てのチェスプレイヤーを一般化できるのか、という問題であると解釈できるが、筆者は本稿において、別の角度からこの研究を批判し、チェスにおけるプレイヤーの衰えについて、考察してみたい。

まず 1 点目の批判として、そもそも人間が AI とは違うのだから、AI が高く評価する手を指せるチェスプレイヤーが強いプレイヤーなのだろうか、という疑問がある。もちろん平均すれば強いプレイヤーの方が AI の示す「正解」の手をより多く指すのだろうが、チェスのプレイヤーには様々なスタイル、つまり好みがあり、AI ほど（逆説的な言い方だが）単純に、つまりその時点での評価値の高い手を選ぶ、といったやりかたで指し手を決める訳ではない。（例えば、善し悪しは別として、相手の意表を突く手を指したり、相手の持ち時間が少なければ、相手を怖がらせるような手、あるいは逆にほんやりとした、相手にいろいろな選択肢を与える手を指したり、といったことが考えられる。）つまり、大きなデータを扱うにあたって仕方のないこととは言え、ストリトマーらの研究では統計処理をするにあたって、AI による判断というフィルターで、チェスのそうした多様性が捨象されてしまっているのである。

デフロートの古典的な研究は別として、ここにあげたチェスに関する先行研究は、いずれもある程度のサンプル数のある統計データを分析したものであり、質的研究の手法で書かれたものは管見の限り存在しない。そのため本稿では、これまでの研究では全く扱われていない、チェスの実践者の声をオートエスノグラフィという形でくいあげようと試みる。言いかえれば、統計的研究で捨象されてしまったチェスプレイヤーの思考過程を描くことで、年齢による衰えについてより具体的に考察してみたい。チェスというテーマあるいは心理学というディシプリンは、筆者にとって専門としての研究対象ではないが、別の分野で長くフィールドワーカーとして研究を続け、現場の状況を伝えることに関しては研鑽を積んできた人間として、本稿では自身の経験について記述・考察し、統計的な研究からは見えないものを描きだすことを目指す。

## 1-2 オートエスノグラフィという手法について

「はじめに」で本稿が「オートエスノグラフィ」という形式をとることを宣言したが、①オートエスノグラフィ

とは何か、そして本稿はオートエスノグラフィと呼べるのか、を確認し、続いて②なぜ筆者はこの手法をとるのか、そして③なぜこの手法が有効であると考えるのかを、分析に入る前に説明しておきたい。

まず、オートエスノグラフィという分野が比較的新しいものと受け取られている日本においても<sup>3</sup>、その手法で書かれた論文や著書が少しずつ発表されるとともに、どのような意義があるのかについて議論がなされているが<sup>4</sup>、ここではその詳細には立ち入らず、2020年に創刊された新しい雑誌、*Journal of Autoethnography* の冒頭にあるアダムスとハーマンによるオートエスノグラフィの定義を紹介する。

アダムスとハーマンは「オートエスノグラフィ」という用語は「オート」「エスノ」「グラフィ」の3つの関連する部分からなっている。従ってオートエスノグラフィックなプロジェクトとは、自分・主観・個人的な体験（オート）を使い、信念や行為、そしてグループあるいは文化（エスノ）について記述・解釈・表象（グラフィ）するものである（Adams and Herrman, 2020, p.2）」と定義しているが、本稿はまさに筆者が自分の個人的な体験をもとに、チェスプレイヤーという少々特殊な人々の思考過程について、記述・解釈するものであり、少なくとも彼らのオートエスノグラフィの定義には当てはまると考えられる。

2番目の「なぜ筆者がこの手法をとるのか」については、その理由はごく単純で、チェスについて何かを書きたい、と考えていたときに、一番近くにいた手頃な「素材」が自分自身であったからである。もちろん、自分の事例が單なる振り返りではなくオートエスノグラフィとして有効性を持つためには、研究としての貢献があることが大前提となるが、久々に参加した大会で自分自身のチェスの衰えという現実を突きつけられ、チェスを手がかりにそうした老化の問題について考えることには、十分な意義があると考える。

本項の最後に、本稿のテーマにとってオートエスノグラフィという手法がなぜ有効であるかを確認しておく。筆者が本稿の特徴を考えるのは、オートエスノグラフィが重視してきた、感情という要素を扱っているという点であり、ゲームという題材が、それを実際にプレイする本人にしかわからない要素を多く含んでおり、必然的にプレイヤーを書き手とするである。

オートエスノグラフィの重要な要素は感情であり、北村が編んだ2022年の『文化人類学』の特集は、「「近代日本の植民地支配と戦争をめぐる家族の生活史」を「生きられた経験〔lived experience〕としての感情」〔Denzin 1985〕を分節化する AE という方法」を用いて考察する、と宣言している（北村, 2022, p.192）。つまり、感情という要素を重視しているわけだが、実は論理的思考の代名詞とも言えるチェスというゲームにも、「勝ちたい・負けたくない・有利だから安心だ・意表を突かれた・冷静にならなければ」といった感情の要素は強く影響しており、本稿における思考過程の分析でも随所で扱うことになる。

なお、この『文化人類学』の特集にも寄稿している石原と、依存症の当事者研究で知られる文学者の横道の対談（石原・横道, 2023）では、「当事者」ということばについて示唆に富む議論がなされているが（特に pp.13-19）<sup>5</sup>、前者については、ゲームという題材の特徴として、特にチェスのような頭脳スポーツにおいては、当事者であるプレイヤー自身の思考、つまりプレイヤー本人にしかわからないことを書く、ということに、意義があると考えられる。

実際、最も早い時期にオートエスノグラフィという言葉を広めた一人である、米国の人類学者ハヤノ（Hayano, 1979）は、自分自身も、ポーカープレイヤーと彼らを取りまく社会について、自分でもプレイに参加しながら調査をして研究を行った（Hayano, 1977; 1982）。1982年のハヤノのモノグラフの付録（Appendix A）には、日系2世のハヤノがどのようにして人類学者をこころざし、またどのようにしてポーカーにひかれ、教職に就いてから夏期休暇にプロのポーカープレイヤーの友人たちと交流しながら調査をした過程が描かれるなど、インサイダーでなければなかなかたどりつけない情報が書かれており、また著者自身の心理についても触れられている。ハヤノがプレイヤーとして自分自身もゲームに参加したからこそ、ポーカープレイヤーたちの集団に受け入れられた、とい

うことも含め、ゲームの世界で起きていることを明らかにし、さらにはそのゲームをやらない人々にも伝えるために有効な調査手法という意味で、プレイヤー自身のオートエスノグラフィには意義があると考えられる。

なお、オートエスノグラフィという手法については、主観性もその一つの特徴であることもあり、客観性が十分なのか、あるいは客観的に見て研究として有意義なのか、という批判は常にありうる。本稿はたった一人のプレイヤーの事例であり、サンプルが不十分だ、そして客観性が足りないのではないか、という批判ももちろんあるだろう。とはいって、Aという、(少なくとも全盛期には)マスターの実力を持ちながら、現役当時からアマチュアとしてプレイする、マスターと一般的のプレイヤーの中間のような、両方の特徴を持つ存在が、チェスというゲームをプレイする人間として、自らの経験を言語化することには、十分な意義があると考える。この点についてはもちろん、結びでふたたび論じることとする。

## 2 本稿の視点

### 2-1 分析対象となるプレイヤーと大会

ここで本稿の分析対象について整理しておきたい。まずは分析対象となるプレイヤーである。本稿の筆者でもあるチェスプレイヤーAは現在50代前半の元日本チャンピオンで、FIDEマスター(FIDE=世界チェス連盟)の称号を持っている<sup>6</sup>。高校生だった1988年頃からチェスを始め、20代後半の2000年頃まで、学業と並行してチェス選手としても精力的に活動していた。本人によれば、ピークは全日本チャンピオンになった90年代後半の数年間で、その頃のレーティング(実力を表す数字)は2300代後半であった。国外での主な戦績としては、1998年東南アジアゾーン選手権(世界選手権予選)6-7位タイなどがあり、自分より格上のインターナショナルマスター(標準レーティング2400以上)やグランドマスター(標準レーティング2500以上)にも一度ならず勝ったことがある。また、日本代表としてプレイした2000年のチェス・オリンピアードでは、インターナショナルマスターになるための条件である「ノーム」を獲得した。その後は仕事の都合もあり、折に触れて大会に出たりはしていたものの、2014年を最後にチェスプレイヤーとして「引退」を宣言した。

2024年の秋、つまり引退宣言のほぼ10年後に、複数のきっかけがあって、Aはチェスの大会に復帰した。今回分析対象とするのは、Aが復帰して以降に出場した二つの大会、2024年11月に行われた全日本チーム選手権と、2025年7月に台北で開催された台湾ドラゴントーナメント(東南アジアの国々の選手が主に集まる招待制の大会)である。全日本チーム選手権では、優勝を目指すあるチームの「助っ人」としてスカウトされたが、レーティングで測る実力的には格下の相手に対し、2勝2敗1引き分けという成績であった。また、台湾での大会でもレーティング的には格下ばかりの相手に対し、4勝3敗1引き分け1不戦敗であった。

これが現在の実力とはいえ、本人としては納得のいかない成績だったが、逆にこの惨憺たる結果について分析することで、チェスの能力が衰える過程について考えるための良い材料であると考えた。それが本稿の出発点である。

### 2-2 分析対象となるプレイヤーと大会

分析に入る前に、チェスというゲームについて簡単に説明し、その特徴を述べておきたい。チェスというゲーム

は日本の将棋に近い、お互いに1度に一つずつ駒を動かし、最終的にはキングを「チェックメイトする」（単純化して言えば「取る」）ことができれば勝ち、というゲームである。ゲームは序盤・中盤・終盤に分かれ、相手の手を予測したり、自分の駒を上手く協力させて相手の駒を狙ったり、といった共通点はあるが、それぞれのフェーズによって主たるねらいが変わってくるため、思考法もおのずと変わってくる。

序盤は、常に同じ局面からはじまるため、定跡化が進んでおり、また日進月歩で新しいアイディアが生まれている。こうした定跡の知識が重要となるが、全てを覚えることは不可能なので、それと同時に、類似の局面の理解力が必要となる。

中盤戦は、お互いの駒がある程度戦えるポジションに出て行き、戦いが始まった、あるいははじまるとする状態である。自分の駒を上手く活用して相手の陣を攻めたり、逆に攻撃を上手く守ったり、といった指し方が必要となる。他のフェーズと同様、先を読む力が求められるが、全てを正確に読むことは不可能なため、読みと同時に、ある局面をどのように評価するか、あるいはどのようにプランを立てるか、といった、単純な読み以外の能力も求められる。

最後の終盤戦であるが、チェスは将棋と違い、取った駒が盤上から消えていくため、終盤は残り少ない勢力をうまく生かし、ポーンを昇格させてクイーンを作つて勝つ、ということが重要となる。他のフェーズに比べて駒が少ない分単純に見えるが、その分それぞれの駒の動きの可能性も増えるのに加え、勝敗が最後に決まるフェーズでもあるため、序盤・中盤と同等か、あるいはそれ以上に大切なフェーズである。

## 2-3 チェスに必要な様々な能力

チェスにおいて必要な様々な能力とはどんなものだろうか。次節で分析に入る前に、それらの能力について整理をしておく。

### A 先を読む能力

チェスや将棋、囲碁などのゲームが「強い」というときに、一般の方が最初にイメージするのは、この「先を読む能力」であろう。「何手先まで考えるんですか？」というのではなく、「チェスをやっている」というとすぐに返ってくる質問である。先をなるべく長く、そして正確に読むことは、実際に非常に重要な能力である。ただし、チェスの指し手にはあまりの多くの可能性があり、考えられる時間も限られているため、トップクラスのマスターであっても完璧に可能性を読むとはできない。逆に言えば、以下に述べるように、この読みの力以外にも、チェスにはいろいろな能力が必要である、ということがいえる。

### B 局面評価の能力あるいは判断力

いくら先を読んで、自分が思い描いていたとおりの局面になったとしても、その局面が自分にとって不利なものであっては意味がない。わかりやすい例を挙げれば、駒得をして有利、と思っても、実はその他の要素を勘案すると自分が不利になってしまう、ということもありうる。評価の基準としては、前述の駒の損得（どちらの戦力が多いか）だけでなく、それぞれの駒の動きや、ポーンの配置、そしてキングの安全性など、様々な要素がある。将棋や囲碁では「模様」という言葉が使われるが、チェスでも局面（ポジション）を画像的にみてその善し悪しを判断

するのは重要で、ポジショナルプレイと呼ばれる。具体的な読みと、このポジションの評価が、チェスにおける能力の両輪である<sup>7</sup>。

### C 知識

序盤や終盤などの局面では特にそうだが、チェスにおいては知識も必要である。序盤の初手からの作戦を覚えることは、序盤を上手く指すために重要であるし、終盤で「この形になれば勝ちだ」ということを、知っていることは大きなアドバンテージとなる。より基本的には、序盤には序盤の指し方が、終盤には終盤の指し方があり、さまざまな基本的なアイディアを知っておく必要がある。特に序盤の定跡（作戦）はすさまじい量の情報の蓄積がある上に、日進月歩で進歩しており、不利な局面に陥らないようにするために、得意戦法を磨いたりしておくのに加え、試合の前には、可能であれば相手の得意戦法をチェックすることも含め、どんな手を指すかを事前に考えておくことが一般的となっている。

もちろん、知識を蓄えるのは、覚えたことをそのまま使うため、ではない。いくら多くの知識を持っていたとしても、自分の知識をそのまま使える機会は、それほど多くはないだろう。むしろこうした知識は、先を考えるときの指針となるものであり、「今の局面は自分が知っているこの形に近いから、その時に学んだアイディアをこの試合に応用する」といった形で活用されることになる。つまり知識は、読みと局面評価を助けるための指針、応用のための材料となるのである。

### D チェスのために必要なその他の重要な能力

これ以外にもチェスで勝つには様々な能力が必要である。チェスに限らず重要な要素だが、長い試合の中で考え続ける体力ならびに集中力、相手に意表を突かれても冷静に対応する力、そして勝ちたい、あるいは負けたくない、と盤にしがみつく力、といった、メンタル面での力が、重要な能力としてあげられるだろう。

さらに付け加えれば、チェスの試合に出るためにはそれなりの準備が必要である。最新の定跡をチェックしたり、チェスの思考を磨くために問題を解いたり、といった大会前の準備、そして大会中も、次のラウンドの対戦相手がわかつてからの準備というのが、試合を有利に進めるための重要な要素となる。もし仮に、自分が予想していた展開にならなくても、ゲーム開始の時点から、チェスのゲームにスムースに入っていくためにも、事前の準備は重要である。

ただそれと同時に、準備にあまり集中しすぎると、体力を消耗してしまうという面もあるので、適度なリラックスのために散歩や瞑想をする、というプレイヤーもいる。例えば、2024年12月に18歳で世界チャンピオンとなつたインドのグケシュ選手は、早めに盤の前に来て瞑想をすることで有名で、さらには世界チャンピオンになったマッチでは、メンタルトレーナーとして（チェスを全く知らない！）南アフリカの著名なクリケットのコーチに、メンタル面での指導を仰いだという（Ten Geuzendam, 2025, pp.34-35）。このように、チェスというゲームにとって、プレイヤーの心理状況は非常に重要な要素となる。

## 2-4 A の準備状況

前項で列挙したように、チェスを上手く指すためには、様々な能力が必要であり、さらには能力そのものとともにいかに試合に向けて準備をするか、ということも重要である。そこで実際の分析に入る前に、A がどのような

準備をして大会に臨んだのか、について、簡単に触れておきたい。

2024年11月の全日本チーム選手権については、Aはほとんど準備をせずに試合に臨んだ。準備と言えるようなことは、次節で後述する序盤の新戦法の習得くらいであるが、今までの自分がやってきたことの延長線上にある戦法であり、またその戦法の本当の良さを理解して使っていたとは到底言えない、表面的なものだった。

2025年の国際大会の前には、そのときの反省も踏まえ、Aはオンラインで問題を解いたり、毎週火曜日にヨーロッパおよび米州の昼間および夕方（日本時間では深夜と早朝）に開催される早指しの大会（Titled Tuesday：タイトル保持者のための火曜日トーナメント<sup>8)</sup>）に出席してゲームをしたり、問題を解いたりといった「準備」を行ったが、Cで触れたような知識のアップデートまでは手が回らなかった。もっとも、もし仮に熱心に準備を行ったとしても、50代の記憶力では最新定跡をきちんと覚えることはできなかっただろうし、結局自分が指し慣れた展開の方を選んだだろう。

こうして、国際大会については多少の準備はしたもの、序盤の知識については自分がチェスを一番よく勉強していた25年以上前の知識で臨むことになった。次節ではいよいよ、これらの指標を元に、Aの実際の大会での様子を分析する。

### 3 「衰え」の分析

本節と続く第4節はAによる自身の「衰え」についての分析である。本節では、衰えが顕著だった分野と、「昔取った杵柄」が生きている分野を中心に、Aのチェスの変化について述べ、第4節ではそれについて、実例を挙げながら解説する。

なお本稿では、チェスに関する知識のない読者も配慮し、本文の記述ではなるべく棋譜などは使わずに進めるこことし、代わりに注に、チェスがわかる読者用に、棋譜とともに簡単な解説をつけることとする。本文の説明では物足りない読者は、そちらもあわせてご覧頂きたい。

#### 3-1 衰えが顕著だった計算能力と比較的保たれていた判断力

##### 3-1-1 計算能力

自分の衰えと向き合うのは勇気がいることだが、Aの自己分析によれば、全盛期に比べて決定的に衰えたのは、先を読むための計算能力である。その後の展開を読むことはチェスの思考の基本であるが、その力を維持することは難しい。さらに言えば、読みのスピードも重要で、持ち時間が限られている中、時間を使いすぎることなく、最善手あるいはそれに近い手にたどりつくことが重要である。Aの大会前のトレーニングの一つは、インターネットのサイト上の問題を解くことであったが、正解をしたとしてもかなりの時間を要するなど、読みのスピードが以前に比べてかなり落ちていることについては、その時点ですでにAも自覚していた。

読みの力が特に重要なのは、自分が有利なときに決定打を見つけるときである。チェスにおいて有利な局面で難しいことは、上手く勝ちきれないと、逆転まではされないものの、引き分けという結果がある。従って、有利なときにきちんと勝ちきれないと、勝ちが引き分けになってしまったり、場合によっては負けてしまったりする。自分が有利だということを確信しているにもかかわらず、そこからそう進めたら、その優位を拡大できるのか、が

わからないときもあるのである。

次項で詳しく述べるように、Aはそうした局面の評価はそれなりにできたため、「いい手があるはずなのにそれを見つけることができない」という、もどかしい状況に陥ったことが繰り返しあった。さらに言えば、Aはこれらの大会において、以前とは比べものにならない頻度で、読み抜け、つまり相手の応手の見落としというミスを犯した。こうした読みの精度の低下も、もちろん試合結果に大いに影響することになった。

### 3-1-2 判断力

逆に、比較的衰えが少ないと感じられた分野もあった。それは、ポジショナルプレイの能力、つまり局面を評価する能力、そしてマヌーバリング (maneuvering) と呼ばれる、駒の位置をやりくりして局面を改善する能力である。敗れた試合においても、途中の不利な局面、あるいは計画を立てるのが難しい局面において、それなりの指し方ができたという。もちろんチェスというゲームにおいては、局面判断は重要ではあるが、それだけで勝てる、というものではなく、それを補う読みの力が必要である。Aの場合はしかし、読みの能力は衰えているため、かえって局面判断に頼りすぎて、心許ない読みの力がさらにおろそかになる、といった意味で、両刃の剣になってしまった面もあった。この点については次節の実戦編で実際の例と共に詳述する。

## 3-2 その他の様々な要素：序盤の準備・ミスが出やすい局面

### 3-2-1 序盤の準備

前項で扱った計算力と判断力以外にも、チェスの試合の結果を左右する様々な能力がある。その一つが、序盤の準備である。わかりやすく言えば、序盤の作戦を準備し、自分に有利な局面に誘導する能力である。前述の通り、Aはほとんど全く準備をせずに大会に臨んだ。自分の作戦が30年前のものであり、また序盤の作戦についての考え方も近年大幅に変わりつつあることも自覚しているながら、その頃はかなり序盤の勉強に時間をかけていたし、それだけ古ければ逆に相手も知らないだろうという、大変甘く身勝手な認識で大会に臨んだ訳である。

しかし、Aが過去に指したゲーム、特に国際試合については、かなりの数のゲームがオンラインで公開されており、例えば365chess.comというサイトでは、166試合のAのゲームを見ることができ<sup>9</sup>、どのような序盤の作戦を好むのか（少なくとも過去に指してきたのか）を見るため、少なくとも時間のあった台湾の大会においては多くの相手が、せっかくマスターと試合ができるのだからと、それなりの準備をしてきたものと思われる。実際に相手の一人は、こんな作戦でくるからと、かなり入念に準備していた、と話していたが、多くの試合で、Aは相手の作戦に意表を突かれ、序盤からかなりの時間を使うこととなった。なお、少なくともAにとって、指し慣れた戦型以外のかたちを選ぶことはかなりリスクの高い指し方であり、相手が何か作戦を準備しているとわかつても、多くの試合で自分の記憶に残っている、得意とする（というより、昔得意としていた）作戦を選んだ。

### 3-2-2 どのような局面でAはミスを犯したか

皮肉なことに、この二つの大会でAが喫した5敗のうち、4敗は有利な局面からの逆転負けであった。つまり、序盤の準備が不十分だったとしても、悪くなった試合については、そこから逆転するだけのディフェンス力、相撲

で言えば「いなし」のテクニックを発揮したのに比べ、ある程度優位に進めた試合においては、勝ちがあるはずの局面で決め手を発見できずに押しきれなかったり、無理をして逆転負けを食ったりしていたのである。

実をいうと A は、1 つめの大会である全日本チーム選手権では少しだけ作戦を準備した。ドイツの若手グランドマスター、V・カイマー (Keymer) の専売特許とも言える、地味だが手堅く、また柔軟性のある作戦を用いたのである。残念ながら次節でより詳しく述べる通り、A は 1 つの試合でこの作戦によって優位を築いたにもかかわらず、その後の勝ちの局面で大ミスを犯して負けてしまった。

このように、局面が良ければ勝てる、とは必ずしも言えないことも、チェスというゲームの難しさであるが、「計算能力 (3-1-1)」の説明でも述べたように、チェスにおいては局面がよいかそ次の手が難しい、ということや、逆に局面が悪いからこそ守りの手が限られ、かえって指し手を見つけること自体は容易になる（もちろんそうやって守り続けることで事態が好転するかは別として）、など、様々な要素があるのである。

### 3-3 勝負に影響する盤外の要素

A にとってさらに状況を複雑にしていたのは、レーティングの問題である。レーティングとは実力を現す数字だが、一試合ごとにこの点数がやりとりされ、強いプレイヤーが弱いプレイヤーに勝ってもレーティングはさほど変わらないが、弱いプレイヤーは引き分けに持ち込むだけでもレーティングが増え、勝てばさらに点数を稼ぐことができる<sup>10</sup>。多くのチェスの大会において、優勝を狙えるのは一握りの選手だが、多くのプレイヤーは目標として「レーティングを上げる」ために（そしてもちろん、プレイすることそのものを楽しむために）臨む。

台湾でのトーナメントにおいては、A の開始時のレーティングの順位は全体の 2 位で、最も近い 3 位のプレイヤーとも 300 点近いレーティングの差があった。（レーティングが 400 点違うと上位者の勝率は 9 割以上と言われる。相撲にたとえれば、横綱の次の大関格で、しかも三役が一人もいないような状況であった、と言えばわかりやすいだろうか。）そのため A の相手の多くは、FIDE マスターである A と対戦し、勝てなくとも引き分けに持ち込めば自分のレーティングが増える、つまりもちろん勝てればうれしいが引き分けでも大満足、という姿勢で A との対局に臨んできたのに対し、A の法は逆に、レーティング的には勝って当然の相手なのだから勝たなければ、というプレッシャーを感じながらゲームをしていた。そのことからも、有利な局面に持ち込んだものの、最後の決め手を見つけられずに勝ちきれない、という状況は、A にとって大きな痛手であった。

また、先行研究批判の部分でも述べたが、チェスというゲームは必ずしも客観的に最善の手を指すことが重要ではない。最善手を指していくてもじりじりと悪くなりそうだから、あえてリスクを冒して反撃に出たり、相手が間違えてくれそうな手を指したりすることもある。また、これは明らかに邪道であるが、無意識のうちに、相手の実力がこの程度であれば、こう指せば間違えてくれるだろう（最善手を見つけることはないだろう）、と、考えてしまうこともある。もちろんチェスにおいて、よほど不利な場合を除き、相手が最善手以外の手を指してくれることを期待するべきではないが、人間の弱さの常で、そうした安易な道に流れてしまうこともあり、その作戦が功を奏すことも、痛いしっぺ返しを食うこともあるのである。実際、台湾で負けた 3 局のうち 2 局は、無理に勝とうとして逆転されてしまったものであった。

### 3-4 本節のまとめ

ここまで見てきたように、人がチェスを指すときの思考には様々な要素がある。一般的な読みの力に加え、局面

を視覚的あるいは静的に判断するポジショナルプレイや局面判断の力、序盤・中盤・終盤というゲームのフェーズに応じた指し方の変化、そしてさらには盤外の状況と言った、様々な要素が含まれている。こうした要素のそれぞれが実際にどのようにからみあっているのか、次の第4節ではAの実戦を通して、彼の衰えがどのように実際の試合に出ていたのかをみていく。

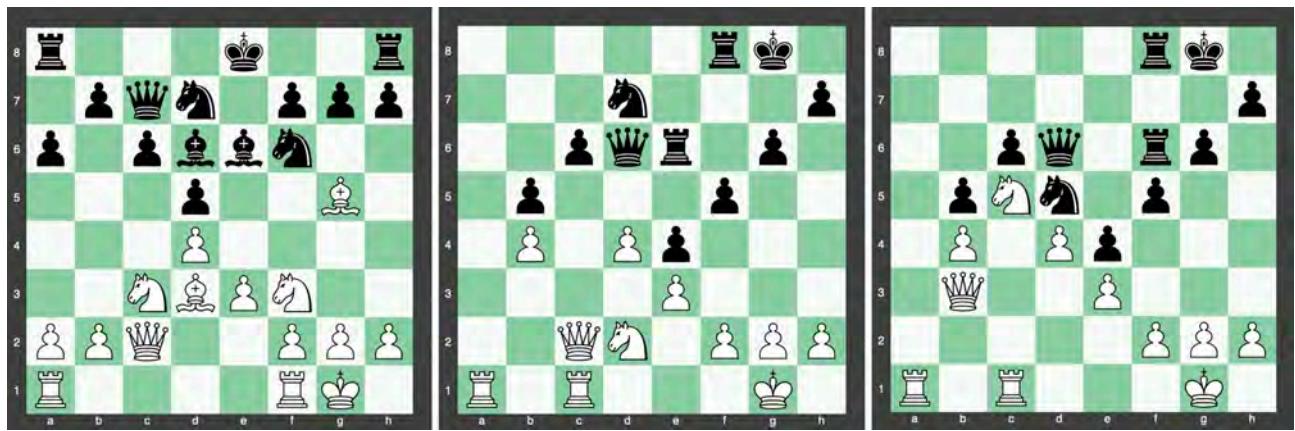
## 4 実戦の分析

ここでは前節で扱った「衰え」について、2024年の全日本チーム選手権と2025年の台湾ドラゴンインターナショナルトーナメントの2つの大会ごとに、具体的な実戦の例を通して解説していく。なお、本文はチェスを知らない読者に配慮して記述的に書くようとするが、チェスを知っている読者にとってはそれでは物足りないと思われるため、実際の手順をあらわす棋譜を注に入れるにすることにする。関心のある方はそちらをご覧頂きたい。

### 4-1 2024年全日本チーム選手権

最初に取り上げるのは、全日本チーム選手権でのM選手とのゲームである。この大会の持ち時間は30分、1手につき30秒が加算される。相手のM選手はその数ヶ月後、全日本ユース選手権に優勝してチャンピオンとなった、期待の若手選手である。Aにとって、序盤で意表をつかれて動搖し、途中苦しい局面を経たものの優位を築きながら、それを全く活かせずに負けたという、衰えを痛感させられるゲームであった。

図1 全日本チーム選手権での試合（1）



1-1 Aの現役時代にはなかった定跡

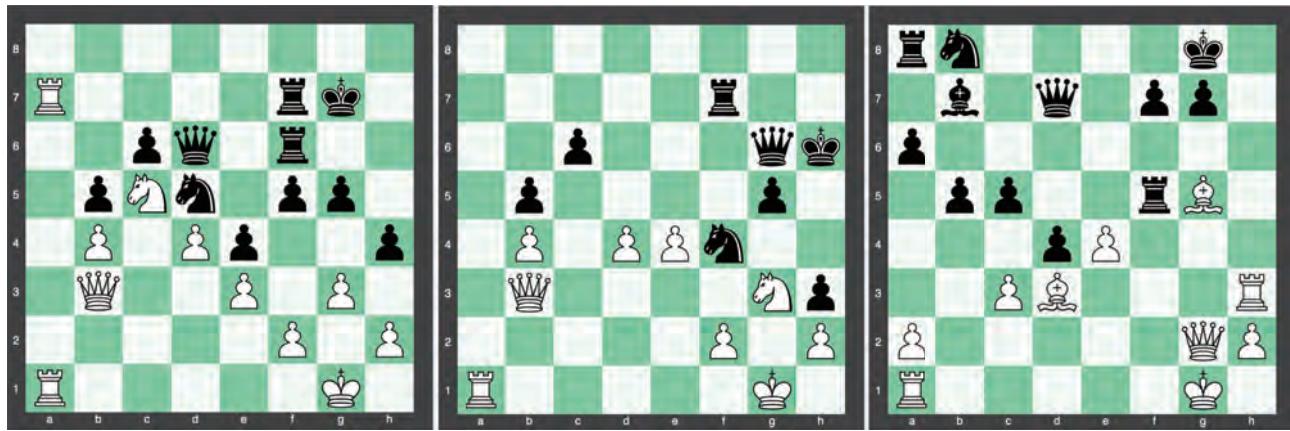
1-2 最初の逸機

1-3 自分ではうまく進められた、と思っていた局面（AIによると僅かながら白が不利）

まずは序盤である。M選手は堂々とほとんど時間を使わずに、序盤の手を指してきたが、この戦型はAにとってまったく新しい陣形であった（1-1）。相手の土俵に入ってしまったことを意識しつつ、そしてなんとか自分の知っている形を思い出しつつ、それに近い形を目指したのが（1-2）の局面である。AIによるとここで左側のルックを6段目に進め、横からの攻撃に使えば白が優勢だったが、クイーンで守られていないポーンを取られた場合にうまく切り返しがあるのが見えておらず、その手を見送ってしまった<sup>11</sup>。

さらに言えば、自分では好手順と思ってナイトとクイーンを好位置に運んだが、筆者自身は有利と判断していたが、実際にはAIの評価は黒が良いとの判定で、その意味でも衰えを感じることになった（読み抜け+判断ミス：自分が工夫した手順より、常識的なシンプルな手順の方が優れていた）。

図2 全日本チーム選手権での試合（2）



2-1 相手の不用意な攻めをとがめる

2-2 有利なはずなのに思考停止に

2-3 別のゲーム：大事な攻めのポーンを取られて動搖してしまったが、実はまだ勝ちだった

とはいって、白の駒たち、特にナイトも確かに好位置につけており、そのおかげで数手後に黒がミスを犯したのをうまくとがめ、多少リスクではあったが自分の守りのポーンを一時的に捨てることで、逆にポーンを一つ得して優位に立つことができた（2-1から2-2）<sup>12</sup>。

問題はその後である。2-2の局面は白がポーンを1つ取って駒得し、センターの2つのポーンも強いので、優勢であるはずだ（AIの評価も同様であった）。ポーンを捨ててしまったためキングの守りが少し不安とは言え、すぐにそこを攻める手はない。しかし、自分が有利なはずだと認識しながらも、Aはここから何をしていいのか、全くわからなくなってしまったのである。こうした有利なポジション、ただし相手にも反撃のチャンスがある、自陣に気を遣わなければならない弱点があるポジションで、きちんとプラスとマイナスを計算し、プランを見つけてしっかり指せるのが強いプレイヤーだが、それが全くできなかったのである。ちなみにこの時の残り時間は5分しかなく、1手30秒の加算を考慮に入れても非常に厳しい条件であったが、相手の若手選手はその緊張を逆に楽しむようにのびのびと指していた<sup>13</sup>。

一番右の図面（2-3）は、この大会におけるもう一つの敗戦の決定的な場面である。この局面は黒がe5にいたルックでf5のポーンを取ったところであるが、Aはこの手を完全に見落としていて、パニックに陥ってしまった。ここまで順調に攻めていたのに、重要な攻めの拠点を取られてしまったと感じたからである。（ポーンでルックを取れるが、そうすると遠くにある黒のビショップでクイーンを取られてしまう。）白の次の手も簡単に咎められる大悪手で、白は好調に攻めていた局面から一気に逆転されてしまった<sup>14</sup>。しかし、実はこの局面（2-3）は白が優勢だったのである。普通にビショップを斜め前に進め、キングの前のポーンを狙えば、ポーン一つの犠牲はたいしたことなく、攻めが続いたはずで、さらに言えば白が勝ちだったのである<sup>15</sup>。

ある程度の実力があるプレイヤーであれば、そもそもポーンを取られる手を計算に入れた上で、ポーンをとられても引き続き攻めて勝ちだ、あるいは少なくとも攻めが続くので悪いはずはない、と読んでから直前の手を指していただろうし、もしさうでなかったとしても、最初は驚いても冷静に次の手を探すことができれば、Aのようにパニックに陥って連續で悪手を指すようなこともなかつたであろう。きちんと最後まで勝ちを読み切る力と、意表を

つかれても冷静に対処する力、その両方が衰えたこと（あるいはその二つが深く関連していること）を如実に示すゲームであった。

#### 4-2 2025年台湾ドラゴン招待大会（1）：準備から初日まで

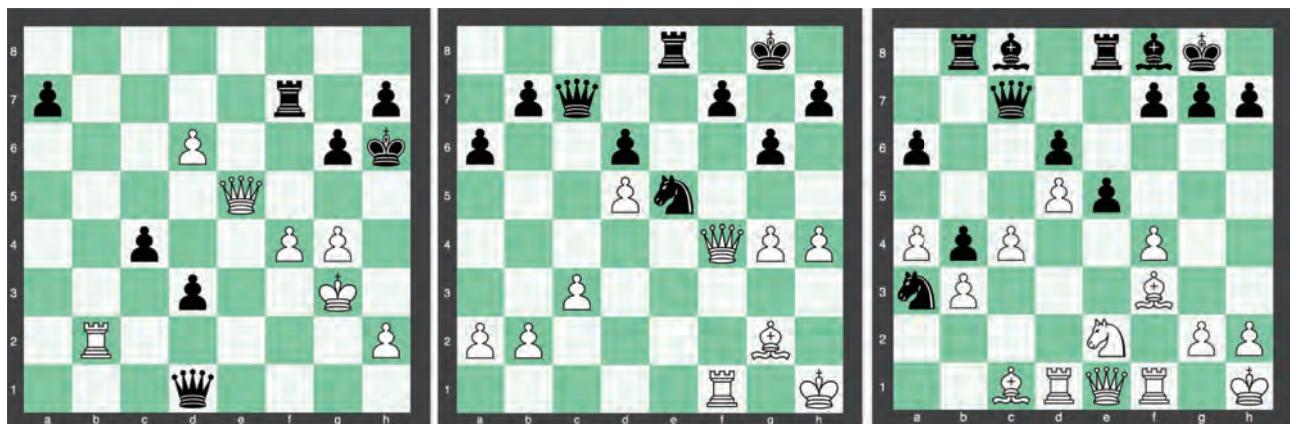
2025年7月、Aは台湾で開かれた大会に出場した。この大会は持ち時間が90分（1手につき30秒加算）、1日2試合のペースで9ラウンドを戦う、というルールで行われた。1人アイスランドからアジア旅行を兼ねて出場を決めたという若いインターナショナルマスターがいた以外は、全員が東南アジアの選手で、レーティング2000点以上のプレイヤーはいなかった。2-4で前述したように、今回は長い持ち時間の国際試合ということもあり、Aは出場を決めて以降、少なくとも試合勘を取り戻すべく、オンラインで早指しの試合をしたり、問題を解いたりするなどのトレーニングを行った。

他の参加者のレーティングもそれほど高くなかったため、それでも十分との「読み」であったが、開始早々、その予測は甘かったことが判明した。初日の二試合、いずれも不利な局面を経てなんとか勝ったAであったが、その時点ですでに（大会はまだ始まったばかりなのに）「もうチェスは十分やった」という気分であった。体力的にも長時間考え続けることはなかなか難しく、そして精神面でも、久々のチェスの試合の緊張感は、長くチェスから離れていたAにとって負担となつたのである。

#### 4-3 2025年台湾ドラゴン招待大会（2）：2日連続の悲劇

そのような精神状態で迎えた2日目、Aは2連敗を喫した。初戦の試合、不利な局面をうまく守って挽回し、一度は逆転したにもかかわらず、前項で紹介した2つの試合同様、「有利だというのは理解できるのに具体的な勝ち筋を見つけられない」という状況に陥ってしまったのである。そこからは、レーティングのこともあるって、将棋で言う千日手（繰り返し）による引き分けを嫌った末に、初心者でもわかるようなチェックメイトを見落として、勝てるはずだった、少なくとも負けることはなかったゲームを負けにしてしまったのである。そのショックから立ち直れないまま臨んだ2試合目は、序盤で無理な手を指して咎められ、短手数で負けてしまった。

図3 台湾の大会：過去と現在の交差



3-1 30年前のAの「名局」：しかしこの試合の記憶が仇となって逆転負け

3-2 一番の得意戦法で優勢に持ち込んだものの、迷いが出てここから悪手を連発し、自滅

3-3 同じ定跡の昔の試合：この局面を見た

対戦相手のコメントが秀逸だった

その2局については敗北の痛手があまりに大きいため、本稿ではあえて紹介しないこととするが、1局目については、分析の視点から面白い要素があるのでそちらについて言及する。その要素は、Aが30年前に指したゲームのおぼろげな記憶が、最後に無理に勝ちを狙って結果的に負けとなる、無謀な手に結びついてしまった、ということである。

(3-1) は30年前にAが国際試合で指したゲームで、白のキングがクイーンの攻撃をかわしつつ、黒キングの包囲網に参加し、勝利に貢献した<sup>16</sup>。当該の試合もクイーンとルックが1つずつ残り、白のクイーンとルックが黒のキングを攻める展開となつたが、Aはこのゲームのおぼろげな記憶を頼りに、キングを攻めに参加させようとした<sup>17</sup>。しかし残念ながら今回の試合では、黒ではなく白の、つまりAのキングが、あっさりとチェックメイトされてしまったのである。文字通りの自殺行為であった。(繰り返しになるが、あまりに痛々しいので図面は省略させて頂く。ご関心のある方は、注17のリンクからそのゲームを見る能够があるので、ご覧頂きたい。)

もちろん勝つためにはきちんとチェックメイトあるいははっきりとした勝ちの局面になるまで読み切るべきで、この試合の記憶のせいで思考が乱れた、などというのは言い訳に過ぎないが、チェスプレイヤーの思考プロセスとして、過去に見たことがある類似の局面を頼りに考える、パターン認識という側面が重要であることは確かで、その意味ではAの選択も正当化される。とはいえ、そのパターン認識におけるモデルケースと実際の局面が、あまりにかけ離れており、また簡単な自分のキングの安全性のチェックを怠つたことで、Aはその隙間に足を取られるようにして負けてしまった。当事者であるAにとっては非常に悔しいが、客観的には興味深い事例であるといえるだろう。

＊＊＊

2連敗後の翌3日目も初戦は不利な試合をなんとか勝ったものの、2戦目に再び落とし穴が待ち受けていた。この試合では序盤を少し工夫し、自分の得意な形に持ち込んだが、またしても局面が有利になったあとに判断を誤ってしまう。(3-2)のポジションは一見白がのびのびしていて良さそうに見えるが、重要なポイントは全て黒がおさえており、実は黒が優勢である。この局面でどうするべきか、候補の手は見えていたにも関わらず、Aはよりわかりやすい勝ちを狙おうとして別の手を指し、かえって局面を難しくしてしまった。さらにその数手後に自滅としか言えないような手を指して、あっさり負けにしてしまった。このゲームは、有利なはずなのに具体的にどう指していいのかわからない、という意味では、全日本チーム選手権の2試合目と同様である。ただ、この試合の場合はほとんどの手番で複数の良さそうな手があり(具体的な手順は注を参照)、その中で悪い方を、悪い方を選んでしまい、最後は自滅としか思えないような手を、しかも1手のみならず2手、3手と続けて負けにしてしまった、という点で、別の形の衰えが見られたと言える<sup>18</sup>。

ただしこのゲームについて書いておきたいことは、その後の白の選手との交流である。相手はシンガポールから来ていた14歳のN選手で、最終的にこの大会で5位に入賞した。その日の試合終了後はお互い興奮状態で、あいさつと激励だけして別れたが<sup>19</sup>、冷静になった翌日の昼間、試合がない時間帯にこちらから声をかけ、ゲームについて話をした。勝ちはしたものの途中までは自分が不利だったことは相手もよく理解していて、そしてAも自分の得意な戦型ということもあり、「ここはこの方がよかったかもね」という話をいろいろとしたところ、試合で自分が勝ったにもかかわらず、彼女は「あなたはぜひチェスを教えるべきだと思う」と言ってくれた。負けた相手にそう言われたのは、Aにとっても初めての経験であった。

さらに秀逸だったのは、Aが以前指した同じ戦型の試合(3-3: 2009年の全日本選手権でのゲーム<sup>20</sup>)を見せた

時の彼女のコメントである。見てわかるように、黒のナイトが盤の端のあまり働きがなさそうなところにぽつんといるが、これを見た彼女は、「わかった！ ジャパニーズ・アニメだとこういう苦しそうなキャラが最後に活躍して勝つでしょ。この試合もきっとそうだったんじゃないですか？」とのたまつた。彼女の「予想」は大当たりで、このゲームでは実際にこのナイトが活躍し、最後は黒がクイーンを捨て、その代わりにナイトがかき回したクイーンサイドでポーンが前進してクイーンになり、斜め後ろへの利きで遠く離れたキングを守るという、非常にドラマチックな形で終わったのだが、ナイトが活躍したのは半ば偶然とは言え、彼女の柔軟な発想に A は大いに驚かされた<sup>21</sup>。

その後、4日目は1試合目を勝った後、2試合目は審判に頼んで休み（不戦敗）にしてもらった A であったが、半日休んでリフレッシュしたにもかかわらず、最後のゲームでは地元台湾の選手に引き分けと、散々な結果で終わつた。ゲーム展開も本稿で述べてきた他の試合と同じような展開で、有利な局面から簡単な勝ちを逃し、最後はねじり合いの末、「これでやっと勝った」と思つて自信を持って指した手が、引き分けにしかならない手で、読みの力の衰えを痛感させられる引き分けであった。

## 5 おわりに

### 5-1 本稿のまとめ

本稿では、チェスプレイヤーは如何にして衰えるのか、について、筆者自身でもある元日本チャンピオン A の事例を通して考察してきた。結論として、読みの力（計算能力）の低下や序盤の知識のアップデート不足など、明らかに衰えている点があるのに比べ、ポジショナルなセンスや判断力といった、それほど顕著に衰えてはいない点もあるなど、A の衰えは全てのスキルにおいて見られるわけではなく、衰えという現象がそれほど単純なものではない、ということがわかった。ただし、局面判断の力がそれなりに維持されていること、特に今回対戦したレベルのプレイヤーたちと比べれば、はっきり優っていたことについては、それ自体はもちろんポジティブな要素だが、読みの力あるいは計算力の衰えのせいで、こうした判断力の優位を活かせないことが、かえつて A の無力感を増幅し、さらなるミスを生んだことも事実であった。

その点からもわかるように、チェスの試合において心理的・感情的な要因はやはり重要であり、その意味では、逆転負けの原因となった昔の試合の記憶と同様、過去の経験の蓄積は両刃の剣ともなりうる。そう言った意味で、A のようなレベルのプレイヤーにとって、自分の衰えと向き合うことは、その衰えがさまざまな側面を持っているだけに、簡単な作業ではない。

純粋なチェスの能力から離れた点で言えば、A はこれらの大会で目標にされ、相手に「A となら引き分けでも十分」と思わせるような存在だったことも心理的に重要である。逆に A にとって、全ての相手が格下で、勝たなければいけない試合だったわけだが、A の現在の実力は衰えているのに加え、そして久々のチェスの試合というプレッシャーもあり、こうした心理面もこれらの大会での成績に如実に反映されたといえる。

なお、本稿の修正中に筆者は、たまたま観光のために来日したメキシコのグランドマスター L 氏と会うことができた。20代前半には世界のトップクラスに迫る勢いだったが、現在は別の仕事をしていて引退状態の彼に話を聞いたところ、やはり私と同じように、計算力が低下したこと、そして逆に判断力はあまり衰えていないことを指摘していた。ただし彼の場合は、A よりずっと高いレベルの大会に出ているため、序盤の準備が以前よりずっと大変

になったように思う、とも言っていた。

## 5-2 本稿の学術的貢献について

本稿の学術的貢献について、以下の2点をあげておく。まずは本稿のテーマである「チェスにおける衰え」という点については、一人の事例ではあるがそれを詳細に検討することで、統計的なデータ分析では得られない、衰えというものの多面性、そして様々な要素の関連が明らかとなった。具体的には、これらの試合におけるAの思考過程の分析を通して考察することを通して、単純に全ての面において能力が低下するという訳ではなく、比較的衰えない能力もあるなど、さまざまな要素が絡み合っており、場合によってはさまざまなスキルのミスマッチという、通常は起きないような現象も起きたりするのだ、ということを示すことができた。

もう一点、オートエスノグラフィの先行研究を参照し、自らの記述に反映することで、論理的なゲームと思われているチェスにおいて、感情の果たす役割も大きい、という点についても、実例を提示することができたと考える。試合中の思考もその時の感情によって大きく変化するし、勝ったり負けたり、あるいは対局後に相手との交流が深まったりなど、様々な要素がチェスの大会にはある、ということを、伝えることができたのではないだろうか。なお、念のため書き添えておけば、チェスで負けたときの悔しさは、少なくとも（オンラインのゲームや気軽な早指しならともかく）今回取り上げた大会においては、年を取っても全く衰えていなかった。この点においては、年齢を重ねたことによる「達観」があつてしかるべき、なのかもしれないが、少なくとも現状ではそうはなっていない<sup>22</sup>。とはいえ、Aはこれらの大会に出ることで、以前の知り合いと旧交を温めたり、新しい友人を作ったり、あるいはアドバイスをして感謝されたりといった、盤外の交流にも充実感を感じており、そうした意味でも感情のはたす役割は大きいと考えられる。

本稿で得られた結果はどのような既存の研究に貢献できるだろうか。まず、心理学の分野では加齢と認知の問題は重要なテーマとなっている。マーマンのレビュー論文では、加齢によって最も衰える認知タスクとして「速く情報を伝達あるいは変換して意思決定をする能力」をあげており、逆に蓄積する知識や経験的スキルは、加齢によつても保たれるとしている (Murman, 2015, p.119) が、この指摘はまさに本稿の内容と一致するし、また経験的スキルである判断力が、衰えた計算能力によって様々な影響を受ける可能性を指摘している点で、もちろんもっときちんととしたサーベイ調査が必要なもの、この研究をさらに一步進める方向性を示したとも言える。

また、スポーツ選手の年齢については、1992年のバルセロナと2020年（実際には21年）の東京でのオリンピックにおける選手の年齢についてのデータを元にした、スポーツ選手のピーク年齢についての研究 (Chomik and Jacinto, 2021) なども行われており、今後こうした方面にも応用が可能だと考える。

なお筆者自身はこの研究の意義として、競技者としてそれなりのレベルを持ちつつも、アマチュアとして他の仕事をしながら競技を続けてきた人間として、一般的の様々な競技の愛好家に対しても、年齢による衰えを感じつつ、長く競技を続け、楽しむにはどうするべきか、について、何らかの示唆を与えることができたのではないかと考えている。

## 5-3 自分の衰えとどうつきあうか

最後に、自分の選手としての衰えに向き合い、かつてのように無敵ではなくなった後も競技を続けた偉大な柔道

家の発言を引用する。オリンピックで3連覇を果たした野村忠宏は、多くの選手が衰えを自覚するとともに競技を引退するにもかかわらず、4度目のオリンピックへの道が絶たれても現役を続けたが、その理由を以下のように述べている（金沢, 2025）。

度重なる怪我に加え、肉体の衰えも隠し切れなくなり、「もうチャンピオンを目指すことはできない」と覚悟しました。「かつてのような華やかな舞台にはもう戻れないのか」と思うと、寂しくなる思いもありました。

ただ、私には「柔道を極めたい」という、新たな「目的」が芽生えました。肉体が全盛期のように動かなくなる中で、その分、柔道を深く考えるようになりました。

新たなチャレンジや新たな出会いが増え、「チャンピオンになる」ことを目的として柔道に精進していたころよりも、もっと柔道のことがわかってきたと感じるようになりました。たとえオリンピックに出られなくても、私が柔道に対して「目指すもの」は決してなくならない。そして明確な目的がある以上、そこに向けて邁進することができる。

実は筆者が本稿を書き始めた、個人的な問題意識として、「自分は今後、衰えと向き合いながらどのようにチェスとつきあっていくべきなのか」という問い合わせがあった。野村の姿勢はこの個人的な問い合わせを考えるにあたり、大変重要な示唆を与えてくれる。彼のような世界的な、あるいは歴史的な名選手と自分を比べるのはおこがましいが、そして「チェスを極めたい」などという野望は全く持っていないが、衰えを感じつつも、野村が言うようにチェスというゲームについてさらに深く考えたり、他のプレイヤーたちと交流したりしていくことで、今後もチェスと関わりを続けていくのだろう。

## エピローグ：執筆を振り返って／今後に向けて

最後に、本稿を書き終えての筆者の気持ちについて、少しだけ加筆をさせて頂きたい。筆者は本稿の中で、自分自身のプレイヤーとしての衰えという、自分ではあまり目を向けたくないテーマをあえて自分で振り返ることを通して、チェスにおいて重要な能力とは何か、を考えることができたように思う。チェスプレイヤーは試合が終わると常に、「ここでああやつたらどうなったのかな？」ということを対局者同士で、あるいは一人で考え、その反省を次の試合に生かしていくわけだが、本稿の執筆は、それをさらにメタの次元で行うような作業であった。

筆者は今後もチェスについて、今度は若手の成長など、もう少し明るいテーマについて、研究を続けたいと考えているが、その過程で誰かにインタビューをしたり、観察したりする場合も、「元日本チャンピオンでFIDEマスターのA」ということを多くの相手は知っているわけであり、そのような背景を持った人間として、研究対象の選手達とつきあい、場合によっては彼らの成長を手伝うことになるだろう。その意味において筆者の今後のチェス研究は、オートエスノグラフィの要素を持ち続けるであろうし、そう考えた場合、自分自身という研究対象は、最初の一歩として非常に適切なものだったと言えるだろう。もちろん、今後もチェスをテーマに研究を進めていくことになれば、研究対象も広がるだろうし、また自分自身が他のプレイヤーや関係者にどのように見られているのか<sup>23</sup>、についても考えるなど、研究を深め、そして広げていければと思っている。

最後に分析者としての筆者から、もし A が今後もプレイヤーとしてチェスに関わっていきたいのだとしたら、こんなことを勧める、という「アドバイス」をもって、結びとしたい。一日に何時間かトレーニングをしたり、最新の序盤を覚えたり、あるいはコーチに教わったり、といったことは難しい以上、A は能力面での自分の衰えと向き合うと同時に、自身のチェスに対するマインドセットを変えていく必要があるだろう。かつて旧ユーゴスラビアの名プレイヤー、グリゴリッチ（2003）は自身のゲーム集の英語版に「私は駒を相手に指す（I play against pieces）」というタイトルをつけた。つまり、相手が誰であろうと相手のことは考えず、とにかく盤上において最善を尽くす、という意味である。

こうした姿勢は今の A にとって、全盛期以上に必要となるだろう。チェスというゲームは、片方が勝てばもう一方は負けるわけで、自明なことではあるが平均すれば勝率は 5 割である。以前は勝つことの方がずっと多かったかもしれないが、現在の弱くなった自分を受け入れて謙虚になること、そしてとにかくチェスをすること自体に集中することが、A がこれから「第二のチェス人生」を楽しむために一番大切なことかもしれない。

それと同時に、シンガポールの N 選手の、チェスの試合をアニメの展開に例えてしまうような柔軟な発想も、A にとって、チェスとの向き合い方を考えるためのヒントとなるのではないだろうか。年齢を問わず、そんな「先生」がたくさんいるチェスの世界は、やはり魅力的である。

先ほど触れた柔道の野村選手やグリゴリッチのような、大家のいうことを実行することは難しいが、彼らの境地に近づこうと努力するのと並行して、こうした日々の経験からもいろいろなことを学び、そしてチェスをすること、あるいはその場所にいること自体を楽しめるようになれば、今後も A はチェスを続けていけるだろうし、周囲のプレイヤーや関係者たちにも何かを与え続けることができるだろう。

## 参考文献一覧

### 【英語文献】

- Adams, T. E. and Herrman, A. F. (2020). Expanding Our Autoethnographic Future, *Journal of Autoethnography*, 1 (1), 1–8. <https://doi.org/10.1525/joae.2020.1.1.1>
- Charness, N. (1981). Visual Short-term Memory and Aging in Chess Players, *Journal of Gerontology*, 36(5), 615-619. <https://doi.org/10.1093/geronj/36.5.615>
- Chomik, R. and Jacinto, M. (2021). Peak Performance Age in Sport, CEPAR Fact Sheet, Australian Research Council (ARC) Centre of Excellence in Population Ageing Research, <https://cepar.edu.au/sites/default/files/peak-performance-age-sport.pdf>
- Denzin, N. K. (1985). Emotion as Lived Experience, *Symbolic Interaction*, 8(2), 223-240. <https://doi.org/10.1525/si.1985.8.2.223>
- Glogoric, Svetozar. (2003). *I Play Against Pieces*, Batsford.
- Harley, T. (n.d.). Chess. Trevor Harley Website. <https://www.trevorharley.com/chess.html>.
- Hayano, David M. (1977). The Professional Poker Player: Career Identification and the Problem of Respectability, *Social Problems*, 24(5), 556-564. <https://doi.org/10.2307/800125>
- Hayano, David M. (1979). Auto-Ethnography: Paradigms, Problems, and Prospects, *Human Organization*, 38(1), 99-104. <https://doi.org/10.17730/humo.38.1.u761n5601t4g318v>
- Hayano, David M. (1982). *Poker Faces: The Life and Work of Professional Card Players*, University of California Press.
- Hymer, B. (2021a). Chess – An Older Person’s Game? Chessable Blog, March 2. <https://www.chessable.com/blog/chess-an-older-persons-game/>
- Hymer, B. (2021b). The Aging Chess Player – Revisited. Chessable Blog, June 11. <https://www.chessable.com/blog/the-aging-chess-player-revisited/>
- Jensen, M. (2023). At What Age Do Chess Players Peak? Chess.com website, August 3. <https://www.chess.com/article/view/chess-players-peak>
- Murman, D. L. (2015). The Impact of Age on Cognition. *Seminars In Hearing*, 36(3), 111-121. <https://doi.org/10.1055/s-0035-1555115>
- Sadler, M. and Regan, N. (2019). Game Changer: AlphaZero’s Groundbreaking Chess Strategies and the Promise of AI, *New In Chess*.
- Smerdon, D. (2022). The effect of masks on cognitive performance, *PNAS*, 119 (49), <https://doi.org/10.1073/pnas.2206528119>
- Shi, XJ., Wang, YR., Wu, YP, and Li, JP. (2023). The effect of the leisure activities based on chess and cards for improving cognition of older adults: study protocol for a cluster randomized controlled trial, *Trials* 24 (484). <https://doi.org/10.1186/s13063-023-07528-1>
- Strittmatter, A., Sundeb, U., and Zegner, D. (2020). Life cycle patterns of cognitive performance over the long run, *PNAS* 117 (44), 27255-27261. [www.pnas.org/cgi/doi/10.1073/pnas.2006653117](https://doi.org/10.1073/pnas.2006653117)
- Ten Geuzendam, Dirk Jan. (2025). Mental Coach Paddy Upton’s One or Two Percent. *New In Chess Magazine*, 1, 34-35.
- Ten Geuzendam, Dirk Jan, and Grzegorz Gajewski. (2025). A Big Bang Theory. *New In Chess Magazine*, 5, 14-45.
- Tran-Duy, A., Smerdon, D. C., and Clarke P. M. (2018). Longevity of outstanding sporting achievers: Mind versus muscle, *PLOS*, May 3. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0196938>

### 【日本語文献】

- 熱田敬子 (2013) 「当事者研究—「自分自身とともに」見いだす—」藤田結子・北村文 (編)『現代エスノグラフィー』、74-79 頁。
- 石原真衣 (2020) 『〈沈黙〉の自伝的民族誌 (オートエスノグラフィー) ——サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会。
- 石原真衣 (2022) 「〈沈黙〉が架橋する——弔いの人類学とケアし合うオートエスノグラフィへむけて」『文化人類学』87 (2)、206-223 頁。
- 石原真衣・横道誠 (2023) 「当事者研究からオートエスノグラフィーへ／オートエスノグラフィーから当事者研究へ」『パハロス』4、1-26 頁。
- 井本由紀 (2013) 「オートエスノグラフィー—調査者が自己を調査する—」藤田結子・北村文 (編)『現代エスノグラフィー』、104-111 頁。
- 小川さやか (2019) 「SNS で紡がれる集合的なオートエスノグラフィ——香港のタンザニア人を事例として」『文化人類学』84 (2)、172-191 頁。 [https://doi.org/10.14890/jjcanth.84.2\\_172](https://doi.org/10.14890/jjcanth.84.2_172)
- 金沢景敏 (2025) 「【伝説的アスリートが語る】加齢による「衰え」を乗り越える思考法」ダイアモンド・オンライン (ウェブサイト)。 <https://diamond.jp/articles/-/369726>
- 川口幸大 (2019) 「東北の関西人——自己／他者認識についてのオートエスノグラフィ」『文化人類学』84 (2)、153-171 頁。 [https://doi.org/10.14890/jjcanth.84.2\\_153](https://doi.org/10.14890/jjcanth.84.2_153)
- 北村毅 (2022) 「序・特集オートエスノグラフィで拓く感情と歴史」『文化人類学』87 (2)、191-205 頁。 [https://doi.org/10.14890/jjcanth.87.2\\_191](https://doi.org/10.14890/jjcanth.87.2_191)
- 鈴木裕之 (2015) 『恋する文化人類学者——結婚を通して異文化を理解する』世界思想社。
- 土元哲平 (2022) 『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』ナカニシヤ出版。
- 土元哲平・桂悠介・サトウタツヤ (編) (2025) 『オートエスノグラフィー・マッピング——「私」からはじめる研究手法を知るための地図』新曜社。

藤田結子・北村文（編）（2023）『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社。  
 リーベレス ファビオ（2020）『ストレンジャーの人類学—移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店。  
 渡辺暁（2023）「『チェス研究』序論—チェスを専門としない最強 AI・AlphaZero はチェス界をどう変えたのか」『コモンズ』4, 29-43 頁。  
[https://doi.org/10.57298/commons.2024.3\\_29](https://doi.org/10.57298/commons.2024.3_29)

<sup>1</sup> また、かつてチェスの能力は、AI の性能を測る一種のベンチマークとしても活用されていた。人類最強と言われたプレイヤーがはじめて公のマッチで負け越し、「人類の敗北」として話題になったのが 1997 年のことであったが、その後もチェスのソフトは進化を続け、公の場でチェスのソフトが人間（元世界チャンピオン）に敗れたのは、2005 年が最後とされている。現在では AI はチェスの実力で人間のプレイヤーを凌駕しており、世界トップクラスのプレイヤーが、早指しとはいえ、AI に駒落ち（ルックやナイトなどの駒を最初から取り除いた状態から試合を始めること）で大幅に負け越している。

なお、人間と AI が戦うという時代は 20 年前に終わったが、AI の深化はその後も続いている。この点に関する最もドラスティックな事件は、DeepMind 社の Alpha Zero の登場であると言いつつもよいだろう。チェスだけでなく、囲碁や将棋といった別のボードゲームもプレイする、汎用 AI として開発された AlphaZero は、自己学習を繰り返しただけで、それまで最強と言われた AI に圧倒的な差で勝利した。（この AlphaZero については、Sadler and Regan（2019）および、渡辺（2022）を参照されたい。）

AlphaZero の登場は、その進化版であるタンパク質解析用 AI、AlphaFold や、古代の碑文の復元に用いられる Aeneas など、様々な分野に転用され、様々な学問分野に応用されていることも特筆すべきである。（周知の通りであるが、AlphaFold の科学への貢献は、開発者のデミス・ハサビスに 2024 年のノーベル化学賞をもたらした。）

<sup>2</sup> ハイマーは続くブログで、同じく心理学者でチェス愛好家のハーリーの「62 歳の今の方が 26 歳の頃の、レーティングも高かった自分よりもよいプレイヤーだと思う」との意見を紹介し、年長者の思考のメリットについて説いている（Hymer, 2021b）。なお、ハーリーは自身のウェブサイトで、チェスの上達法や、心理学とチェスの関わりについて述べている（Harley, n.d.）。

<sup>3</sup> 日本で「タイトルにオートエスノグラフィーが冠された日本ではじめての書籍（石原・横道, 2023, p 9）」である石原（2020）が出版されたのと同じ年に、米国ではオートエスノグラフィの雑誌が刊行されていることは、両国の間の大きな差を感じさせる。ただし近年においては、次の注で示すように、多くのオートエスノグラフィあるいはその要素を含んだ研究が発表されるようになって来ている。

<sup>4</sup> 日本語でオートエスノグラフィとして書かれた論文としては、沖潮（原田）（2013）、川口（2019）、小川（2019）、北村を編者とする 2022 年の『文化人類学』の特集号に収められた諸論文（石原（2022）を含む）などが、またモノグラフとしては、鈴木（2015）、リーベレス（2020）、石原（2020）、土元（2022）などが出ている。さらに、オートエスノグラフィとは何か、については、これらのオートエスノグラフィの多くの理論編で論じられているほか、井本（2013）、北村（2022）、土元・桂・サトウ（2025）といった、手法そのものについての論考も多く書かれている。また、石原と文学研究者の横道による対談（石原・横道, 2023: 敷密に言えば対談の文字起こしに加筆したもの）も、石原が行ってきたオートエスノグラフィと、横道が行ってきた当事者研究をつなぐ、重要な論考といえる。

<sup>5</sup> 当事者研究というのはもともと、体系的な学問というより、共通の悩みを抱えた人たちによるセルフヘルプの試みとしてはじまつたものであり(熱田, 2013, p.74)、他の様々な分野にも示唆を与えるような素晴らしい論考が多々刊行されている。当事者という言葉自体、当事者研究という分野が確立することで一定の意味を持つようになっているが、ここではシンプルに、チェスをやる本人、という程度の意味で使うこととする。

<sup>6</sup> チェスのタイトル(称号)にはこのFIDEマスター以外に、グランドマスター(GM)・インターナショナルマスター(IM)・キャンディーデートマスター(CM)の3つがあり、それぞれの女性版と合わせて8つのタイトルがある。

<sup>7</sup> なお、AIの強さはこの評価関数の性能にかかっていると言っても過言ではない。かつて人間とAIが「勝負」を繰り広げていた時代、先を読む能力では絶対に敵わない人間サイドが勝つのは、AIが致命的な評価のミスを犯し、それをうまく人間サイドがとがめたときであった。(1996年のIBMコンピューターDeepBlueと世界チャンピオン、カスパロフのマッチの第6局目などは、その良い例である〔カスパロフが敗れたのはその翌年のマッチ〕。)

<sup>8</sup> このchess.com主催のTitled Tuesdayは近年のチェスの「民主化」を象徴するようなイベントで、毎週火曜日(日本時間では水曜の未明)に行われ、世界チェス連盟あるいは各国のマスターのタイトルを保持するものなら誰でも参加することができる(2026年1月時点)。出場選手は数百人規模であるが、世界ナンバー1のカールセンやナンバー2のヒカル・ナカムラ選手がほぼ毎週のように出場し、世界中の腕自慢と対戦するのである。二人は現在30代だが、彼らの上の世代においては、世界のトップクラスがこのような(ほぼ)誰でも参加できるイベントに出るようなことは、ほぼ皆無であった。彼らがチェスの普及に果たした役割についても、いつか稿を改めて論じたい。

<sup>9</sup> [https://www.365chess.com/players/Akira\\_Watanabe](https://www.365chess.com/players/Akira_Watanabe)

<sup>10</sup> レーティングの点数は、プロテニスのランキングのベースとなるポイントのように時間の経過と共に失効するものではないため、チェスを指していない間も減ることはない。そのため実力が明らかに衰えていたにもかかわらず、Aのレーティングの点数は最後に公式戦に出場した11年前のままであった。

<sup>11</sup> 誰にでも手に入る中では最強と言われるStockfishというAIソフトによると、具体的には24.Ra6としてc6のポーンを狙う手が良かったようである。筆者が気についていたのは24...Qxb4とポーンを取る手であるが、その手に對してはa6のルックの横利きを生かして25.d5!とポーンを進める手があって勝ちだった。ただしAIの評価では、一番自然な24.Qb3という手も、積極的な攻めの手である24.Ra6とほぼ同点で、いずれにせよ自然な手を指しておけば、優勢を維持することができた。

<sup>12</sup> 2-1から2-2に至る手順は以下の通りである: 32. g4! h3 33. gxf5 Rxf5 34.Nxe4 Qg6 35. Rxf7+ Rxf7 36. Ng3 Kh6 37. e4

<sup>13</sup> なお、ゲームの後に相手と少し局面を見直したが(将棋や囲碁で言う感想戦: チェスではanalysisあるいはpost mortemと言う)、その時も相手は堂々と読み筋を披露し、「自分(黒)のナイトの方が白のナイトより強いはずだからこちらが有利だ」などと述べていた。もちろん客観的に見れば難しい局面が続いていたわけだが、終始

自信満々だった彼の態度、そして最後に一言、「あまりこういうゲームは指したことがなかった」と話していたことが、とても印象に残っている。

<sup>14</sup> 実戦は 22. Qg3 Rxg5 23. Qxg5 Qxh3 で白投了となった。

<sup>15</sup> 22. Bh6 g6 23. Qg3 Rf6 24. Bg5 Re6 25. Qh4 とそしておけば、h ファイルからの攻めが受からなかった。

<sup>16</sup> この局面は、クイーンで g4 のポーンを狙った黒の手に対し、白が g2 にいたキングを g3 に上がり、自らポーンを守りつつ、攻めに参加する姿勢を見せたところである。(念のために書き添えれば、このキングを上がった手は 41 手目、つまり当時のルールで持ち時間が追加された直後であった。) ここで黒は、最も自然に思われる 41...d2 と指し、ポーンの昇格を見せた。これに対し、白は 42.Qg5+ とし、繰り返しによる引き分けに持ち込むしかないように見えるが、よく手が見えた当時の A は 42.Rb1!! というワナを用意していた。黒がもし 42...Qxb1 とルックをとると、43.g5+ Kh5 44.Qe2 # とし、今ポーンを進めたことによってできた e2 の隙についてチェックメイトに持ち込むことができる。そこで黒は 42...Rf5 としたが、以下、43. Rxd1 Rxe5 44. fxe5 c3 45. d7 c2 46. d8=Q cxd1=Q と一本道に進み、1 手早くクイーンを作った白は、47. Qf8+ としてチェックメイトに持ち込むことができる。直線的な手順とは言え、当時の A の実力を示す好手順だと言えるだろう。

<sup>17</sup> この試合の棋譜はこちらの大会のライブ中継サイトから、第 3 ラウンド 2 番ボードを選ぶことで、見ることができる。(Akira Watanabe-Wayan I, <https://view.livechesscloud.com/-dc4cf7d-e140-4b30-8d7d-1003bdd36618>, 最終アクセス 2025 年 11 月 17 日)

<sup>18</sup> 図の局面は白が 27. Qf4 としたところであるが、ここで筆者が前から考えていた手は、27... Qe7 として h4 のポーンを狙い、28. g5 と守らせておいて 28... Rc8 とし、ルックを活用していく手で、そうなれば確実に優勢であった。しかし実戦ではより安全にとクイーン交換を狙って 27... Qc4 をしてしまい、その後もナイトを元の e5 に引いておけば優勢だったにも関わらず、「ハンドルとブレーキが同時に壊れた」とでも形容するしかないような、説明不可能な手を続け、相手ルックの侵入そしてそれに続くポーンの前進を許して自滅してしまった。(終局までの手順は以下の通り: 28. Qxc4 Nxc4 29. b3 Nd2 30. Rf6 Ne4 31. Bxe4 Rxe4 32. Rxd6 Rxg4 33. Rd8+ Kg7 34. d6 Kf6 35. Re8 1-0)

<sup>19</sup> ご家族と本人が一緒にいるところを見つけ、興奮冷めやらぬ、といった様子の彼女に、“You deserve it, congratulations!”と言ったら、本人にもご家族にも大変喜ばれた。

<sup>20</sup> このときの A はまだ 30 代で、最盛期は過ぎたとは言え、それなりの実力を保持していた。なお相手は、当時 15 歳だった K さんで、その頃から強かったがその後さらに実力をつけ、オリンピアードにも日本代表として出場した。

<sup>21</sup> 棋譜は以下の通りである。22... e4 23. Bh5 g6 24. Qg3 Bg7 25. f5 Be5 26. Qh4 gxh5 27. f6 Kh8 28. Qxh5 Rg8 29. Bg5 Qd7 30. h3 Nc2 31. Qh4 Na1 32. Nd4 Bxd4 33. Rxd4 Nxb3 34. Rxe4 Nc5 35. Re7 b3 36. Qh5 Qf5 37.

Rxf5 Bxf5 38. Bc1 Bg6 39. Qe2 Nxa4 40. c5 Nxc5 41. h4 Nd3 42. h5 Nxc1 43. Qf3 Bxh5 この局面で白の投了となつたが、44. Qxh5 b2 45. Rxf7 としても、本文に書いたように 45... b1=Q としてクイーンを作り、キング前の h7 のポーンを守つて勝ちとなる。

<sup>22</sup> とはいへ、負けて悔しいのは誰でも同じである。2025 年の上半期のチェス界で一番話題となつた試合は、現在世界最強のカールセン（数年前に世界チャンピオンのタイトルを返上したが、レーティングでは今も他に大差をつけてトップである）が、現世界チャンピオンのグケシュに、必勝の局面から逆転され、思わず机をたたいて悔しがつた、というエピソードであった。但しこの件についてカールセン自身は、「チェスにとっては、そして大会に（話題・宣伝になって）いいことだ」とも言つてゐる。（Ten Geuzendam and Gajewski, 2025, pp.14-18, 32-36）。

<sup>23</sup> この点については、東京科学大学社会人間科学コース大学院生の見城貴大氏にご指摘頂いたことを、感謝と共に記しておく。

Title

## 島岡達三の縄文象嵌 —「個性」「無名性」という観点から

Name

佐々 風太

### 抄録

本稿では、民藝運動の陶芸家・島岡達三の文様、「縄文象嵌」について整理・考察する。この整理・考察を通して、これまで研究の蓄積が手薄であった、縄文象嵌の特色を明らかにする。また、縄文象嵌と密接に関わる、島岡の作陶における「個性」と「無名性」の問題について、明らかにする。

まず、縄文象嵌の成立過程について、島岡の回想や、当時の濱田の評価などを手がかりとしながら確認する。これにより、縄文象嵌の成立に、「個性」と「無名性」の止揚という島岡の問題意識が深く関わっていたことが明らかになる。

続いて、縄文象嵌と、そこに追加される釉薬流し掛けなどの関係（すなわち島岡作品における「地」と「図」の関係）を確認する。これにより、島岡が縄文象嵌という独自の文様をある種の背景（「地」）として位置付けていたことが明らかとなる。そして、「個性」を「無名」にすることで深い「個性」を生もうとする島岡の問題意識と、縄文象嵌を「地」とすることで控えめながら独自の作風へ至ろうとする島岡の志向の、構造の共通性が明らかになる。

さらに、こうした島岡の態度は、縄文象嵌の着想の源となった縄文土器と島岡の関係性にも関わっていた。本稿ではこの点についても一考し、島岡が「個性」と「無名性」を止揚できる文様として縄文象嵌を生み出す過程は、縄文から「図」としての側面を捨象し、「地」としての縄文を展開していく過程でもあったことが分かる。また、島岡が自作や蒐集において実は無文の造形を好んでいたことにも触れ、この志向と「地」としての縄文象嵌の関連性について考察する。

以上のように、島岡の縄文象嵌には、「無名性」と「個性」という二つの命題の往還の問題が、一貫して深く関わっている。この問題は、縄文象嵌の創出、縄文象嵌作品の作風の広がり（釉薬流し掛けなど）、島岡の古作への向き合い方など、島岡の活動をめぐる各所に特徴的なものであった。

キーワード：民藝運動、島岡達三、柳宗悦、濱田庄司、陶磁器

Title

## **The Rope-Impressed Inlay Patterns of Shimaoka Tatsuzo: From the Perspective of “Individuality” and “Anonymity”**

Name

**Futa Sasa**

### **Abstract**

This paper aims to clarify the characteristics of the rope-impressed inlay patterns (Jomon-zogan) of the potter Shimaoka Tatsuzo, for which there has been little accumulated research to date. Additionally, I clarify the issues of “individuality” and “anonymity” in Shimaoka’s pottery, which were closely related to Jomon-zogan.

First, I confirm the process through which Jomon-zogan was established. This makes it clear that this establishment was deeply connected to Shimaoka’s awareness of the issue of sublating “individuality” and “anonymity.”

Next, I examine the relationship between Jomon-zogan and the decoration added to it. This makes it clear that Shimaoka positioned the unique design of Jomon-zogan as a kind of background (the “ground”). I also analyze the structural commonality between Shimaoka’s awareness of the issue of trying to create deep “individuality” by making “individuality” “anonymous,” and his desire to achieve a modest yet unique style by using Jomon-zogan as the “ground.” Furthermore, I clarify that his approach was also related to his relationship with Jomon pottery, which inspired his concept of Jomon-zogan.

From these considerations, my conclusion is that Shimaoka’s Jomon-zogan is consistently and deeply related to the issue of the interaction between the two concepts of “anonymity” and “individuality.” This issue was characteristic of various aspects of Shimaoka’s activities, such as creating Jomon-zogan, expanding the style of Jomon-zogan works, and Shimaoka’s attitude toward old pottery.

Keyword: Mingei (folk craft) movement, Shimaoka Tatsuzo, Yanagi Muneyoshi, Hamada Shoji, ceramics

## 1 はじめに

本稿では、近現代日本を代表する陶芸家・島岡達三（1919-2007）の文様、「縄文象嵌」（図1）について整理・考察する。この整理・考察を通して、これまで研究の蓄積が手薄であった、縄文象嵌の特色を明らかにする。また、縄文象嵌と密接に関わる、島岡の作陶における「個性」と「無名性」の問題について、明らかにする。

島岡の略歴は以下の通りである。1919年、組紐を作る職人・島岡米吉の家に生まれ、1939年、東京工業大学窯業学科（現・東京科学大学物質理工学院材料系）に入学する。窯業学科は、同大学に当時存在した、セラミックスなどを専門とする理工系学科である。前身にあたる東京高等工業学校窯業科からは、濱田庄司（1894-1978）、河井寛次郎（1890-1966）という、民藝運動<sup>1</sup>第一世代の陶芸家が輩出された。

窯業学科入学の頃<sup>2</sup>、島岡は東京都目黒区（駒場）にある日本民藝館を訪れる。同館は、民藝運動を牽引した宗教哲学者・柳宗悦（1889-1961）が濱田や河井らと共に創設した美術館で、1936年に開館したばかりであった。島岡は同館で、古作や、濱田や河井の作品と出会う。また、柳の提唱する「無名性」に魅せられる（杉山, 2013, 頁数なし）。

そもそも島岡が窯業学科を選択したのは、受験時に苦手科目の少ないのが同学科だったためであったが（日本放送協会編, 1996, p.122）、結果として島岡は窯業そして作陶の道に出会う。さらに日本民藝館での上述のような出会いが加わることで、島岡は陶芸家としての自身の方向性を見出した。「無名」とは民藝運動における重要な概念の一つである。柳は、1928年に刊行された主著『工藝の道』（ぐりりあそさて）で、「無名な作者は、自らの名において、示さねばならぬ何物をも持ち合せな」い、「そこには黙せる必然のみあって、言葉多き主張はない」などと述べた（柳, 2005, pp.44-45）。これは、「幸にも執着すべき個性を有たな」い作り手の描写であり（柳, 2005, p.44）、近代作家的ないわゆる自己表現とは異なる制作態度の描写である。個人の力（「個性」）を超えた美の在り方を説く柳のこの種の言葉に、島岡は感動した。必ずしも主体的に作陶を選んだ訳ではない自分にも、良質な作品の創造は約束されている、という感動であった。柳の言葉は「干天の慈雨にも等しいもの」だったと島岡は回想している（日本放送協会編, 1996, p.123）。

島岡は「民芸こそ自分の進む道」（日本放送協会編, 1996, p.124）と決意し、大学の先輩でもある濱田に弟子入りを志願し、卒業後の弟子入りを承諾される<sup>3</sup>。太平洋戦争の影響による繰り上げ卒業、ミャンマー出征などを経て、終戦後の1946年、栃木県（益子）で作陶する濱田に入門する。濱田の下で3年間の修行を終えた後は、1950年栃木県窯業指導所に就職し、1953年同指導所を退職して濱田の窯のそばに工房を築く。1954年初窯を焚き、独立した作家としての道を歩み始める。

独自の文様である縄文象嵌を創出したのは、1950年代半ばのことである。以後2007年に死去するまで、縄文象嵌を核とする作陶を益子で続けた。また、海外からの陶芸家との交流も深かったほか（島岡, 1976, p.138）、自らもカナダ、アメリカ、ドイツなどを度々訪問し、国際的に作品発表に取り組んだ（栃木県立美術館ほか編, 1994, pp.145-147）。

さて、縄文象嵌の概要は以下の通りである。縄文象嵌は、朝鮮半島の陶磁器に見られる象嵌の技法と、縄文土器に見られる文様の施し方を組み合わせたものである。象嵌は、作品の素地の表面に陰刻を施し（凹みをつけ）、そこに化粧土と呼ばれる別の土を埋め込んでいく装飾技法である。島岡の場合、陰刻を施す工程を、組紐師であった父の作る紐を転がしたり、押し当てたりして行った。紐によって、素地は縄目模様に窪む。そこに化粧土を埋め込むという工程で象嵌するために、この装飾は縄文象嵌（あるいは象嵌縄文）と呼ばれる。

1954年の独立後、島岡は、何を制作しても作品が濱田風になってしまうという問題に直面した。「そういう弟子

が一人くらいいてもいいのではないか」とも考えたが（水尾, 2008, p.8）、濱田はあくまで、濱田の真似でない「個性」あるものを早く作るようにと島岡を諭し続けた。こうした経緯を経て、1950年代半ば、島岡独自の文様としての縄文象嵌が創出された。

縄文象嵌は、斜線状の縄文（図1）、ヘリンボーン状の縄文、ドット状の縄文などを基調とし（筆谷・島岡・佐々, 2025, p.32、ほか）、紐を転がす方向などによって多様な展開を示す。島岡は「相も变らずの象嵌屋」（島岡ほか, 1962, p.26）などと時に自嘲しながら、終生、この文様を作品の装飾に用い続けた。1996年には、「民芸陶器（縄文象嵌）」の重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定される。島岡の作陶においては、縄文象嵌と並行して、刷毛目、練上など様々な手法が試みられているが、縄文象嵌の用いられた作品数が特に多く、この文様は彼の代名詞となっている。

島岡は、日本の近現代工芸の巨匠の一人として、また、民芸運動第二世代を代表する作家として、よく知られる<sup>4</sup>。文献においては、民芸運動、益子の窯業、人間国宝といった文脈で島岡はしばしば言及される。例えば近年では、志賀（2016）、小林（2022）などで、島岡への言及が見られる。とはいえる現時点では、島岡に特化した研究は質量共に不十分である。主要な先行研究として、水尾（2008）、外館（2016）などを挙げることができるが、いずれも島岡の経歴や言葉などをまとめた概説にとどまっており、島岡に関する学術的な研究の蓄積は未だ手薄であると指摘できる。

本稿はこの不足を補完する意義を有し、近現代日本における工芸作家の制作や作品を多角的に検討する一助となるものである。島岡は、縄文土器をはじめとする古作の造形から大きな影響を受け、独自の造形を展開した。この点を検討する本稿は、近現代の日本の作家たちがこうした古作をどのような問題意識と共に受容してきたか、明らかにする上で意義深い。

また、民芸運動研究においても、島岡を検討する意義は大きく、島岡を通して新たな示唆を与えることにつながるはずである。民芸運動は、柳宗悦や濱田庄司といった第一世代の思想と実践を中心に語られることが少なくないが、第二世代の島岡が、第一世代の問題意識をいかに受け継ぎ、展開していったのかを検討することは重要である。本稿では、民芸運動において中核的な概念とされる「無名性」を、作家としての島岡がどのように理解し、具体的にいかなる作品として結実させたのか、考察する。これにより、民芸運動における理念と実践の接続の問題を再考する視座が提供されることが期待される。

なお、本稿の研究成果は、島岡の著作物や関連文献などの調査に基づく。

## 2 縄文象嵌の特色—「個性」と「無名性」の往還

### 2-1 「個性を消す」縄文象嵌

ここから島岡の縄文象嵌について考察を加えていく。まず前提として、縄文象嵌の成立過程について、島岡の回想や、当時の島岡に対する濱田の評価などを手がかりとしながら確認していく。これにより、縄文象嵌の成立に、「個性」と「無名性」をめぐる島岡の問題意識が深く関わっていたことが明らかになる。

従来の論では、縄文象嵌について、島岡の独自性という面を強調する傾向がある（水尾, 2008, p.8、ほか）。これは、縄文象嵌成立前夜（1950年代初め）に関する、島岡自身の語りに由来するところが大きい。島岡は同趣旨のこと

を様々な機会に述べているが、例えば晩年のインタビューではこのように回想している。

そのころ、私は濱田先生そっくりなものを焼いてましたから、二軒隣の濱田先生は窯出しのたびに見に来られて、「島岡さん、早く自分の個性あるものを作らないと駄目だよ」と言われる。それはプレッシャーでした。  
(筆谷監修, 2017, p.40)

先述のように当時の島岡は、何を制作しても作品が濱田風になってしまうという問題に直面していた。濱田はその模倣を戒め、「個性的」な島岡作品を求めた。それに対する応答として、島岡独自の縄文象嵌は生まれた。

ここで留意の必要な点がある。それは、濱田と島岡が「個性」をめぐって対話する際、そこにはやや複雑なニュアンスが含まれていた可能性があるということである。松井(2019)は、濱田ら民藝運動の作家に関して、「自分の小さな個性のままに、新奇さや他のつくり手と違うものを目指したり、芸術性やオリジナリティを発揮しようすることは、避けるべきだとみなされてい」た(p.19)と指摘する。このように、彼らが「個性」を語る際、それは単なる目新しさや新奇性などとは異なる意味合いを含んでいた可能性がある。彼らにとって、深い独自性という意味での「個性」と、安易な新奇性という意味での「個性」は、異なるものであった。

この点を考察する際、島岡が縄文象嵌を生み出した際の、濱田の評価について検討することも重要である。島岡は、濱田の言葉を回想しながら以下のように語っている。

「〔濱田は〕『縄文という手法はあまり自己主張しないいい、織物でいえば紬みたいなもの。象嵌という手法も、削るということでギラギラした生の個性を消していく。二つの工芸的手法を重ねた、非常にうまい方法を考えたな』というようなことをおっしゃいました」〔原文ママ〕(入澤企画制作事務所編, 1996, p.28)

あるいは、次のようにも述べている。

〔濱田は〕「島岡さんの手法は模様を紐に託すと、織りにすれば紬のような、模様にすれば絣のような」と述べられ、自分個人の力じゃなくて、模様を紐に託すという個人の上手下手を超えた非常に工芸的な効果が出る大変旨い手法を考えたものと紹介して頂きました。(島岡・中沢ほか, 1996, p.31)

濱田は縄文象嵌を、織物に類似する技法であると語った。それは濱田によれば、「あまり自己主張しない」「ギラギラした生の個性を消していく」技法であり、「個人の上手下手を超えた」技法(個人性を超えた技法)である。島岡自身も、縄文象嵌は「個性を消していく」技法であると述べている。

先生〔濱田のこと〕は、「島岡さん、いいことを思いつきましたね」と、いわれました。直接絵筆を取って描きますと、自分の力、デッサン力がストレートに出ますが、紐という媒体を使い、転がすということは、これは工芸的手法ですから、私の個性が消されます。(日本放送協会編, 1996, p.127)

「個性を消していく」、「個性が消され」る、というのは、島岡がしばしば残した言葉であったが、先の引用箇所から判断する限り、濱田譲りの語法であった可能性がある。

以上のように、濱田から求められた「個性的」という命題に対する島岡の応答は、「個性を消していく」縄文象

嵌であった。そして、この応答に濱田も肯定的な評価を与えていた。つまり両者の間には、「個性を消す」ことによって「個性的」たりうる（目新しさや新奇性を超えた「個性」の姿がある）という、興味深い問題意識が共有されていたことがうかがえるのである<sup>5</sup>。

冒頭で述べたように島岡は、柳宗悦の提唱した「無名性」を重視した。そこに、一時期濱田の模倣を繰り返した一因もあったと考えられる。先に見た通り「無名」とは、柳によれば、「幸にも執着すべき個性を有たな」い在り方、「自らの名において、示さねばならぬ何物をも持ち合せな」いという在り方、「黙せる必然のみあって、言葉多き主張はない」という在り方であった。以上を踏まえると、島岡が縄文象嵌を生み出した際に模索していたのは、「個性」と「無名性」の止揚とでも呼ぶべきことであったと考えられる。それは、自らの「個性」は、どのような造形であれば「無名性」と矛盾せずに現れるか、という模索であった。

縄文象嵌は、殊更に華やかな文様ではない。技術の巧みさを鑑賞者に殊更に示すような意匠という訳でもない、ごく控えめな文様である。しかし縄文と象嵌の組み合わせは、島岡独自のものである。こうした特徴を持つ縄文象嵌の成立は、「個性」と「無名性」という、一見矛盾するように見える二つの命題の止揚に他ならないものであった。これは、「個性を消す」こと（「無名」化）による、より深い「個性」の出現とも言える。

以上のように、単なる新奇性の追求とは異なる複雑な模索が、縄文象嵌の背景にはあった。島岡独自でありながら、殊更に独自性を主張するのとは異なる姿であることが、縄文象嵌の重要な特徴だったのである<sup>6</sup>。

## 2-2 「地」と「図」の関係と縄文象嵌

続いて、島岡作品における、縄文象嵌と、そこに追加される釉薬流し掛けなどの関係について確認していく。すなわち、島岡作品における「地」（縄文象嵌）と「図」（釉薬流し掛けなど）の関係について、確認していく。これにより、島岡が縄文象嵌という独自の文様を有する種の背景（「地」）として念頭に置いていたことが分かる。「無名性」と「個性」をめぐる島岡の問題意識は、縄文象嵌の「地」としての役割と、密接に関わっている。

島岡は、民藝運動の作家らしく食器などの量産品を基本に制作を行った。そのため、作品点数は著しく多く、晩年の彼の回想によると、総数は1万点以上である（筆谷監修, 2017, p.48）。よってその総覧は困難であるものの、縄文象嵌は、作品の表面を広域あるいは全面的に覆う構成で施されている場合が圧倒的に多いと指摘することができる<sup>7</sup>。また、あわせて特徴的なのは、縄文象嵌で覆われた表面に、さらに加飾を行っていく例が多く見られることである。これは、島岡が自作において縄文象嵌をどのような存在と位置付けていたのか探る上で、重要な手がかりとなる。

この点について検討する際、「図」と「地」の概念を補助線とすることが有効である。廣松ほか編（1998）によれば、「図／地」とは、「知覚的体制化を構成する基本的特徴の一つ」で、「例えば、白紙の上のインクのしみなどを見る場合、しみは知覚意識の焦点に位置し、背景となる白紙に対して浮き上がって見える。前者を「図」、後者を「地」と呼ぶ」（p.873）。この概念を参考にすると、島岡にとって縄文象嵌は基本的に「地」的なるものであったことが分かる。

具体的に、島岡作品の例を検討してみよう。ここでは、島岡の作陶で頻繁に見られる、釉薬流し掛け（流し釉、流文）を用いた作品の例を挙げたい（参考：図2）。釉薬流し掛けは、釉を柄杓などで描くように、作品の表面に流していく技法である。注ぐ量や角度などによって釉の流れ方や溜まり方が変わり、直線状や渦状など、多様な表情を生み出すことができる。これは島岡の代表的手法であるのみならず、益子焼、小代焼（熊本県）、丹波焼（兵庫県）などの民窯でも用いられる。また、濱田庄司、佐久間藤太郎（1900-1976）といった作家も多用するなど、民藝運動に関わった産地や作家らの代表的手法である。

濱田がこの技法を「一瞬プラス六十年」などと呼んだことはよく知られている。流すのは「一瞬」だが、その濶みない実現の背後には、「六十年」もの修練の存在がある、と濱田は言う。濱田は、「出来るだけ意識を抑えて一気に手許まで描き流す」、「六十年間、体で鍛えた業に無意識の影がさしている思いがして、仕事が心持ち楽になってきた」（濱田, 1974, pp.13-14）などと述べた。偶発性の高い、「無意識」的な技法ではあるが、濱田の場合その濶みない線が独自性ともなった。

島岡は釉薬流し掛けについて、「私が濱田庄司に学んだもので、いわゆる益子焼の手法の典型となっている」、「下地の釉薬との色の兼ね合いも大切です」などと紹介している（日本放送協会編, 1996, pp.70-71）。島岡作品の場合、釉は縄文象嵌の上に流されることになり、それが顕著な特徴となっている。例えば1994年に制作された（図2）の作品では、縄文象嵌は益子伝統釉の一つである地釉で一度覆われ、その上に黒釉などが並行線状に流し掛けされている。縄文象嵌は背景として扱われていることが分かる。1976年に制作された《黒釉象嵌流文皿》（栃木県立美術館蔵）、1985年に制作された《地釉象嵌流文皿》（東京科学大学博物館蔵）など、この種の構成の作例は多い（栃木県立美術館ほか編, 1994, p.89、東京工業大学百年記念館編, 2009, p.36）。また、縄文象嵌壺（外側を縄文象嵌で覆った壺）など、縄文象嵌の面が垂直に近いものに釉薬流し掛けが施される場合も多い。この場合、釉はしばしば上から下へ流れ落ち、打掛け（打文）に近い造形にもなる<sup>8</sup>。この種の作品としては、1975年に制作された《黒釉象嵌流文壺》（栃木県立美術館蔵）などが挙げられる（栃木県立美術館ほか編, 1994, p.87）。

島岡は釉薬流し掛けの技法を晩年まで、長きにわたって用い続けた。こうした構成は島岡の作品の中で非常に大きな位置を占めており、彼の作陶を考察する上で手がかりとなる。重要なのは、例えば濱田の場合、流し掛けられた釉のラインに独自性が見出されるが、島岡の場合、第一の独自性は背景の縄文象嵌にある、ということである。様々な島岡作品を普段使いしていたという民藝運動同人の福村豊は、「たとえば縄文の上に流れ釉を激しく打ちかけたり、縄文が下地にあって、上にいろんなものをやる。そのへんの変化というのは、実際に日常生活に使っていると、生き生きとしていて非常にすばらしい」（近藤, 2000, p.67）などと評した。ここまで指摘してきた島岡作品の構造が、島岡の友人の眼にも留まっていたことがうかがえる。そもそも島岡作品は、ほとんどの場合、何らかのかたちで施釉との関係性を持っており、島岡も自身の独自性である縄文象嵌が背景（「下地」「地」）となる構造について、極めて自覚的であったと考えられる（縄文象嵌は施釉の前の素地に施される文様である）。

なお、こうした釉（縄文象嵌という「地」に対する「図」）の延長線上には、盛られる食物などの外在物という存在があると言える。先述の通り、島岡の作陶の中心には、食器などの量産品があった。そこでは縄文象嵌は、食物などの背景（内容物のある種の引き立て役）として機能する。島岡が講師を務めた日本放送協会編（1996）では、縄文象嵌が施された皿に、魚料理や野菜の煮物などの食物が盛り付けられた様子が、見開き頁で大きく紹介されている（pp.132-133）。島岡はここで、自らの作品が使用されることについて、このように述べている。「この写真をご覧になって、用の美というものを少しでも認識していただけたなら、民陶の作家として、真に幸せに思います」、「作家の創造物としての衣は着てますが、本質的には民芸の精神によるものですから、私の作品もまた、実用にされてこそ生きるものだと思っております」（日本放送協会編, 1996, p.132）。日本放送協会編（1996）を再編集した島岡（1998）でも、同じ写真と同趣旨の解説が付されている（pp.101-103）。以上からは、島岡作品が、様々な食物や盛り付け方への高い汎用性を有していることがうかがえるし、島岡がそれについて自覚的であったこともうかがえる<sup>9</sup>。縄文象嵌は、使用者によってもたらされる内容物という「図」の背景にもなり得るもので<sup>10</sup>、言うなれば他者を受け入れることを前提とした文様であった。余白的文様と呼ぶことも可能かもしれない。

換言すると、縄文象嵌は文様であっても、例えば筆による絵付けのように対象化して認識することの難しい姿をしており、むしろ使用者の盲点の中に消えていくところに大きな特色がある。広域あるいは全面的に施される縄文

象嵌は、文様であっても「図」としてはほとんど機能しておらず、「地」へと後退していく特色がある。しばしば陶磁器の過剰な装飾はこうした実用性を削ぎ得る（内容物と容器の装飾が視覚的に干渉し合うため）。しかし島岡作品の場合、縄文象嵌という徹底的な装飾のために、かえって用い易いものになっている、という逆説がある。無文にも似た特徴を縄文象嵌は有している、と形容することも可能であろう。縄文象嵌は、ほとんど無文同然に「図」を引き立たせていくのであり、文様で埋め尽くされた状態は無文に近づくという興味深い逆説が、ここに見られる。

ここでさらに、「地紋」（地文）という概念を補助線とするのが有効である。「地紋」とは、染織品などの生地自体に織られた文様のことである。この種の「地紋」は、有価証券や表彰状などの背景としても用いられる（大日本印刷株式会社編, 1987, p.147）。現在漫画やイラストレーションなどで用いられるスクリーントーンの原型も、昭和時代初期の日本では「地紋」と呼ばれていた（永田, 1996, p.29）。

管見の限り、縄文象嵌を考察する際に「地紋」という概念が用いられた例は一度ある。外館（2006）では、島岡が1974年に制作した縄文象嵌壺について、「本作では、点が網目のように密集した地文となっている」（p.15）と指摘されている。ここでは同作品の縄文象嵌のみを対象に「地紋」（地文）と呼んでいるように見受けられるが、同作品においてのみ縄文象嵌が「地紋」として機能しているのではなく、縄文象嵌自体がそもそも「地紋」として島岡に位置付けられていたものだと言える。それは上で見たように、使用者のもたらす内容物まで視野に入れた「地紋」であり、島岡作品の特色は、こうした縄文象嵌の「地」化にある。

先述の通り、島岡の縄文象嵌創出の背景には、「個性を消す」ことが「個性的」である（「個性」を「無名」化することによる「個性」の出現）という問題意識があった。こうした問題意識から、殊更に華やかではなく、技術の巧みさを鑑賞者に殊更に示すような意匠という訳でもないが、確かな独自性を有した、縄文象嵌が生まれた。さらに島岡は、上で見たように、縄文象嵌を「地」とし、背景へと退却させるという構成を企図した。これは、技術的にはその他の作り手にも再現可能であるが、島岡独自の構成として確立されているため、実質的に島岡にしかできないものであると言える。その点で、より「個性的」な方向性の模索であったと言える。しかし同時に、独自の文様を退却させていくというかたちの、さらに「個性を消す」試み、「無名性」の試みでもあったと見ることができる。縄文象嵌の「地」化は、「個性」を「無名」化するという問題意識と、共通した構造を有しているのである。

以上の通り、縄文象嵌の「地」化は島岡作品の大きな特色である。島岡作品において、埋め尽くすように施された文様は「地」であるために、新たな「図」を受容することが可能になっているのである。彼の作品は、文様であふれているにもかかわらず（あふれているからこそ）、常に新たな「図」を一軸を、あるいは食物などの外在物を一招き入れることが可能となった。縄文象嵌はあくまで「地」であるから、施文の完了は島岡作品にとって単なる完成ではなく、新たな造形の始まりでもある。独自ながら「無名」の存在としての縄文象嵌は、島岡作品を自己完結させず、他者に対して開いていく構造にした<sup>11</sup>。

縄文象嵌の人間国宝に指定される1996年のインタビューでは、縄文象嵌が「個性を消していく」技法だと述べる島岡と、インタビュアーの間に、このようなやり取りが見られる。

一個性を消していく？ それはしかし、ものを表現する作家の行為にとっては矛盾するのではないか？

〔島岡：〕「没個性のようだが、その結果として個性的なものになっているともいえます。〔略〕」（入澤企画制作事務所編, 1996, p.28）

「没個性のようだが、その結果として個性的なものになっている」という言葉には、縄文象嵌の特色が端的に示

されている。民藝運動の作家として直面した、「無名性」（あるいは非個性的個性）という命題に対して島岡の出した解は、第一には新しい控えめな文様を生み出すことであり、第二にはそれを「地」とすることであった、とまとめることができる。

この展開は、逆説的に縄文象嵌の独自性を際立たせることにもつながり、島岡は人間国宝として認められることになる。他方で上述のように、自らが手を尽くした縄文象嵌を「地」としていく（背景へと退却させていく）こと、すなわち独自性のある種の「無名」化も、彼の作品の特徴的な点である。縄文象嵌には、「無名性」と「個性」という二つの命題の往還の問題が、一貫して深く関わっているのである。

### 3 縄文土器への距離と無文への志向

以上のような島岡の問題意識は、縄文象嵌の着想の源となった縄文土器と島岡の関係性にも関わる。この点について、補足的に一考しておこう。

縄文象嵌が、縄文土器の施文方法をルーツの一つに持つことは先に述べた。その経緯は以下の通りである。1950年、濱田の下での修行中、島岡は東京民藝協会の白崎俊次（1921-1984）らの依頼で、学校教材（『古代土器複製標本』ドルメン教材研究所、1950）用の土器レプリカ制作に取り組んだことがあった。レプリカの原型は濱田が作成し、石膏型を用いて量産する工程を島岡が担当した。彼らは各地の博物館や大学で縄文の施文方法を詳しく学んで、レプリカは制作された（品川, 2018a、品川, 2018b、中島, 2025）。

その後独立し、濱田風の作品ばかりを制作してしまうことに悩んだ1950年代半ばの島岡は、レプリカ制作のことを思い出す。島岡は、体得した縄文の施し方と象嵌の技法を組み合わせるという着想に至り、縄文象嵌が創出された。

こうした経緯で独自の文様を生み出した島岡は、当時の民藝運動の中で最も体験的に縄文の造形を理解していた人物の一人であると考えられる。しかし、島岡は縄文土器を好んでいたという訳ではなかった。後年（晩年）のインタビューで、彼はこのように述べている。

名前から分かるように、縄文土器から文様の付け方をいただいています。でもあの生命力があってバイタリティーにあふれた縄文土器をイメージしたわけではありません。〔略〕一、二点縄文土器を持っていますが、第一、あんなの周りに置いておいたら、強さに負けて疲れてしまう。焼き物の本来の美しさは静謐（ひつ）さにあると思っています。（筆谷監修, 2017, p.40）

「あんなの周りに置いておいたら、強さに負けて疲れてしまう」という言葉と共に、縄文土器の造形に対して、ある種の忌避感を表明している。島岡が陶磁器に関して「静謐」という概念を特に好んだことは、島岡の長女・筆谷淑子も回想している（筆谷・島岡・佐々, 2025, p.30ほか）。本稿の議論を踏まえると、「静謐」とは、殊更な自己表現とは異なる造形の、その「無名」の佇まいを表現したものと見ることができるであろう。そして島岡によれば、縄文土器の佇まいは「静謐」ではない。

自作をめぐる作家の発言に関しては、自己演出的な面を含んでいる可能性も、一考されてしかるべきであろう。とはいえ、島岡の縄文が、縄文土器のものよりもオールオーヴァーで平坦なものとなっていたことは確かである。

島岡の縄文象嵌では、縄文は大きなメリハリなく、広域あるいは全面的に施される。そして、その表面は象嵌で均される。島岡が、「個性」と「無名性」を止揚できる文様として縄文象嵌を生み出す過程は、縄文から「図」としての側面を捨象し、「地」としての縄文を展開していく過程でもあった。

なお、先に筆者は、縄文象嵌は無文に似た特徴を有していると述べた。無文とは、言うなれば極まった「地」的造形であり、無装飾なるがゆえに様々なバリエーションの加飾を可能にする造形であり、多様な内容物に汎用性を持つ造形であると言える。こうした造形に、縄文象嵌という文様であふれた造形が近づいていくという逆説は、島岡が好んだのが無文の陶磁器であったという事実と、決して無縁ではないように思われる。水尾（2008）は島岡から聞いた話として、以下のように記している。

島岡は、焼物のなかでは李朝のものに一番惹かれ、なかでも無地が好きだそうだ。白釉の壺は、白のづぶ掛けの優品で、島岡の代表作と言えるが、無地は何と言っても形が生命だし、好む買い手も少ないので、多くは作らない。(p.9)

島岡が実は無文の造形を好んでおり、自作においても、限られた点数ではあるが無文のものを試みていたと語られている。現在東京科学大学博物館に収蔵されている、1977年制作の《白釉水差》(図3)は、ここで紹介されている無文・白色の島岡作品の一種である。1974年制作の《白壺》(栃木県立美術館蔵)なども、類似の作品である(栃木県立美術館ほか編, 1994, p.137)。こうした島岡の無文の作品一解説なしに島岡作品と判別できる人は決して多くないはずである一には、彼の憧れた造形が最も端的に示されていると言える。彼にとって無文は、最も端的な「静謐」「無名」の姿だったのである。彼の縄文象嵌はこうした無文的な在り方を(すなわち、徹底的に控えめで、あらゆる「図」を内包し得る造形を)こそ、目指していた面があったと考えられるのではないか。比喩的に述べるならば、島岡の縄文象嵌は、無文に憧れた文様ではなかったか。

こうした島岡の志向は、蒐集品からもうかがえる。島岡は民藝運動の作家らしく、特に古作の蒐集を重視した(杉山, 2013, 頁数なし)。島岡は、「〔陶芸家の〕勉強のひとつの手段としては、数多くの美しい工芸品を見ることがあります」、「自分の心を打ったものを、できれば入手して身辺におくことです。日々それらとの対話を繰り返して、じっくりとその美の源を汲み取り、自らの創作の養分とするのです」(日本放送協会編, 1996, pp.6-7)と述べている。島岡が特に好んだのが、朝鮮半島の無文の白磁壺(《李朝白磁壺》)などの古作であったことは、島岡製陶所(1998)など、彼が蒐集品を紹介している資料から分かる。島岡は、こうした古作の「静謐」「無名」の佇まいも踏まえながら、無文的文様としての縄文象嵌の在り方、坦々とした「地」としての縄文象嵌の在り方を、模索したと考えられる<sup>12</sup>。

## 4 おわりに

ここまで、島岡の縄文象嵌について考察を加えてきた。まず、縄文象嵌の成立過程について、島岡の回想や、当時の濱田の評価などを手がかりとしながら確認してきた。これにより、縄文象嵌の成立に、「個性」と「無名性」の止揚という島岡の問題意識が深く関わっていたことが明らかになった。

続いて、縄文象嵌と、そこに追加される釉薬流し掛けなどの関係を確認した。すなわち、島岡作品における「地」

(縄文象嵌)と「図」(釉薬流し掛けなど)の関係を確認した。これにより、島岡が縄文象嵌という独自の文様をある種の背景(「地」)として位置付けていたことが明らかとなった。そして、「個性」を「無名」にすることで深い「個性」を生もうとする島岡の問題意識と、縄文象嵌を「地」とすることで控えめながら独自の作風へ至ろうとする島岡の志向の、構造の共通性が明らかになった。

さらに、こうした島岡の態度は、縄文象嵌の着想の源となった縄文土器と島岡の関係性にも関わっていた。本稿ではこの点についても一考し、島岡が「個性」と「無名性」を主張できる文様として縄文象嵌を生み出す過程は、縄文から「図」としての側面を捨象し、「地」としての縄文を展開していく過程でもあったことが分かった。また、島岡が自作や蒐集において実は無文の造形を好んでいたことにも触れ、この志向と「地」(無文的文様)としての縄文象嵌の関連性について考察した。

島岡の縄文象嵌には、「無名性」と「個性」という二つの命題の往還の問題が、一貫して深く関わっている。この問題は、縄文象嵌の創出、縄文象嵌作品の作風の広がり(釉薬流し掛けなど)、島岡の古作への向き合い方など、島岡の活動をめぐる各所に関わるものであった。以上が、本稿から浮かび上がる。

冒頭で述べたように、島岡に特化した研究は質量共に不十分であって、島岡については今後も様々な角度から検討される余地がある。特に、本稿の議論の延長線上で、島岡作品の国際的な位置を検討することは、今後の重要な課題である。先に述べたように、島岡は海外の作家とも交流し、海外での作品発表の機会を多数持っていた。

国際的なものとしての島岡の縄文象嵌を考える際、対照的な存在として、例えば抽象表現主義の画家ジャクソン・ポロック(1912-1956)のオールオーヴァーな画面を想起するのは、さして困難なことではない(二人は概ね同世代でもある)。ポロック作品では画面の自律性が重視され、作品と単なる「壁紙」との間には常に緊張関係があった。1950年代、ポロック作品が、雑誌『VOGUE』(1951年3月号、コンデナスト、1951)においてモデルの背景として使用され、議論を呼んだのは象徴的である。他方で島岡の場合、本稿で見てきたように「無名性」を重視し、縄文象嵌を自律的には存在(完結)しないものと捉え、縄文象嵌を背景(「地」)にしていった。島岡は独自のある種の画面を、積極的に「壁紙」にしたと言える。こうした異同は興味深い<sup>13</sup>。

島岡の問題意識や作風が、彼や民藝運動の作家に特有のものなのか、あるいはそこに地域的な特徴さえ見出すことができるのか、という点については慎重な検討を要する。しかしながら、今後このように、戦後の国際的な造形文化の中で島岡の特色を検討することは重要であると思われる。それは、単に島岡に関する研究を多面化するのみならず、民藝運動の位置、ひいては日本やアジアの工芸の位置をめぐる、新たな視座をもたらし得るはずである。

## 付記

本稿は、「表象文化論学会 第16回研究発表集会」(関西大学、2022年11月12日)における口頭発表(佐々風太「島岡達三の象嵌縄文に関する考察—「地」としての紋様という観点から」)の内容に、大幅な加筆修正を施したものである。

## 図版



図1 島岡達三の縄文象嵌（筆者撮影）

図2 島岡達三《地釉象嵌流文皿》東京科学大学博物館蔵  
画像引用元：東京工業大学百年記念館編, 2009, p.40図3 島岡達三《白釉水指》東京科学大学博物館蔵  
画像引用元：東京工業大学百年記念館編, 2009, p.23

## 参考文献

- 青木宏（1994）「清水雅コレクションから見た島岡達三の陶芸」、栃木県立美術館ほか編『清水雅コレクション寄贈記念 島岡達三展』栃木県立美術館、10-14 頁。
- 入澤企画制作事務所編（1996）「特集・陶芸家の肖像 島岡達三」、『季刊 陶磁郎』（5）、双葉社、26-29 頁。
- 筧菜奈子（2017）「ジャクソン・ポロックの作品の装飾的受容」、『ディアファーネースー芸術と思想』4 号、京都大学大学院人間・環境学研究科岡田温司研究室、51-70 頁。
- 小林真理（2022）『陶芸の美』芸術新聞社。
- 近藤京嗣（2000）「柳宗悦に火を灯された人々（66）座談会 島岡達三・益子語り（2）」、日本陶磁協会『陶説』571 号、日本陶磁協会、60-67 頁。
- 近藤京嗣（2008）「さようなら島岡さん」、『民藝』665 号、日本民藝協会、14-16 頁。
- 志賀直邦（2016）『民藝の歴史』ちくま学芸文庫。
- 品川欣也（2018a）「教材として作られた縄文土器」、東京国立博物館ほか編『縄文—1万年の美の鼓動』東京国立博物館、226-227 頁。
- 品川欣也（2018b）「206 縄文土器（模造）」「207 深鉢形土器」（作品解説）、東京国立博物館ほか編『縄文—1万年の美の鼓動』東京国立博物館、280-281 頁。
- 島岡製陶所（1998）「（有）島岡製陶所」（島岡製陶所広告）、『民藝』547 号、日本民藝協会、49 頁。
- 島岡達三ほか（1962）「受賞者の言葉」、『民藝』120 号、日本民藝協会、26-28 頁。
- 島岡達三（1976）『益子』（日本の陶磁 7）、保育社。
- 島岡達三（1998）『NHK 趣味入門 陶芸』日本放送出版協会。
- 島岡達三・中沢三知彦ほか（1996）「座談会 島岡達三氏と民陶」、蔵前工業会『蔵前工業会誌』918 号、蔵前工業会、30-34 頁。
- 杉山享司（2013）「島岡達三と民藝運動」、横堀聰編『益子町名誉市民章受章記念 島岡達三展 東京工業大学博物館所蔵 中澤コレクション』（益子陶芸美術館企画展図録）益子町文化のまちづくり実行委員会、頁数なし。
- 大日本印刷株式会社編（1987）『図解 印刷技術用語辞典』日刊工業新聞社。
- 高木崇雄（2020）『わかりやすい民藝』D&DEPARTMENT PROJECT。
- 東京工業大学編（1939）『東京工業大学一覧 自昭和十四年 至昭和十五年』東京工業大学。
- 東京工業大学百年記念館編（2009）『東京工業大学百年記念館収蔵資料目録 陶磁器コレクション』東京工業大学百年記念館。
- 外館和子（2006）「島岡達三の世界」、朝日新聞社『人間国宝』11 号（2006 年 8 月 13 日号）、朝日新聞社、14-15 頁。
- 外館和子（2016）「島岡達三—民芸に学んだ知性派」『日本近現代陶芸史』阿部出版。
- 栃木県立美術館ほか編（1994）『清水雅コレクション寄贈記念 島岡達三展』栃木県立美術館。
- 中島岳志（2025）「濱田庄司の縄文土器づくり」『縄文 革命とナショナリズム』太田出版。
- 永田竹丸（1996）「スクリーントーンと漫画」、福留朋之編『スクリーントーン百科』美術出版社、28-29 頁。
- 日本放送協会編（1996）『NHK 趣味百科 陶芸に親しむ 講師島岡達三』日本放送出版協会。
- 日本民藝館学芸部編（2025）『日本民藝館所蔵 棟方志功板画集』日本民藝館。
- 濱田庄司（1974）『無尽蔵』朝日新聞社。
- 廣松涉ほか編（1998）『岩波哲学・思想事典』岩波書店。
- 筆谷淑子監修（2017）『私の生きた刻 TURNING THE WHEEL by Tatsuzo Shimaoka』島岡製陶所。
- 筆谷淑子・島岡桂・佐々風太（2025）「島岡達三と縄文象嵌について」、『民藝』867 号、日本民藝協会、26-38 頁。
- 松井健（2019）『民藝の機微』里文出版。
- 水尾比呂志（2008）「島岡達三の仕事」、『民藝』665 号、日本民藝協会、4-12 頁。
- 村田戸室（1989）「村田元—その生涯と作品」、益子焼村田元作品集刊行委員会編『益子焼 村田元作品集』同時代社、67-79 頁。
- 柳宗悦（1928／2005）『工藝の道』講談社学術文庫。
- ロングネッカー、マーサ（2008）「島岡達三氏との思い出—国際的人間国宝」、『民藝』665 号、日本民藝協会、26-29 頁。

<sup>1</sup> 本稿では「民藝」「工藝」を表記する際、歴史的表記および先行研究における表記などを踏まえ、「藝」を旧字体のまま用いている。ただし、引用や文献名では原典の表記に従い、原典で新字体の「芸」が用いられている場合はそのままとしている。

<sup>2</sup> 具体的な年については、年譜によって記述が異なる。例えば栃木県立美術館ほか編（1994）では、「1938 年（昭

和13年)」(窯業学科入学直前)と記されている(p.145)。日本放送協会編(1996)では、「昭和十四年」(窯業学科入学直後のこと)と回想されている(p.123)。

<sup>3</sup> 在学中、学内では、当時窯業学科の教員であった陶磁史研究者・奥田誠一(1883-1955)による授業を受講するなどしていた(東京工業大学編,1939, p.53、水尾,2008, p.5)。学外では各地の民窯産地を実見するなど、経験を積んだ(日本放送協会編,1996, p.124)。

<sup>4</sup> 日本国内では、東京科学大学博物館(東京都目黒区)、栃木県立美術館(栃木県宇都宮市)などに作品が収蔵されている。前者の収蔵は約120点、後者の収蔵は約200点である(東京工業大学百年記念館編,2009、栃木県立美術館ほか編,1994)。海外ではミンゲイ・インターナショナル・ミュージアム(アメリカ、サンディエゴ)などに、作品が収蔵されている(ロングネッカー,2008, p.28)。展覧会としては、「島岡達三展」(益子陶芸美術館、2013年)、「棟方志功展Ⅰ 言葉のちから」(日本民藝館、2025年)などにおいて島岡作品は取り上げられてきた。「棟方志功展Ⅰ 言葉のちから」では島岡の陶軸(柳宗悦が表具に用いていた)が紹介された(日本民藝館学芸部編,2025, p.201ほか)。

<sup>5</sup> 濱田はしばしば、「やきものに絵を書いてはいけません」(原文ママ)などとも弟子に指導した(村田,1989, p.78)。新奇な絵付けなどを一旦排したとき、どのような「個性」が浮かび上がってき得るのか、という弟子への問い合わせがあったと考えられる。

<sup>6</sup> 島岡は日本民藝館には縄文象嵌を施した花入を持参し、柳にも、「島岡も道を見つけてよかったです」と評されたという(近藤,2008, p.15)。柳も濱田と同様に、「無名性」と止揚された「個性」の姿を、島岡の新しい文様に見てとったのかもしれない。

<sup>7</sup> 例えば、青木(1994)でも、「象嵌縄文が器胎への絵付け的な意匠ではなく、器胎そのものの素地を意匠的に形成するものである」(p.12)と指摘されている。

<sup>8</sup> 打掛(打文)は、釉薬を叩き付けることで加飾とする技法である。釉薬流し掛けのようなストロークは伴わない場合が多い。小鹿田焼(大分県)などの民窯に伝わるほか、河井寛次郎、佐久間藤太郎などの民藝運動作家が駆使した。

<sup>9</sup> なお、「用の美」という語は、現在では民藝運動の代名詞のように用いられる語であるが、高木(2020)の指摘する通り、柳宗悦による使用例は確認できない(p.145)。管見の限り、濱田庄司による使用例も確認できない。他方で第二世代の島岡は、この語を自覚的に使っていたようである。

<sup>10</sup> 本稿で詳述する余裕はないが、島岡は縄文象嵌を施した花入、壺などの花器も多く制作した(東京工業大学百年記念館編,2009, p.17ほか)。花器の場合も、縄文象嵌はある種の「地」として機能すると考えられる(活けられた花が主役となり、縄文象嵌は鑑賞者の盲点の中に消える)。

<sup>11</sup> 島岡の長女・筆谷淑子は以下のように回想している。「これ、いつ聞いたのかな、私が中高生くらいだったかな。『私〔島岡〕は科学を信じない』って。『人間が人間を作れるようになったら信じる』ということを言ってた。この人、東工大出たんじゃないの、って思ったの。すごく衝撃的な父の言葉でした。できうるだけ、できないよね。そういう神秘性を信じていた人でした」(2025年1月15日、島岡製陶所にて筆者聞き取り)。島岡は日常的に様々な角度から、人間が何かを「完成」させることの限界について思索していたのであろう。

<sup>12</sup> 島岡達三の驚嘆に接した島岡桂は、「〔達三は〕本当はすごいシンプルな軟質陶器、李朝とかもう少しああいう柔らかいものを作りたかったと思う」と述べている(筆谷・島岡・佐々,2025, p.34)。

<sup>13</sup> ポロックのオールオーヴァーな画面の自律性や、その「壁紙」的受容については、筧(2017)などに詳しい。

Title

# 日本の都道府県におけるソーシャルメディアポリシーの比較分析

Name

Jin Wen

## 抄録

本稿は、日本の都道府県におけるソーシャルメディアポリシーの策定実態とその内容を実証的に分析したものである。分析の結果、地方自治体の多くは、ソーシャルメディアを運用する際、情報セキュリティの確保や組織的リスク回避といった規制的枠組みを優先する傾向にあることが明らかとなった。すなわち、ソーシャルメディアが本来的に持つコミュニケーション特性、とりわけ双方向性が制度的に抑制される構造が浮き彫りとなった。

具体的に、46都道府県のソーシャルメディアポリシー文書を対象に、「運用目的」「利用者との応答方針」「法的・倫理的配慮」の3つの主要要素に着目した比較分析を行った。その結果、情報発信という手段が目的化されていること、「原則として返信しない」とする一方向的な運用方針の一般化、そして法的・倫理的配慮における記述内容にばらつきがあることなどが確認できた。そのなかでも特に、知的財産や個人情報の取り扱いに関する対応の記述に都道府県間で顕著な差異が見られた。こうしたポリシーの記述上の特徴は、ソーシャルメディアの運用をめぐって、組織内部に根付いたリスク回避や規制の志向性といった行政上の価値観や制度の特徴、ならびにその程度の差の反映として理解できるというのが本稿の主張である。

急速な技術革新が進む現代社会において、技術革新に対する規制、政策の遅れが倫理的、規制的課題への対応を困難にしていることが知られているが、地方自治体においても、それらの課題に適切に対応するためのソーシャルメディアポリシーの体系的構築が喫緊の課題であることが明らかになった。

キーワード：ソーシャルメディアポリシー、地方自治体、情報セキュリティ、リスク回避、規制的枠組み

Title

## A Comparative Analysis of Social Media Policies in Japanese Prefectural Governments

Name

**Jin Wen**

### Abstract

This paper presents an empirical analysis of the formulation and content of social media policies implemented by Japan's prefectural governments. It reveals that many local governments tend to prioritize regulatory frameworks when operating social media accounts, such as ensuring information security and avoiding organizational risks. Moreover, the findings highlight an institutional structure, in which the communicative characteristics inherent to social media are constrained.

The study examines social policy documents from 46 prefectures, focusing on three key elements: (1) purpose of operation, (2) policies for responding to users, and (3) legal and ethical considerations. Our analysis firstly indicates that the local governments tend to unconsciously declare the information dissemination as the purpose of operation. Furthermore, they normalize the one-way communication policies, such as the principle of "no replies in general". Lastly, there is a significant variation in the content of legal and ethical considerations. Notably, differences were observed in approaches to handling intellectual property rights and personal information. Overall, these three core elements manifest in the administrative values and institutional characteristics such as risk avoidance and regulatory orientation. The observed variation can be understood as the differences in how these values and characteristics are embedded within governmental organizations.

Amid rapid technological advancement and the difficulties in addressing ethical and regulatory challenges without up-to-date policy development, it is an urgent task for local governments to systematically establish social media policies that can adequately respond to these emerging issues.

Keyword: Social media policy, Local government, Information security, Risk avoidance, Regulatory framework

## 1 はじめに

本稿の問題意識は二点にある。第一に、新型コロナウイルス感染症において、都道府県による X（旧 Twitter）を用いた情報発信に、質と量に顕著な地域差が見られた点である（Jin, 2024）。第二に、コロナ禍で差別や誹謗中傷への対応において、非規制的アプローチ 1 としての情報発信が、都道府県全体で低調であった点にある（Jin, 2023）。有事の情報発信において、都道府県が果たす役割は大きい。日本でも、情報接触の中心がネットに移りつつある。それにもかかわらず、こうした地域差と発信の低調さは憂慮すべきといえよう。この現状の背景には、組織文化や行政広報の情報発信体制に加え、災害時や感染症パンデミック時の危機管理体制など、複合的な要素が影響していると考えられる。

本稿は、都道府県が策定するソーシャルメディアポリシーに着目し、その策定実態と内容を比較分析することで、情報発信に影響を及ぼす構造的要素を明らかにすることを目的とする。各都道府県が定めるソーシャルメディアポリシーは、公的組織における情報発信の原則と実践を制度的に規定する政策資料である。地方自治体にとって、ソーシャルメディアを通じた情報発信は、住民への迅速な周知、災害時の危機対応、市民参加の促進など、多岐にわたる機能を担う。そのため、ポリシーの内容は行政と市民との関係性に影響を与える。

本稿ではまず、行政広報におけるソーシャルメディアの活用、および行政によるソーシャルメディアポリシーの分析に関する先行研究を検討し、本稿の着眼点と分析枠組みを明確にする。次に、行政機関全般のソーシャルメディアポリシーの策定背景を考察したうえで、都道府県レベルにおけるポリシーの策定実態と内容を比較分析する。最後に、ポリシーに内在する行政上の価値観や制度の特徴について、先行研究の知見を踏まえて検討する。

## 2 先行研究の検討と本研究の着眼点

### 2-1 行政広報におけるソーシャルメディアの活用

行政機関のソーシャルメディア利用は、行政広報と密接に関連している。1960 年代以降、日本では高度経済成長期にパブリック・リレーションズ（PR）という概念が導入された。組織と社会のより良い関係構築を視野に、「広報」という概念は、実は企業よりも行政機関において先行して定着することになった（関谷, 2022, p.16）。しかし、行政広報には、法令上の明確な制度的枠組みが必ずしも整備されることなく時間が経過した。行政広報は、日本国憲法 15 条 2 項に基づいて、行政組織と公務員が「全体の奉仕者」としての役割を遂行するうえで、民主主義にとって不可欠な要素と受け止められたのである（縣, 2006, p.194）。

行政は多様なメディアを通じて情報を発信してきたが、その手法は時代とともに変化している。長く、行政広報の主要媒体は広報紙だった。インターネットの普及に伴い、1996 年頃から各省庁や自治体は徐々にウェブサイトを構築し、ホームページを活用したフル型のネット媒体を中心に行政業務や情報発信を行うようになった（山口ほか, 2004, p.160）。さらに、2010 年代前後には、Twitter（現 X）や Facebook などのソーシャルメディアが普及した。2011 年に発生した東日本大震災では、ソーシャルメディアが情報伝達手段として有効に機能したことが認められた。地方自治体は新たな情報発信手段を確保し、コミュニケーションの特性を活かしての行政の説明責任を高めるために、行政広報の媒体としてソーシャルメディアを導入しはじめた（有馬, 2014, p.73）。金井（2015）は、

広報手法の多様化により、行政と住民を結ぶ情報チャネルが着実に増加し、提供される情報の品質向上に繋がる可能性があると述べている (p.88)。一方、行政によるソーシャルメディアを通じた情報発信の影響力は、行政広報の非営利性や中立性に基づく一定の制約を受けるという見解もある (関谷, 2022, p.255)。

双方向のコミュニケーションが期待されるはずのソーシャルメディアを活用した行政の情報化だが、現実には双方向性が欠如しているという指摘や課題もなされている。Regina & Andrea (2018) は、政府や行政機関がソーシャルメディアを使用しない主な理由として、知識や時間の不足、実施の模範の欠如、そして柔軟性に欠けた旧態依然の組織文化をあげる。そして、この懸念を軽減する方法として、ソーシャルメディアに関するガイドラインやポリシーの策定を提案している (p.350)。日本における行政広報に関して、西田 (2013) は双方向の正統性の根源となる適切なソーシャルメディアポリシーやガバナンスが定められていないことを指摘している (p.155)。

他方、Kronski (2009) は、ソーシャルメディアがその本質として社会的かつ公共的な性格を有する一方で、潜在的なリスクを内包すると指摘している。こうしたリスクの存在は、職員を指導するとともに、組織をリスクから保護するという二重の目的を持つソーシャルメディアポリシー (Ansaldi, 2012) の策定を正当化する根拠となる。また、ソーシャルメディア利用時の使用基準を明確に設定することで、職員に対し、市民との関与を実践するための基盤を提供する点において、ソーシャルメディアポリシーの価値を見出している (Cadell, 2013, p.10)。

日本におけるソーシャルメディアポリシーそのものを対象とした実証的分析は、依然として限られている。鈴木 (2015) は、地方自治体が双方向的な情報発信を実施しない要因として、内閣官房・総務省・経済産業省 (2011) の指針 (後述) が、ソーシャルメディアの活用を単なる一方向的な情報の「パブリケーション」にとどめる利用方法として提示した点を指摘している (p.214)。ただし、同研究はポリシーの具体的な内容に踏み込んだ分析を行っていない。

本稿は、地方自治体におけるソーシャルメディアポリシーを都道府県レベルで横断的に分析し、既存研究の限界を補完し、これらのポリシーに内在する行政上の価値観を明らかにすることで、行政広報をはじめとする公共コミュニケーション研究に実証的貢献を試み、行政によるソーシャルメディア利用の実態を対象とした既存研究 (河井, 2013; 中野, 2014; 大倉・海後, 2017; 上野, 2022) に対し、新たな視点を提供できるものと考えている。

## 2-2 行政によるソーシャルメディアポリシーへの分析

行政によるソーシャルメディアポリシーに関する実証的研究は近年限定期である。ソーシャルメディアの黎明期にあたる 2010 年前後には、行政が市民との新たな関係性を構築するツールとしてソーシャルメディアへの参入を実務的に求められた。その背景のもと、当時は中央政府、行政機構、地方政府を対象としたソーシャルメディアポリシーに関する研究が一定程度行われていた。

もっとも、Cadell (2013) は応用倫理 2 という概念に依拠し、ソーシャルメディアポリシーを「人々が交流や対話をを行うオンライン上のチャンネル、空間、あるいは環境に関する行動原則と実践を規定する規範」と定義している。そして、ポリシーが技術的運用を超えて倫理的枠組みとしての性格を有すると指摘している (p.4)。

Klang & Nolin (2011) は、スウェーデンの基礎自治体による 26 件のソーシャルメディアポリシーを分析した。彼らは、行政がソーシャルメディアを活用する過程で、しばしば市民との対話よりも透明性を重視する従来の規制的枠組みに取り組む傾向を指摘している。分析の結果、多くのポリシーが明確な目的と手続きを詳細に規定し、ソーシャルメディアの運用を統制的な枠組みに厳格に従わせていることが明らかとなった。結果として、市民との相互作用や参加といったデジタルメディア本来の利点が排除されていた (p.16)。また、Bennett & Manoharan (2016)

は、アメリカの156都市のソーシャルメディアポリシーの内容を分析した。彼らは、これらのポリシーが管理と説明責任に重点を置く一方で、市民とのエンゲージメントを促進する戦略的活用への配慮が不十分と指摘している(p.325)。すなわち、ソーシャルメディアは市民やステークホルダーとの外部的コミュニケーション手段としてではなく、組織内部の管理と情報伝達の手段として位置づけられることが明らかとなった。Köseoğlu & Tuncer (2016) も、ソーシャルメディアポリシーを政府の規制機能の一部を担う政策ツールとして位置づけている(p.34)。

一方、ソーシャルメディアポリシーの内容に関する実務的ニーズの観点からの研究も行われた。Hrdinová ら(2010)は、アメリカ政府機関による26件のソーシャルメディアポリシー文書を分析し、さらに32名の政府関係者にインタビュー調査を行った。その結果、ソーシャルメディアポリシーの中核的構成要素を8項目に整理した。すなわち、①職員のアクセス規定(employee access)、②アカウントの管理体制(account management)、③許容される利用方法(acceptable use)、④職員の行動規範(employee conduct)、⑤コンテンツの作成・管理(content)、⑥情報セキュリティの確保(security)、⑦法的課題への対応(legal issues)、⑧市民の利用ガイドライン(citizen conduct)である。また、同研究は、ソーシャルメディアポリシーの文書形式には、「ガイドライン」と「ポリシー」の2種類が存在することを指摘している。一般的に、ガイドラインは、市民参加の促進や効果的な情報発信など、目標を達成するためにソーシャルメディアをいかに効果的に活用すべきかに関する助言的内容を含む。これに対し、ポリシーは、政府機関における職員のソーシャルメディア利用を統制する公式な立場を示し、許容される利用範囲などの行動規範を明示的に定める(p.3)。

これらの先行研究は、行政によるソーシャルメディア活用が既存の規制的枠組みによって制約を受けやすい点を明らかにしている。すなわち、ソーシャルメディアポリシーは、職員の行動規範を明示し、組織の統制とリスク回避の機能を強調する傾向にある。とりわけ公共機関においては、情報公開や説明責任を優先する制度的環境が、ソーシャルメディアの参加性や対話性の発揮を困難にしている。一方で、「職員の関与」という観点から、ソーシャルメディアポリシーを必ずしも抑制的なものと見なさず、むしろソーシャルメディア本来の理念である「関与」に忠実なものと肯定的に捉える立場もある(Cadell, 2013, p.12)。しかし、こうした理念的可能性が実際の運用においてどの程度実現されているかについては、検討の余地がある。

このように、2010年代初頭の欧米諸国の事例を主たる分析対象とした先行研究は、日本の地方自治体によるソーシャルメディアポリシーの分析においても応用可能な示唆を含んでいる。しかし、日本では地方自治体のソーシャルメディアポリシーの策定状況が体系的に明らかにされておらず、その内容を比較・実証的に分析した研究も限られている。本稿は、これらの先行研究の知見と課題を踏まえ、日本の47都道府県を対象に、ソーシャルメディアポリシーの策定実態および内容を比較分析する。

### 3 研究目的と分析手法

本稿は、都道府県によるソーシャルメディアポリシーの策定実態と内容を比較分析し、ポリシーを構成する外在的主要要素を明らかにすることで、そこに内在する行政上の価値観や制度の特徴を明らかにすることを目的とする。分析手法としては、文献調査と比較事例分析を組み合わせた定性的研究手法を用いる。分析の焦点を明確化するため、以下のリサーチクエスチョンを設定した。

RQ：都道府県のソーシャルメディアポリシーには、どのような主要要素が含まれているか。また、それらの構成要素にはどのような相違が見られるか。

この問い合わせを検討するにあたり、まず行政機関全般におけるソーシャルメディアポリシーの策定背景を、文献調査を通じて明らかにする。次に、47都道府県の公式ホームページ上で公開されているソーシャルメディアポリシーを収集し、比較事例分析を行う。2025年5月17日、データ収集の結果、唯一佐賀県ではポリシー文書を確認できなかったため、分析対象は46件のポリシー文書となった。

分析枠組みとしては、Hrdinováら (2010, p.2) が提示したソーシャルメディアポリシーの構成要素（前述2.2）を参照する。そのうえで、日本の都道府県のポリシー文書の実態に即した探索的カテゴリー化を併用し、帰納的内容分析を行う。

さらに、Klang & Nolin (2011) が示す「均質 (homogeneous) 型」と「異質 (heterogeneous) 型」アプローチの相違にも着目する。均質型は、すべてのソーシャルメディアに共通のポリシーを適用するものである。効率的である一方で、媒体特性の多様性を十分に考慮しにくい。異質型は、ソーシャルメディアごとに個別のポリシーを策定するものである。柔軟性に優れるが、制度設計が複雑化する傾向をもつ (p.8)。本稿では、異質型アプローチに基づいてポリシーを策定している都道府県のうち、X (旧Twitter) に関するポリシーを分析対象とする。この選定は、Xの導入が東日本大震災以降に進展し、2020年のコロナ禍に至って全都道府県が公式アカウントを開設したという実態に基づくものである (Jin, 2024, p.261)。分析にあたって、観察された主要要素をもとに都道府県間の相違を比較分析する。

## 4 ソーシャルメディアポリシーの策定背景とその考察

鈴木 (2015) は、地方自治体においてアカウントポリシーが策定されるようになった背景として、2011年4月5日に公表された「国、地方公共団体等公共機関における民間ソーシャルメディアを活用した情報発信についての指針」(内閣官房情報セキュリティセンター、内閣官房情報通信技術 (IT) 担当室、総務省、経済産業省連名) の存在を指摘している (p.214)。この指針では、「アカウント運用ポリシーを策定してください」と明記されており、地方自治体におけるソーシャルメディア活用の制度的枠組み形成に一定の契機を与えたと考えられる。

同指針は、東日本大震災発生から1ヶ月以内に策定された。国および地方自治体がソーシャルメディアを活用する際の共通的な留意点を示す目的とした。特に、災害時の迅速な情報共有の必要性を背景に、公式情報発信の原則を明示し、「成りすまし等の防止」と「アカウント運用ポリシーの策定と明示」の2点を主要項目としてあげた。前者では、公認アカウントの取得や自己管理Webサイトへのリンク掲載など、情報の信頼性を確保する手法を推奨した。後者では、他機関の運用例を参考にしつつ、各公共機関が独自にポリシーを策定することを求めた。適用事例として、「公共機関においてTwitterを活用する際の留意点」(総務省・経済産業省, 2011) は参考として提示された。

2013年には、米国の通信社の公式Twitterアカウントが乗っ取られ、虚偽情報が発信される事案が発生した。この事案を契機に、ソーシャルメディアを狙った攻撃の顕在化が懸念されるようになった (内閣官房情報セキュリティセンター, 2013, p.1)。これを受け、内閣官房情報セキュリティセンター (2013) は、2011年の指針を基礎に、

情報セキュリティの確保の観点から、ソーシャルメディア利用に関する新たな留意事項を追加した。ただし、これらの留意事項は「各府省庁」を対象とした注意喚起であり、地方自治体が含まれるかどうかは明示されていない。

新たな留意事項の第1項目は「ソーシャルメディアの特性を踏まえた利用」を題とされ、そのなかで、①「ソーシャルメディアを情報公開の主たる手段として利用しない」、②「組織が管理するアカウントでの運用」、③「意図しないコミュニケーションが発生することを前提とした利用」の3つの方針が示された。これらの方針からは、政府や行政機構によるソーシャルメディア利用が、あくまで補助的な手段として位置づけられており、組織的・統制的な運用や炎上リスクの回避を重視する姿勢であることが読み取れる。こうした一方向的な情報発信にとどまり、市民とのエンゲージメントを制度的に促進する体制が整っていない点は、欧米の先行研究においても共通して指摘されている課題と一致する。

その他の項目である「なりすましの防止」「アカウント乗っ取りの防止」「なりすましや不正アクセスを確認した場合の対処」「発信又は公開する情報に関する留意事項」「情報発信を円滑に行うための利用者への配慮」のいずれも、ソーシャルメディア利用に伴うリスク対応と、情報セキュリティの強化を主眼としていることがうかがえる。

すなわち、国と地方自治体によるソーシャルメディアポリシーの策定は、当初から情報セキュリティの確保とリスク回避の観点を強く反映して明文化された側面が強い。公共機関におけるソーシャルメディアの運用は、単なる情報発信手段にとどまらず、組織のリスク管理の一環として位置づけられてきた。

このように、日本では東日本大震災を契機に、従来の行政広報では対応しきれなかった情報ニーズが顕在化し、ソーシャルメディアの有用性が広く認識されるようになった（河井・藤代, 2013; 鳥海, 2018）。震災対応を通じて、国主導によるソーシャルメディアポリシーの策定が進み、地方自治体においても公式アカウントの開設が相次いだ（内閣官房・総務省・経済産業省, 2011）。これらのポリシーは、情報の信頼性確保とセキュリティ強化のための規範として機能している。しかし、その法的根拠は必ずしも明確ではない。各組織には広範な裁量が与えられており、ポリシーの策定と適用には一定の柔軟性が存在する。その結果、地方自治体間でポリシー内容に差異が生じると考えられる。

以上を踏まえ、次章では都道府県を対象に、ソーシャルメディアポリシーの策定実態と内容を比較分析し、その相違点と特徴を明らかにする。

## 5 都道府県のソーシャルメディアポリシーの比較分析

### 5-1 ポリシーの策定実態

収集した46件のポリシー文書は、PDF形式の添付ファイル、あるいはHTMLページとして直接閲覧できる形式に分かれる。一部の都道府県では、公式アカウントの案内ページに運用ポリシーを併記しているが、「ソーシャルメディアポリシー」などのキーワードで検索しなければアクセスできないケースも複数存在し、情報へのアクセシビリティ3には自治体間で差が見られた。以下では、策定実態を比較分析する。

第一に、ポリシー文書の名称に注目すると、「運用ポリシー」が最も多く、これを含む「ポリシー」という語を用いた都道府県は25件と全体の半数を超える。そのほか、「利用ガイドライン」が13件、「運用方針」が5件、「利用方針」「利用指針」「利用規約」がそれぞれ1件ずつであった。本稿では、これらを広義の「ソーシャルメディア

ポリシー」として扱う。

Hrdinová ら (2010, p.3) が示す「ガイドライン」と「ポリシー」の違いに基づければ、「ポリシー」を採用する自治体は運用ルールの明確化に重きを置いている可能性が高い。一方、「ガイドライン」や「方針」などの表現を用いる自治体は、運用に一定の柔軟性を残していると考えられる。以降の比較分析では、この「ガイドライン」と「ポリシー」の差異も考慮して分析を進める。

第二に、ポリシーに記載されたソーシャルメディアの運営主体をみると、46 件のうち 39 件において、「広報課」が公式アカウントの運用を担当している。広報課の組織的位置づけにおいても差異が見られ、知事直属の知事室に設置されている場合もあれば、総務部内の広報広聴課に所属する場合もある。一方、残りの 7 都道府県では広報部門以外が運用を担当している。たとえば、岩手県は地域振興室、茨城県は営業企画課、栃木県と新潟県は ICT 推進課、群馬県はメディアプロモーション課、愛知県は情報政策課、徳島県は知事戦略局がポリシーの策定・運用を担当している。

これらの事例は、ソーシャルメディアを単なる広報手段ではなく、地域振興やデジタル戦略、ブランディングの一環として位置づけていることを示す。ただし、情報セキュリティや法的・倫理的配慮など専門性を要する項目において、広報課がどの程度の実質的な知見や判断能力を有しているかは今後の検討課題である。多くの地方自治体では、他の行政機関や先行する自治体の策定事例を参考することで内容を整える可能性も否定できない。

第三に、ポリシーが対象とするプラットフォームの範囲は、均質型アプローチと異質型アプローチの 2 つに大別できる。均質型に該当するのは 20 件、X、Facebook、Instagram、YouTube など複数のプラットフォームに同一の運用ポリシーを適用している。一方、異質型アプローチを採用した都道府県では、プラットフォームごとに異なる特性を踏まえて個別にポリシーを策定している。たとえば、X のみを対象としたポリシーを採用する都道府県は 18 件存在した。異質型アプローチは必ずしも限定的ではなく、むしろ各プラットフォームの特性や利用者層に応じた運営方針の工夫を反映しているといえる。

以上の分析から、都道府県のソーシャルメディアポリシーの策定実態には、①ポリシーの文書形式と名称、②策定と運用を担う組織的配置、③均質型と異質型という 2 つのアプローチという 3 点に明確な差異が確認できた。これらの差異は、地方自治体によるソーシャルメディア運用のあり方が画一的ではなく、各自治体が自らの行政広報戦略や組織体制に応じて柔軟に設計していることを示す。次節では、こうした策定実態の差異を踏まえ、ポリシーの内容に焦点を当て、その構成要素を比較分析する。

## 5-2 ポリシーの構成要素

本節では、Hrdinová ら (2010, p.2) が提示したソーシャルメディアポリシーの 8 つの構成要素を参照し、都道府県のポリシー文書を対象に内容分析を行った。都道府県によって、ポリシーに記載される項目数には大きな差があり、5 項目のみを挙げる自治体もあれば、14 項目を詳細に規定する自治体も存在した。探索的分析の結果、本稿は、都道府県のポリシーにおいて広く共通して見られる「運用目的」「利用者との応答方針」「法的・倫理的配慮」という 3 つの主要要素に着目する。

### 5-2-1 運用目的

ソーシャルメディアポリシーにおける「目的」あるいは「趣旨」「主旨」は、必ずしも明確に独立した項目とし

て記載されているとは限らない。そこで本稿では、各ポリシー文書を精読し、「～ために／目的として策定した～」「～利用するに当たり～定めた～」といった目的文脈を含む記述も抽出し、分析対象とした。

分析の結果、ポリシー文書において目的に関する記載が確認できなかった都道府県は11件であった。該当するのは、宮城、茨城、東京、岐阜、静岡、兵庫、和歌山、愛媛、高知、福岡、鹿児島である。これらはいずれも、「ポリシー」という文書名称を採用している。これに対し、目的を独立項目として明示したものは20件、文書中に目的の文脈を含む記述がみられたものは15件であり、全体の約76%で何らかの目的記述が確認できた。

内容的特徴に基づいて分類すると、目的記述は大きく2つの類型に大別できる（表1）。第一に、ソーシャルメディアの運用事項を定めることを目的とするタイプである（19件）。このタイプは、ソーシャルメディアの運用に際し、職員が留意すべき事項や遵守すべき基本ルールなど、行動規範の明確化を重視する。具体的には、運用主体、発信する情報、リプライ等へ対応、フォロー等の基準、知的財産権、禁止事項、免責事項などの運用基準を定める記述が多い。第二に、アカウントの開設目的、すなわち情報発信・提供を目的とするタイプである（16件）。このタイプは、ソーシャルメディアを活用した地域の魅力発信や県政情報の周知、住民との関係構築や認知促進を重視する。情報発信がポリシーの主目的として明示されている点が特徴である。

表1 ソーシャルメディアポリシーに記載する目的類型（太字は筆者による）

目的類型	記述の例	都道府県（地方別）
運用事項を定めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アカウントの運用に関する事項について定める</li> <li>・職員が、職務上ソーシャルメディアを利用する際に、基本的な考え方や留意すべき事項を定めたものである</li> </ul>	北海道 東北：山形 関東：千葉、神奈川 中部：新潟 <b>近畿：三重、滋賀、京都、大阪、奈良</b> 中国：島根、岡山、山口 四国：徳島 <b>九州：長崎、熊本、大分、鹿児島</b> 沖縄
情報発信・提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・魅力に関する情報発信を行うことを目的として開設する</li> <li>・周知・理解浸透を図るために情報提供を行うことを目的としている</li> </ul>	<b>東北：青森、岩手、秋田、福島</b> 関東：栃木、群馬、埼玉 <b>中部：富山、石川、福井、山梨、長野、愛知</b> 中国：鳥取、広島 四国：香川

出典：筆者作成

目的類型には、地理的な傾向も一定程度観察された。目的記載のない都道府県を除くと、たとえば、近畿地方および九州・沖縄地方のすべての都道府県は、運用事項を定めることを目的としている。一方、中部地方では新潟県を除くすべての都道府県が、情報発信・提供を目的としている。また、東北地方では山形県を除き、運用事項を定めることを目的としている。これらの傾向は、ポリシーを策定する際、同一地方圏内での政策模倣の結果として形成された可能性がある。そのほか、関東地方、中国地方、四国地方では、両類型が混在し、特定の傾向がみられなかった。

さらに、地理的に隣接する個別の都道府県間で、目的記述の文言に一定の類似性も確認された。たとえば、中部地方の富山、石川、福井、山梨の各県はいずれも「情報発信の目的」という独立項目を設けている。その具体的な内容には、「身近に感じてもらうこと」「新しい動きと魅力を広く発信していくこと」「画像や映像とともに、タイムリーにお知らせすること」「災害に強い情報伝達手段体制の構築を図ること」など、各県の情報発信の目的と戦略的重點の違いが反映されていた。一方で、宮崎県と沖縄県のポリシーにおいて、目的記述がほぼ同一であり、ポリシー策定

時に何らかの文書参照が行われたと考えられる。

このように、ポリシーにおける「目的」の記述は、単なる形式的な要素ではなく、各都道府県における情報発信戦略や組織的ガバナンス方針を反映するものであるといえる。しかしながら、本来ソーシャルメディアポリシーの目的は、組織としての運用事項を定めることに置かれるべきであり、情報発信・提供はその手段である。それにもかかわらず、分析対象の約半数では、情報発信・提供そのものをポリシーの主目的として掲げている。この手段が目的化されている背景には、ソーシャルメディアの導入拡大に対し、制度的枠組みの整備が追いついていない点があると考えられる。また、助言的性格をもつ「ガイドライン」と、規範や遵守義務を伴う「ポリシー」との区別が、実務上において混同されている可能性もある。

## 5-2-2 利用者との応答方針

本稿でいう「利用者との応答方針」とは、都道府県がソーシャルメディアを運営する際、利用者からのコメントや書き込みに対して、組織としてどのような返信あるいは対応方針を定めるかを指す。これは単なる運用方法にとどまらず、説明責任や市民参加のあり方など、行政ガバナンス上の原則を反映する要素と捉えられる。

表2に示す通り、分析対象の46都道府県のうち、22件は「返信しない」、または「原則として返信しない」と明記しており、ソーシャルメディアの一方向的な情報発信方針を明示している。これらの自治体は、誤解の回避や炎上リスクの低減といった行政的合理性を重視し、SNSの対話性よりも情報伝達手段としての機能を優先しているといえる。例えば、和歌山県は、「専ら情報発信を行う運用といたします」と記し、熊本県は「本SNSは、情報発信のみを行う」と明確に情報発信に限定する立場を示している。

表2 返信方針の類型

返信方針	都道府県 [数]
(原則として)返信しない	北海道、岩手、宮城、福島、茨城、埼玉、神奈川、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、兵庫、和歌山、香川、愛媛、高知、福岡、熊本、大分、鹿児島 [22]
原則として返信しないが、必要に応じて返信	山形、群馬、千葉、東京、愛知、大阪 [6]
必ず返信する必要ないが、配慮した対応を行う	三重、京都、奈良、山口、宮崎、沖縄 [6]
返信方針の明確化の策定を担当主体に委ねる	秋田、栃木、新潟、島根、岡山、長崎、徳島 [7]
明示的記載なし	青森、滋賀 [2]
その他	静岡、鳥取、広島 [3]

出典：筆者作成

これに対し、6件（山形、群馬、千葉、東京、愛知、大阪）は「原則として返信しないが、必要に応じて」との条件を付しており、状況に応じた応答可能性を保持している。例えば、群馬、千葉、愛知の3県では、公的機関の公式アカウントへの返信を可能としつつ、一般利用者からの投稿を原則として返信対象外としている。このように、「返信しない」22件と「条件付きで返信しない」6件をあわせた28件が、全体の過半数を占め、実質的には返信

を行わない方針を採用している。

さらに、「必ず返信する必要はないが、状況に応じて配慮した対応を行う」とする都道府県は6件があり、双方向性の潜在性を内包する方針といえる。三重県と奈良県は、「利用者がどのように受けとめるかという視点での十分配慮した対応」を求めており。京都、山口、宮崎、沖縄は、「人（ファン）を増やす」「県政への関心を高める」「緊急時や災害発生時には対応する」などの記述を設け、柔軟な対応方針を示している。特に非常時を想定する視点は、新型コロナウイルス感染症を契機に、平時と有事の対応方針を区別する必要性が制度的に認識され始めたことを示唆する。

一方、秋田、栃木、新潟、島根、岡山、徳島、長崎の7県は、返信方針の明確化を各アカウント運用主体に委ねており、ポリシー文書上には返信方針そのものを規定していない。これは、現場の判断に一定の裁量を与える構造であり、柔軟性を重視する方針と理解できる。また、これら7県のうち島根県を除く6県は、ポリシー文書名称に「ガイドライン」、島根県は「利用指針」を用いており、いずれも「ポリシー」を採用していない。前節で述べた通り、ガイドラインや指針は一般に望ましい行動様式を助言的に提示する性格を持つため、運用の統制よりも、柔軟な対応や現場の判断を重視する方針の下に策定された可能性があると考えられる。

さらに、明確な返信方針を記載していない青森県は、返信方針の明文化こそないものの、「住民との関係構築のための重要な手段」として肯定的にソーシャルメディアを位置づけており、現場の判断により応答を行っている可能性がある。また、静岡、広島、鳥取の3県は、「その他」に分類される。静岡県は「ユーザーからの投稿に対して、運営者はその全てに返信することはいたしかねます」、広島県は「利用者からのコメント等に対する回答は、必要に応じて行なうことがあります」、鳥取県は「なるべく回答しますが、すべてに回答することはお約束できません」と記載している。これらの表現は、双方向性のコミュニケーション意図と制限的な運用方針が併存する中間地帯を示している。

返信方針のほか、ほとんどの都道府県は、ダイレクトメッセージ(DM)への対応は行わないと明記している。また、「いいね」や「フォロー」などの非言語的関与についても、「賛意や支持を意味するものではない」と注釈を付し、行政の公式見解としての中立性を強調している。

総じて、都道府県のソーシャルメディアポリシーにおける「利用者との応答方針」は、「原則として返信しない」という一方向的な姿勢が多数を占める。しかし、多くの自治体は「ただし」「必要に応じて」などの例外規定を設け、双方向的な対応の可能性を完全に排除しているわけではない。ところが、「必要」の判断基準を明示していない場合が多く、実際の運用においては現場の担当者に裁量と判断責任が委ねられていると考えられる。今後は、「必要に応じた返信」が地方自治体の広報戦略においてどのような機能的位置を占めるのか、また平時と緊急時における対応方針の差異をどのように明文化するかという観点から、さらなる検討が求められる。

### 5-2-3 法的・倫理的配慮

地方自治体によるソーシャルメディアポリシーにおける「法的・倫理的配慮」は、情報発信に関する行政組織の基本的責任とリスクマネジメントの中核として位置づけられる。本稿でいう「法的・倫理的配慮」とは、職員または組織がソーシャルメディアを運用する際に遵守すべき法令に加え、公共機関としての中立性・透明性・公共性を担保するための倫理基準を含む。

多くの都道府県は、ポリシー文書に「禁止事項（コメントの削除基準）」「免責事項」「知的財産権（もしくは著作権）」「個人情報の取扱い」を明示している。以下、この4項目に絞って比較分析する。

前節で論じた「ガイドライン」と「ポリシー」という文書形式の違いは、法的・倫理的配慮に関する記述にも影響を及ぼしている。とりわけ「ガイドライン」（または「利用指針」）を採用する14都道府県においては、記述構成に定型的なパターンが観察された。具体的には、「ソーシャルメディア利用に当たっての基本原則」「ソーシャルメディアを利用する場合の留意事項」「トラブルへの対応」の3つの項目が中核を成しており、いずれも職員への助言的役割を担う。

「ソーシャルメディア利用に当たっての基本原則」では、「地方公務員法をはじめとする関係法令及び職員の服務に関する規程等を遵守すること」「肖像権、著作権、商標権等に関して十分留意すること」などの文言が共通して言及されているものの、著作権侵害を回避するための具体的運用指針は示さない場合が多い。このことは、ガイドラインが行動の大枠を示す性質によると考えられる。一方で、「ソーシャルメディアを利用する場合の留意事項」では、アカウント管理や投稿方法を具体化している。「トラブルへの対応」では、なりすましや炎上、アカウントの乗っ取りの防止や、発生時の初動対応を記載している。

ガイドライン形式は助言的でありつつも、一定の実務的有用性を持つことがうかがえる。実際、ガイドラインにおいては、この3項目が主要要素として位置づけられ、文書全体の骨格を構成している。それ以外の構成項目は、「ソーシャルメディアの定義」にとどまる例が多い。結果として「法的・倫理的配慮」が、ガイドラインにおいて中心的役割を担っているといえる。

以下の分析は、より明示的な規範を含む「ポリシー」名称のソーシャルメディアポリシー文書に限定する。「ガイドライン」および島根県の「利用指針」を採用する14都道府県を除外する。さらに、埼玉（「利用規約」）、山梨（「運用方針」）、鳥取（「利用方針」）の3県は、「禁止事項（コメントの削除基準）」「免責事項」「知的財産権（もしくは著作権）」「個人情報の取扱い」の4項目すべての該当記述が確認できなかったため、本節の比較分析からも除外する。最終的に、分析対象は29件に限定した。以下、「法的・倫理的配慮」の4項目の記述内容と策定状況を比較分析する（表3）。

表3 「法的・倫理的配慮」に該当する項目の策定状況

都道府県	禁止事項 (コメントの削除基準)	免責事項	知的財産権 (著作権◎)	個人情報の取扱い	合計
北海道	○			○	2
青森	○		○	○	3
岩手	○	○	○		3
宮城	○	○			2
山形	○	○			2
福島	○	○	○	○	4
茨城	○	○			2
群馬		○			1
千葉	○	○	○		3
東京	○	○			2
神奈川	○				1
富山	○	○	○		3
石川	○	○	◎		3
福井	○				1
長野	○	○	○		3
岐阜	○	○	○		3
静岡	○	○	◎	○	4
愛知	○	○	○	○	4
大阪	○	○	○		3
兵庫					0
和歌山	○	○	○		3
広島	○	○	○		3
香川	○	○	○		3
愛媛	○	○	○	○	4
高知	○	○	◎		3
福岡	○	○	○		3
熊本	○	○	◎	○	4
大分	○	○	◎	○	4
鹿児島					0
合計	26	23	19	8	

出典：筆者作成

第一に、「禁止事項」は、利用者による投稿・コメントに対して削除・ブロック等の制限対象となる行為を事前に明示する規定である。主な禁止行為は、誹謗中傷・名誉毀損、差別的表現、知的財産権・肖像権の侵害、違法行為の助長、公序良俗違反、営利目的の広告、個人情報の漏洩などである。複数の都道府県で内容が共通し、一定の標準化が進んでいる。一方、禁止事項の記述が簡潔にとどまり、違反時の対応基準を特定できない自治体もあり、その場合は、担当者の裁量に委ねられる可能性が高い。

第二に、「免責事項」は、情報発信に関する法的責任の限定や、トラブル発生時の対応方針を明記する条項である。

多くの都道府県は、情報の正確性を保証しない旨や、利用者間のトラブルに関与しない姿勢を明示し、情報提供主体としての責任回避とリスク最小化を図っている。

第三に、「知的財産権」もしくは「著作権」は、掲載情報の著作権が都道府県または原著作者に帰属すること、私的使用・引用の範囲外での無断使用禁止、投稿コンテンツの使用許諾取得などを定める。たとえば、静岡県と和歌山県は、利用者投稿コンテンツの広報利用を前提に著作権不行使を明示し、戦略的利用と著作権侵害のリスク回避の両立を図る。一方、高知県と熊本県は、「無断転載禁止」などの禁止表現で、利用者の不正行為を明確に規制する。

第四に、「個人情報」は、一部の都道府県において「氏名、生年月日等により個人を特定できる情報」と定義し、取得目的の明示、目的外利用の禁止、保存不要時の速やかな削除など、個人情報保護条例または関係法令に準拠した管理を示す。福島、愛知、愛媛、熊本、大分の5県は、ソーシャルメディアポリシーとウェブサイトのプライバシーポリシーの整合性が確保されている点が特徴である。

これらの「法的・倫理的配慮」に関連する項目群の分析を踏まえ、次は都道府県の当該項目群の策定状況の比較を行う。

分析対象の29都道府県のうち、「禁止事項」は26県が明記し、策定率が最も高い。次いで「免責事項」は23県、「知的財産権」もしくは「著作権」は19県、「個人情報の取扱い」は8県にとどまる。これらの数値から明らかのように、誹謗中傷や不適切投稿の制御、情報の正確性に対する免責を通じたリスク管理には一定の共通理解が存在し、多くの都道府県が何らかの言及を行っている。それに対し、知的財産権と個人情報に関する対応の記述にはばらつきがある。特に「個人情報」は、公開性の高いソーシャルメディア上での情報発信において不可欠な論点であるにもかかわらず、記載のない都道府県が多数であり、利用者のプライバシー保護の観点から看過できない課題である。

4項目をすべて網羅的に記載したのは、福島、静岡、愛知、愛媛、熊本、大分の6県のみであった。これに対し、兵庫県と鹿児島県はいずれの項目も明記せず、群馬県は「免責事項」のみ、神奈川県と福井県は「禁止事項」のみであった。この結果は、ソーシャルメディア運用におけるリスク認識や管理方針に関して、都道府県間での対応水準に大きな差が存在していることが明らかとなった。

近年、ソーシャルメディア利用の拡大に伴い、偽・誤情報の拡散、炎上、権利侵害など、さまざまな新たなリスクが顕在化している。特に、急速な技術革新がもたらす倫理的・規制的課題が一層複雑化するなか、これらの課題は政策的対応を要する段階に至っている。他方で、地方自治体が策定したソーシャルメディアポリシーは、策定後に改訂されないまま、最終更新日が10年以上前にとどまる事例も散見される。これは、多くのポリシーが短期的かつ反応的に整備された後、制度的な更新が継続的に行われていない実態を示す。その結果、技術やメディア環境の急速な変化に対し、制度的対応が後手に回っている可能性がある。政策の整備が技術の進展に追いつかない現状においては、法的・倫理的配慮の体系的な構築と実装を、地方自治体レベルにおいても早急に進める必要がある。

## 6 おわりに

### 6-1 結論

本稿は、日本の都道府県におけるソーシャルメディアポリシーを分析対象とし、行政機関によるソーシャルメディアポリシーの策定背景、ポリシー内容にみられる主要構成要素、および都道府県間の差異を明らかにした。以下では、

分析結果を整理したうえで、それらに内在する構造的要素と課題を抽出し、今後の研究に資する知見を整理する。

まず、行政機関全般のソーシャルメディアポリシーは、策定当初から、住民との関係構築や市民参加の促進など、ソーシャルメディア本来の機能を活用することを目的としたものではなく、むしろ情報セキュリティの確保や組織的リスクの回避といった管理的、防御的観点を主軸として策定された点に大きな特徴がある。国による指針ではセキュリティ対策や補助的運用の原則を強調したことが、各地方自治体のソーシャルメディアの導入と運用の方向性に制度的影響を与えたと考えられる。この結果、ポリシー文書は形式的には市民に開かれたものでありながら、実質的には行政自身を防御する規制的ガバナンスの装置として機能する。これは、行政のソーシャルメディア運用が既存の規制的枠組みによって制約を受けやすいという、欧米における先行研究が指摘した制度的特徴とも一致することがわかった。

次に、ソーシャルメディアポリシーの主要要素として、本稿は、多くの都道府県に共通して見られる「運用目的」「利用者との応答方針」「法的・倫理的配慮」の3点に着目し、その内容を比較分析した。これらを通じて、Hrdinová ら (2010, p.2) が示す中核的構成要素、すなわち、アカウントの管理体制、職員の行動規範、情報セキュリティの確保、法的課題への対応、市民利用のガイドライン、の含意を概ね内包していることを明らかにした。

分析の結果、第一に、多くのポリシーにおいて、本来「手段」であるべき情報発信が「目的」そのものとして記述され、目的が手段化されている構造が明らかになった。第二に、利用者との応答方針では、「原則として返信しない」と明記する自治体が過半数を占め、双方向的な関与よりも一方向的な情報伝達に特化した運用が制度的に定着している実態が確認できた。ソーシャルメディアが本来有する参加性や対話性は、ポリシーによって一定程度抑制されており、戦略的な活用への配慮が十分とはいえない。第三に、法的・倫理的配慮に関する記述にはばらつきが見られた。とりわけ、免責事項、知的財産権、個人情報の取扱いといった項目に対する対応の記述の濃淡は、各都道府県のリスク認識やガバナンス意識の差異を反映している。これらの主要要素に内在する含意は、地方自治体がソーシャルメディアを「情報リスクを管理する対象」として制度的に捉えているという先行研究の指摘と整合的であり、情報発信に対するリスク回避的な行政上の価値観の存在を裏付けるものである。

さらに、上述の3つの主要要素に加え、文書形式（ポリシー／ガイドライン）の違い、構成要素の網羅性、担当組織の配置、ポリシーの策定アプローチ（均質性／異質性）などの側面においても、顕著な差異が確認できた。都道府県間でポリシー文言や構成が類似している事例も多く、政策模倣の存在が示唆された。他方で、こうした多様性は必ずしも組織の柔軟性や創意工夫の表れとは限らず、むしろ共通の制度的基盤が欠如していることに起因する可能性もある。とりわけ、返信方針や法的・倫理的配慮に関する記述の曖昧さは、職員の裁量の幅と責任の所在を不明確にし、ガバナンス上の課題として看過できない。

このように、各都道府県のポリシー構成の主要要素およびその差異は、ソーシャルメディア運用における組織内部に根付いたリスク回避や規制の志向性といった行政上の価値観と制度的特徴、ならびにその程度の差の反映として理解できる。すなわち、ソーシャルメディアポリシーは、情報発信に関する規範を定めると同時に、ガバナンスの一部を支える規範的装置として機能している。

## 6-2 今後の課題と展望

本稿の限界として、以下の3点があげられる。第一に、分析対象を各都道府県の公開済みのポリシー文書に限定したため、内部規定や非公開ポリシー文書が存在する場合、それらを含む全体像を十分に把握できなかった。第二に、ポリシーに記述された内容と、ソーシャルメディアを通じた実際の情報発信との整合性を、動態的な検証には

至っておらず、今後はポリシーと実践との関係性を明らかにする必要がある。第三に、観察された記述の差異や政策模倣の背景については、文献調査のみでは限界があり、担当部署への聞き取り調査などを通じた精緻な検証が求められる。

本研究は、これまで十分に検討されてこなかった都道府県のソーシャルメディアポリシーを対象に、その策定背景と構造的特性を実証的な比較分析により明らかにした点に意義がある。その結果、日本における行政の情報発信ガバナンスの一端を可視化するとともに、組織のソーシャルメディアポリシーを分析対象とする実証研究の発展に寄与するものである。

## 付記

本論文は、2025年6月に筆者がThe 3rd International Conference on Management Innovation and Economy Developmentにおいて口頭発表した内容をさらに拡張・深化したものである。

## 参考文献

### 【英語文献】

- Ansaldo, M. (2012). "5 Components of a Social media Governance Model," PC World, Retrieved October 9, 2025. [https://www.pcworld.com/article/468288/4\\_components\\_of\\_a\\_social\\_media\\_governance\\_model.html](https://www.pcworld.com/article/468288/4_components_of_a_social_media_governance_model.html).
- Bennett, L. V. & Manoharan, A. P. (2016). "The Use of Social Media Policies by US Municipalities," *International Journal of Public Administration*, 40(4), 317-328.
- Cadell, L. (2013). "Socially Practical or Practically Unsociable? A Study into Social Media Policy Experiences in Queensland Cultural Heritage Institutions," *Australian Academic & Research Libraries*, 44(1), 3-13.
- Hrdinová, J., Helbig, N. & Peters, C. S. (2010). "Designing Social Media Policy for Government: Eight Essential Elements," Center for Technology in Government, University at Albany, Retrieved October 9, 2025. [https://www.ctg.albany.edu/publications/social\\_media\\_policy/](https://www.ctg.albany.edu/publications/social_media_policy/).
- Jin, W. (2025). "An Analysis of Social Media Operation Policies in Japanese Prefectural Governments," *Proceedings of the 2025 3rd International Academic Conference on Management Innovation and Economic Development* (MIED 2025), 523-534.
- Klang, M. & Nolin, J. (2011). "Disciplining Social Media: An Analysis of Social Media Policies in 26 Swedish Municipalities," *First Monday*, 16(8), 1-18.
- Kronski, E. (2009). "Should Your Library Have a Social Media Policy?" School Library Journal, Retrieved October 9, 2025. <https://www.slj.com/story/should-your-library-have-a-social-media-policy>.
- Köseoğlu, Ö. & Tuncer, A. (2016). "Designing Social Media Policy for Local Governments: Opportunities and Challenges," *Social Media and Local Governments: Theory and Practice*, 15, 23-36.
- Regina, E. L. & Andrea, H. M. (2018). *Risk Communication: A Handbook for Communicating Environmental, Safety, and Health Risks* (6th edition), Wiley-IEEE Press.
- Silverstone, R. (2004). "Regulation, Media Literacy and Media Civics," *Media, Culture & Society*, 26(3), 440-449.

### 【日本語文献】

- 縣幸雄 (2006) 「行政機関が行う広聴活動の憲法問題」『大妻女子大学紀要 文系』第 38 号、294-276 頁。
- 有馬昌宏 (2014) 「自治体のソーシャルメディアによる情報発信と住民による情報入手の現状と課題」『経営情報学会 2014 年秋季全国研究発表大会要旨集』、73-76 頁。
- 上野亮 (2022) 「公共機関の Twitter アカウント活用状況の変遷に関する一考察」『社会情報学会大会研究発表論文集』31-135 頁。
- 大倉沙江・海後宗男 (2017) 「地方自治体による SNS 利活用の状況とその課題一つくば市民活動のひろばを事例として」『国際日本研究』第 9 号、31-42 頁。
- 金井茂樹 (2015) 「行政広報広聴の基礎的枠組みに関する一考察」『公共政策志林』第 3 卷、79-92 頁。
- 河井孝仁・藤代裕之 (2013) 「東日本大震災における Twitter の利用分析」『広報研究』第 17 号、118-128 頁。
- 河井孝仁 (2013) 「地方自治体によるソーシャルメディアの活用について」『社会情報学会大会研究発表論文集』123-126 頁。
- Jin, Wen (2023) 「コロナ対策と関連したオンラインの誹謗中傷対策とその現状に関する研究——政府と都道府県を中心に」『国際公共経済研究』第 34 号、105-114 頁。
- Jin, Wen (2024) 「X (旧 Twitter) を用いた自治体の COVID-19 情報発信の分析——インフォデミック管理の視点から」『社会情報学会大会研究発表論文集』259-264 頁。
- 鈴木新之介 (2015) 「電子自治体におけるソーシャルメディアの役割」『社会情報学会大会研究発表論文集』210-215 頁。
- 関谷直也・蘭部靖史・北見幸一・伊吹勇亮・川北真紀子 (2022) 『広報・PR 論 [改訂版] : パブリック・リレーションズの理論と実際』有斐閣ブックス。
- 総務省・経済産業省 (2011) 「公共機関において Twitter を活用する際の留意点」, (2025 年 10 月 9 日取得, <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3196221/smp.openlabs.go.jp/%E5%85%AC%E5%85%B1%E6%A9%9F%E9%96%A2%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%84%E3%81%A6twitter%E3%82%92%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%81%99%E3%82%8B%E9%9A%9B%E3%81%AE%E7%95%99%E6%84%8F%E7%82%B9/>).
- 鳥海不二夫 (2018) 「ソーシャルメディアにおける災害情報」『災害情報』第 16 卷第 2 号、139-142 頁。
- 内閣官房情報セキュリティセンター (2013) 「政府機関におけるソーシャルメディアの利用に係る情報セキュリティ対策等について (注意喚起)」(2025 年 10 月 9 日取得, <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8230786/www.nisc.go.jp/active/general/chuuianki.html>).
- 中野邦彦 (2014) 「地域 SNS への地方自治体職員の関与実態に関する考察」『社会情報学』2(3): 1-14 頁。
- 西田亮介 (2013) 『ネット選挙とデジタル・デモクラシー』 NHK 出版。
- 山口直人・草瀬美緒・松井啓之 (2004) 「電子自治体窓口としての自治体ホームページの方向性に関する基礎的研究～自治体の情報化事業とホームページの歴史的変遷から～」『社会情報学会大会研究発表論文集』159-162 頁。

内閣官房・総務省・経済産業省（2011）「国、地方公共団体等公共機関における民間ソーシャルメディアを活用した情報発信についての指針」（2025年10月9日取得，[<sup>1</sup> 政策には、罰則によって担保される規制的アプローチと、経済的インセンティブを与えたり、人々は一定の行動をとるような情報を積極的に提供したりする非規制的アプローチで構成されている（Jin, 2023, p.4）。](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3196221/smp.openlabs.go.jp/%e5%9b%bd%e3%80%81%e5%9c%b0%e6%96%b9%e5%85%ac%e5%85%b1%e5%9b%a3%e4%bd%93%e7%ad%89%e5%85%ac%e5%85%b1%e6%a9%9f%e9%96%a2%e3%81%ab%e3%81%8a%e3%81%91%e3%82%8b%e6%b0%91%e9%96%93%e3%82%bd%e3%83%bc%e3%82%b7）。</p></div><div data-bbox=)

<sup>2</sup> 応用倫理とは、実践に対して道徳的判断に基づく指針や禁止事項を提示する枠組みでありながらも、その多くの規範は既存の前提として受け入れられ、十分に問い合わせられていないものである（Silverstone, 2004, p.441）。

<sup>3</sup> 情報アクセシビリティとは、年齢や障害の有無に関わらず、誰でも必要な情報に簡単にたどり着け、利用できることをいう（総務省情報アクセシビリティポータルサイトによる定義）。

Title

**Displacement and Reinvention: Cowboy Masculinity in Cormac McCarthy's  
*All the Pretty Horses***

Name

**Qin Rong**

**Abstract**

This paper argues that *All the Pretty Horses* (1992) rearticulates the cowboy myth as a form of strategic masculinity in response to late twentieth-century anxieties surrounding male identity. Rather than dismantling hegemonic gender norms, Cormac McCarthy reconfigures them through the figure of John Grady Cole, who embodies both traditional cowboy virtues and emotional vulnerability. Drawing on theory of masculinity by Hamilton Carroll, the paper examines how the novel reframes masculine authority through affective suffering and ethical introspection. Grady's marginal status, romantic failure, and moral struggle do not undermine his masculinity, instead, they enable its cultural reinvestment. This softened heroic model preserves the ideological function of the cowboy while adapting it to contemporary narratives of male crisis and resilience. Ultimately, the novel functions as a cultural mechanism through which masculinity survives not by rupture, but through affective reinvention.

Keyword: Cowboy, Strategic Masculinity, Soft Heroic Mythos

Cormac McCarthy's *All the Pretty Horses* (1992) tells the story of sixteen-year-old John Grady Cole, who leaves Texas after the loss of his family ranch and rides into Mexico with his friend, Lacey Rawlins, in pursuit of the cowboy life. Grady's journey is not merely a geographical escape, but a cultural and existential quest to inhabit the myth of the cowboy, a figure long associated with rugged individualism, stoic masculinity, and moral clarity. However, this ideal proves increasingly out of step with the historical moment in which Grady lives. Set in the 1950s, a time when the social and economic structures that once sustained cowboy life were rapidly disappearing, the novel frames Grady's pursuit as an anachronistic longing for a way of life that no longer exists.

Many critics have focused on this tension between myth and history, interpreting the novel as a lament for a lost era. Sarah Gleeson-White, for instance, argues that the narrative "laments a way of life that has become obsolete or perhaps never was" (25), while Dianne C. Luce emphasizes that Grady inhabits "the world of the 1950s and the eradication of the kind of life he has so ardently sought" (163). For both critics, the cowboy dream functions not as a viable future but as a fading cultural memory, one that continues to shape masculine identity even as its material foundations erode.

While some critics read *All the Pretty Horses* as a nostalgic elegy for a disappearing world, others have interpreted the novel as a historically grounded response to late twentieth-century anxieties surrounding gender, identity, and cultural authority. Steven Frye, for example, situates the Border Trilogy<sup>1</sup> within the broader moral and political shifts of the postwar era, including Cold War uncertainty, the emergence of identity politics, and the decline of traditional social structures. Rather than merely mourning a lost frontier, the novel becomes, in Frye's view, "a meditation on the distinctive historical circumstances of the late twentieth century" (95). Meg King extends this historicist reading by linking the novel to the socioeconomic upheavals of post-Fordist America, particularly the disempowerment of white men and the cultural backlash against feminist progress. She contends that *All the Pretty Horses* enacts a response to the perceived emasculation of white men "resulting from social and economic developments more closely associated with the late 20th century"<sup>2</sup> (70). For King, the novel attempts to reclaim the male body as a site of national belonging by invoking images of manual labor, racial hierarchy, and frontier autonomy. Rather than dismantling the cowboy myth, McCarthy's narrative repurposes it as a vehicle for cultural consolidation, re-centering white masculinity through nostalgia and corporeal endurance.

While King rightly identifies the compensatory logic underlying McCarthy's invocation of cowboy masculinity, suggesting that the novel nostalgically restores traditional masculine authority in response to its perceived erosion. This essay builds on her insights by shifting the analytical emphasis from recovery to reconfiguration. Instead of viewing *All the Pretty Horses* merely as a cultural defense of embattled masculinity, this essay argues that the novel performs a strategic rearticulation of masculinity itself. Through the figure of John Grady Cole, McCarthy reimagines masculine identity not as something lost and recovered, but as something redefined through vulnerability, ethical ambiguity, and emotional negotiation.

This reimagining is not arbitrary but grounded in the novel's dual liminality<sup>3</sup>, both historical and developmental, which together render McCarthy's reconstruction of masculinity culturally plausible. Set in the 1950s, *All the Pretty Horses* occupies a historical threshold between the vanishing pastoral and ranching world and the emergent realities of modern capitalist. In this novel, the references to "number one I C Clark that come in last year was a big well" and "the ruins of an old ranch" both register this transformation, which displaces the material

foundations of the cowboy ethos and compels new forms of masculine self-definition (McCarthy 12; 24). Within this transitional landscape, change becomes possible. At the same time, John Grady's youth<sup>4</sup> situates him at a personal threshold between childhood and adulthood, dependence and autonomy, innocence and moral responsibility. Grady's youth locates him in a space of formation rather completion. In this formative sense, Grady's age is not merely a marker of immaturity but the narrative mechanism through which the novel rearticulates masculinity at the very moment when its cultural foundation is collapsing. Within this doubled framework of temporal and personal transition, masculinity appears not as a fixed inheritance but as a mutable formation responsive to historical and emotional change.

To articulate this strategic reconfiguration of masculinity, this essay draws on Hamilton Carroll's theory of lability as developed in *Affirmative Reaction: New Formations of White Masculinity*. Carroll challenges the common assumption that the privilege of white masculinity lies in its invisibility, universality, or normative status. Instead, he argues that "the true privilege of white masculinity—and its defining strategy—is not to be unmarked, universal, or invisible, but to be mobile and mutable; it is not so much the unmarked status of white masculinity that ensures privilege, but its lability" (9-10). This dynamic understanding of masculinity allows for the analysis of male identity not as a fixed category, but as a set of adaptable performances responsive to historical and cultural pressures. Carroll's notion of lability offers a productive lens through which to understand the masculinity enacted by John Grady Cole. As a young man navigating emotional trauma, cultural displacement, and romantic loss, Grady embodies a masculinity that is neither wholly traditional nor entirely ruptured from the past. He performs determination, resilience, and physical mastery, hallmarks of the cowboy archetype, but also demonstrates emotional vulnerability, ethical uncertainty, and affective<sup>5</sup> openness. His masculinity is thus not fixed or monolithic, but enacted in tension and transition, shifting across geographic, moral, and emotional registers. Seen through Carroll's concept of lability, *All the Pretty Horses* does not merely depict a masculinity in crisis, but one in motion, strategically reformulated to survive in a world where older certainties no longer hold. Importantly, this reformulation does not signify a departure from masculinity itself. Rather, it marks the endurance of masculine identity through transformation, revealing how masculinity maintains cultural legibility precisely by adapting to new affective and ethical demands.

Building on this theoretical framework, this essay therefore treats masculinity not as a fixed essence but as a historically mutable formation that can rearticulate itself without ceasing to be masculine. It argues that *All the Pretty Horses* constructs cowboy masculinity as a form of strategic masculinity, one that reconfigures traditional gender ideals through emotional vulnerability and ethical complexity. Rather than abandoning masculine authority, the novel adapts it to the cultural conditions of the 1990s<sup>6</sup> by transforming the cowboy myth into a flexible, affective mode of gendered power. In order to show this, this essay will first examine the disintegration of familial and cultural structures and its role in generating a white masculine identity crisis, and then will analyze the novel's narrative practices, its depictions of violence, emotion, and language, as attempts to reconstruct masculine subjectivity. The final arguments will be that these affective and ethical strategies, while seemingly progressive, ultimately serve to reauthorize male centrality in a changing cultural landscape.

## The Failure of Inherited Masculinity

From the outset of *All the Pretty Horses*, Cormac McCarthy presents John Grady Cole not as a triumphant heir to the cowboy tradition but as a figure already estranged from the familial, economic, and cultural foundations that would have sustained such an identity. His journey to Mexico is not an act of adolescent rebellion but a structural consequence of disinheritance: the death of his grandfather, the sale of the family ranch, the impotence of his father and the collapse of patriarchal continuity together all deprive him of a legible place within traditional gender scripts. This emotional and material rupture signals the broader collapse of hegemonic masculinity's institutional supports, marking both a personal crisis for Grady and a cultural moment in which conventional forms of manhood can no longer be stably inherited.

The novel opens with a depiction of Grady's physical and psychological dislocation, triggered by a complex intersection of familial and social forces. With the death of his grandfather, Grady loses not only a beloved patriarch but also a model of cowboy masculinity. His grandfather, who "never give up" (13), becomes a specter of lost masculine authority, one whose ideals remain vivid in Grady's imagination but unviable in his lived experience. This familial rupture is compounded by his mother's decision to sell the family ranch, a symbolic and material severing of the intergenerational cowboy legacy. Grady's plaintive question "Why couldnt you lease me the ranch? ... I'd give you all the money. You could do whatever you wanted" (15-16) captures the reduction of kinship to contract, and the displacement of masculine honor by transactional rationality.

Adding to this sense of familial erosion is the figure of Grady's father, whose weary skepticism about the survival of the old moral and economic order and emotional withdrawal from a reality he recognizes but cannot change reflect the exhaustion of the masculine ideal itself. Unlike Grady's grandfather, whose stoic perseverance embodies the lost integrity of the cowboy code, or Grady's mother, whose determination to sell the ranch signals a decisive break from it, Grady's father appears much more like an incapacitated witness. He recognizes the shifting conditions of the modern world yet remains emotionally tethered to the past. His pessimistic observation that "the country would never be the same. People dont feel safe no more. We're like the Comanches was two hundred years ago. We dont know what's goin to show up here come daylight. We dont even know what color they'll be" (26) exposes both his lucidity and his paralysis that he sees the change coming but cannot adapt to it. Unable to adapt himself, he can offer no guidance to his son, for the authority to instruct has vanished along with the world that once sanctioned it. Grady's masculinity is thus undercut by the very institutions like family, landownership, and inheritance that once legitimized it. McCarthy thus subtly captures the erosion of familial intimacy under the pressures of socio-economic change.

Beyond the family sphere, McCarthy situates Grady within a broader historical moment marked by the decline of the traditional frontier and the rise of capitalist modernity, which together dismantle the symbolic and material foundations of cowboy masculinity. McCarthy dramatizes this transformation, the unraveling of agrarian masculinity under modern capitalist pressures, through a series of symbolic juxtapositions. Early in the novel, as Grady stands alone on the prairie, he senses the approach of a train: "He could feel it under his feet. It came boring out of the east" (4). The image is freighted with allegorical meaning. The train is not just a machine, it is a harbinger of historical change, evoking what Leo Marx terms *the machine in the garden*.<sup>7</sup> The word "boring"

connotes force and violent penetration, casting the train as a disruptive agent that drills through the landscape. Meanwhile, the phrase “out of the east” reinforces its symbolic function, with the East traditionally representing modern, urban, and capitalist America in contrast to the mythic West. The train’s arrival, though not yet visible, is already materially registered through Grady’s body, suggesting that he intuitively apprehends the encroachment of modernity, yet remains paralyzed in the face of it. McCarthy here locates the decline of the cowboy ethos within a larger narrative of cultural transformation: the garden of the West is no longer pastoral but perforated.

This moment signals that the forces of historical transformation, like the approaching train, are impersonal, unstoppable, and already in motion, reshaping the world regardless of individual will. McCarthy continues to dramatize this larger structural shift through everyday encounters, where Grady’s cowboy identity increasingly clashes with a modernizing society that no longer recognizes its symbolic value. A particularly telling moment occurs when Grady carries his saddle to the street and meets a man driving a Model A Ford. What for Grady is a sacred emblem of his identity is, for Ford driver, reduced to a useless “hull” (15), a hollow shell emptied of meaning. In addition to the truck driver’s sardonic remark, the lawyer representing Grady’s mother articulates a similar ideological shift when he quips, “not everybody thinks that life on a cattle ranch in west Texas is the second best thing to dyin and goin to heaven” (18). This comment not only ridicules the nostalgic idealization of rural cowboy life but also highlights the overarching cultural movement away from the values traditionally associated with cowboy ideal.

These familial, economic, and cultural ruptures leave Grady unmoored from the structures that once conferred masculine legitimacy. His turn to Mexico is not impulsive but is driven by a belief, however idealized, that south of the border, the cowboy code may still endure uncorrupted. As scholars have noted, Mexico functions symbolically as an extension of the 19th-century American West. Gleeson-White argues that “Mexico becomes a substitute for the unscouted Territory of the Old West, a supposedly empty—yet nonetheless dangerous—space upon which Manifest Destiny could make its ‘scouring’ mark, and it is thus the antithesis of the heavily fenced modern West” (28). Similarly, Susan Savage Lee notes that “Mexico appears to him [John Grady] as a place where civilization has not yet taken effect” (160). Upon arriving in Mexico, especially on the ranch where he and Rawlins find work, they do not attract attention as foreign outsiders, rather, their identity is rendered secondary to their association with cowboy labor. As McCarthy notes, “the vaqueros asked them [John Grady and Lacey Rawlins] many questions about America and all the questions were about horses and cattle and none about them” (98). This encounter reveals that, in this Mexican ranch, cowboy identity is not a symbolic pose or nostalgic construct, but a lived, material condition grounded in shared occupational knowledge and practical engagement with pastoral labor.

Grady’s journey to Mexico thus marks more than a change of scenery. It represents a deliberate, if idealistic, attempt to reclaim a masculine identity rendered untenable by the socio-economic and cultural transformations of mid-century America. If the United States has become inhospitable to the cowboy ideal which was overrun by capitalist logics, technological advancement, and shifting gender expectations, then Mexico emerges in Grady’s imagination as a site where that ideal might still be materially enacted. In this sense, the first movement of the novel dramatizes the emotional and historical conditions that necessitate a rearticulation of cowboy masculinity. Grady’s dispossession is not only a personal loss but a structural disenfranchisement

that catalyzes his search for a new ground.

## Affective Rearticulation: Violence, Language, and the Ethics of Vulnerability

While the preceding section traces the erosion of traditional masculine structures, McCarthy resists the impulse to discard the cowboy myth altogether. Instead, he reconfigures it through the character of John Grady Cole, infusing the figure with new dimensions of marginality and emotional complexity. While John Grady embodies conventional attributes such as perseverance, courage, an intimate connection with the natural world, and a high degree of technical proficiency, his story consistently challenges the stability of these masculine ideals. Far from portraying masculinity as fixed or monolithic, McCarthy allows moments of hesitation, vulnerability, and ethical uncertainty to reveal the fragility and contingency of cowboy identity. This strategic reimagining of masculinity unfolds across multiple narrative sites. It is most notably in Grady's ambivalence toward violence, his increasing reliance on emotional expression, and his romantic vulnerability, each of which destabilizes traditional paradigms of male strength and authority.

A central site in which this ambivalence manifests is Grady's experience of violence. Violence is a crucial aspect of cowboy culture during the 19th century and is closely tied to ideas of masculinity. Jacqueline M. Moore has described a "culture of honor" in Texas in the late 19th century, in which masculine identity is bound to a man's ability to exert his will over others, often through physical force, a public performance of strength and dominance. Within this code, one's social standing depends on the capacity to respond to insult or threat with immediate retaliation; failure to do so would signal weakness and invite social marginalization (Moore 31). Thus, the readiness to strike back becomes a defining trait of masculine honor. This traditional code of honor continues to inform Grady's understanding of manhood. Though the novel is set in the mid-20th century, Grady has inherited a conception of masculinity rooted in this earlier cultural logic, one that equates courage with physical dominance and moral worth with combative capacity. This belief system finds a brutal corollary in the Mexican prison where Grady is incarcerated. The prison is governed not by legal or ethical norms, but by an informal economy of power, where masculinity is constantly measured and negotiated through acts of violence. It is in this setting that Grady's internalized ideals are put to the test.

While in Mexican prison, Grady faces growing scrutiny and surveillance from others who seek to determine "Where did [he] learn to fight?" and "if [he] ha[s] *cojones*. If [he is] brave," so that they can "decide [his] price" (198). Exposed to this lethal standard repeatedly, Grady gradually comes to understand that he must exhibit physical strength and courage to be regarded as a man. As a result, he ultimately kills his opponent, who instigates a physical altercation with him. After killing the man, Grady's reaction embodies both collapse and renewal. Initially, "in his despair he felt well up in him a surge of sorrow like a child beginning to cry" (208), but this emotional rupture soon gives way to a sense of "new life" (208). This emotional change suggests a temporary reconciliation with the prison's brutal logic, as if Grady has internalized the idea that violence is necessary for survival and masculine recognition. This apparent acceptance reflects what James W. Messerschmidt observes in *Men, Masculinities, and Crime* that masculinity often demands physical validation

through acts of violence. As Messerschmidt writes, “[one’s] physical ability to fight when provoked convinced him of his own eminent masculine self-worth” (205). Grady’s willingness to fight and kill thus momentarily restores his standing in a world governed by lethal codes. Yet McCarthy makes clear that this restoration is neither complete nor enduring. Upon his return to the United States, Grady confesses to a judge that “when I was in the penitentiary down there I killed a boy” and “it keeps botherin me” (299). The act that once seemed to inaugurate a new life now haunts him as a source of unresolved guilt and moral dislocation. This inward turn signals the limits of violence as a stable foundation for masculine identity. In McCarthy’s vision, physical strength may offer momentary survival, but it cannot sustain moral or emotional coherence. It is precisely this insufficiency that opens a space for alternative modes of masculine performance.

In contrast to the fleeting and morally unstable affirmation offered by violence, emotionally charged dialogue and candid verbal expression emerge in the novel as key sites for the performance of an alternative masculinity. Through these verbal acts, McCarthy deliberately dismantles the myth of the silent cowboy and reconstructs masculine identity as one grounded in emotional articulation and ethical responsiveness. Grady and Rawlins, unlike the archetypal Western heroes who assert identity through stoicism and dominance, are granted narrative space to speak, feel, and reflect. In pivotal moments, they affirm their sense of self, express loyalty, and resist injustice through verbal articulation. These instances of dialogue underscore a crucial shift that masculinity, rather than being an innate or fixed essence, is portrayed as a social identity that is continually constructed and reshaped through discursive practice. For example, when Rawlins says, “I wouldnt leave you and you wouldnt leave me. That aint no argument” (81), he articulates a form of moral loyalty that transcends individual interest and offers Grady a verbal model of emotional ethics. Later in the novel, when Rawlins questions whether Grady would have escaped alone if given the chance, Grady responds, “I wouldnt of left you” (216), functions as a clear and affective affirmation that breaks with the cowboy’s traditional code of silence. This emotionally charged declaration not only reinforces their bond but also illustrates a more expressive, relational enactment of masculinity.

It is noteworthy that McCarthy allows Grady not only to break the traditional code of cowboy silence but also to articulate his emotional commitments with a degree of openness and moral urgency rarely afforded to Western protagonists. This narrative choice challenges and reconfigures the conventional model of stoic masculinity by presenting emotional expressiveness as a legitimate and even valorized mode of male identity. Rather than asserting masculinity through physical dominance, Grady affirms it through speech acts that convey loyalty, responsibility, and ethical awareness. In this way, McCarthy transforms language into a key mechanism for masculine self-definition. Grady’s capacity to speak and be heard marks a departure from the logic of bodily control and situates masculinity within a discursive and relational framework. The shift from silence to speech is not merely stylistic, it reflects a broader cultural response to the instability of male identity and underscores the performative, constructed, and contingent nature of masculinity itself.

While verbal expression within male friendship signals a shift away from stoic masculinity, McCarthy extends this emotional rearticulation into the realm of heterosexual intimacy, particularly through Grady’s relationship with Alejandra. From their first encounter, it is Alejandra who demonstrates emotional and physical agency, inviting Grady to ride with her, orchestrating their meetings, and ultimately deciding their fate by

refusing to accompany him. This inversion of romantic conventions in which the male figure typically rescues or possesses the woman grants Alejandra narrative control while positioning Grady as emotionally receptive rather than assertively dominant. His passivity throughout the relationship, despite deep emotional investment, reflects a broader cultural revision of masculinity: not as mastery or conquest, but as vulnerability and responsiveness. After Alejandra ultimately refuses to elope with him and thus brings their relationship to an end, Grady is left devastated and powerless. Yet his heartbreak, far from signaling emasculation, becomes a crucible for ethical growth. He neither retaliates nor reclaims control, but instead internalizes his pain and carries it forward, allowing it to shape a new, affectively attuned version of selfhood. This reorientation complicates any attempt to view him as a traditional cowboy hero and instead marks him as a site through which McCarthy interrogates the evolving structure of masculine identity.

Grady's emotional exposure in this romantic context dismantles the conventional gender binary that aligns masculinity with control and detachment. However, this is not merely a reversal of power, it is a productive wounding. As Sally Robinson argues, contemporary white masculinity is often marked by its visibility and vulnerability, compelled to articulate itself through emotional injury and ethical struggle. According to Robinson, "the 'marking' of whiteness and masculinity has already been functioning as a strategy through which white men negotiate the widespread critique of their power and privilege" (6). In this view, Grady's heartbreak and inability to assert control do not diminish his masculine identity but instead rhetorically reconstitute it. His woundedness functions not as a narrative of loss but as a framework for ethical legitimacy, rendering masculinity as emotionally legible and morally complex. Through this affective performance, McCarthy participates in a broader cultural logic whereby male vulnerability does not displace patriarchal authority but re-centers it within the domain of emotional authenticity and reflective subjectivity.

While the narrative arc centers on John Grady's emotional and ethical evolution, it is important to recognize that parallel models of masculine reconstruction also emerge within the novel. A revealing counterpoint is offered through his companion, Rawlins, whose response to their shared experiences in Mexico highlights a different, but equally strategic, negotiation of masculine identity. After their failed journey through Mexico, Rawlins returns to Texas and encourages Grady to do the same, affirming, "This is still a good country" (307). His declaration, made in the wake of hardship and disillusionment, reflects a form of masculine resilience that embraces stability and reintegration rather than continued exile. While McCarthy does not elaborate on Rawlins's life afterward, his faith in the possibility of a productive future, perhaps in the lucrative oil fields of Texas as he suggests, implies that a return to economic opportunity can re-anchor masculine identity. As Hamilton Carroll argues, "White masculinity has, in short, learned how to manage the stakes of its own failure, thereby turning that failure into a profoundly powerful form of success" (9). Rawlins's failure can be offset by material success, wherein financial prosperity serves as a compensatory mechanism that revalidates masculinity. He thus exemplifies how masculinity adapts strategically: in the face of emotional or ideological failure, it pivots toward practical and economically viable forms of self-assertion. His arc stands as a parallel to Grady's, offering a distinct model of masculine reconstruction grounded not in romantic loss but in pragmatic survival.

Taken together, these narrative sites, include violence, language, romantic loss, and economic

reintegration, map out a complex terrain in which masculinity is not dismantled but reconfigured. Through Grady's emotional vulnerability and ethical self-reflection, and through Rawlins's pragmatic resilience, McCarthy demonstrates that masculine identity in crisis does not vanish; rather, it adapts, performs, and survives by strategically incorporating affect, speech, and failure. In doing so, *All the Pretty Horses* participates in a broader cultural discourse that responds to the instability of hegemonic masculinity not by abandoning its myths, but by softening, revising, and ultimately preserving them.

## Strategic Masculinity and the Soft Heroic Mythos

John Grady Cole's performance of masculinity in *All the Pretty Horses* represents more than an individual response to personal trauma. It is also an exploration of how American masculinity negotiates cultural transition through self-adjustment and reproduction. Cormac McCarthy mobilizes the cowboy, a quintessential American cultural icon, to reconstruct the concept of wounded masculinity, a recurring figure in 1990s American media where male authority is recuperated through narratives of pain, loss, and moral resilience. Rather than rejecting the cowboy mythos, McCarthy softens and modernizes it, allowing it to absorb vulnerability without losing symbolic power. Through his portrayal of Grady's struggles with violence, emotion, and romantic failure, cowboy masculinity is reshaped from a monolithic and hegemonic ideal into a strategic and narratively sanctioned performance, one that merges traditional ethical codes with emotional complexity to secure the male subject's cultural centrality.

John Grady's masculinity neither wholly rejects tradition nor fully deconstructs it. On one hand, he inherits the behavioral logic of the cowboy characterized by the pursuit of honor, individual autonomy, and ethical consistency. On the other, he consistently displays what might be called the softness of failure, like his grief over the dissolution of his family, his ethical hesitation in the face of violence and his obsessive longing for Alejandra, all point to a masculinity shaped by emotional vulnerability and moral complexity. This contradiction exemplifies what might be theorized as a form of strategic masculinity: a form of male identity that, when confronted with the instability of hegemonic norms, selectively integrates vulnerability, emotional depth, and moral conflict to maintain its cultural centrality. While neither Hamilton Carroll nor Sally Robinson explicitly uses the term, their work provides the critical foundation for such a formulation. Carroll argues that the cultural power of contemporary white masculinity lies not merely in its ability to exhibit vulnerability, but in its structural lability, the ability to move, adapt, and transform one's identity in terms of position, form, or meaning (10). Similarly, Robinson explores how white masculinity becomes culturally legible through the spectacle of injury. Once the invisible universal, white men become marked by emotional suffering, and that suffering becomes a form of symbolic capital. In both cases, affective injury is not a disqualification from privilege, but its reinvention, a rhetorical maneuver that recenters the male subject within the evolving politics of visibility and recognition. Grady's character embodies this logic as his masculinity is not hegemonic in the traditional sense but hegemonically renovated, made softer, more introspective, and more survivable through a strategic performance

of pain and displacement. His journey illustrates not the loss of masculine privilege, but its recalibration through narrative.

This strategic rearticulation stands in sharp contrast to what R. W. Connell defines as hegemonic masculinity, a dominant form of gender practice that maintains male power by marginalizing women and non-normative men. As Connell famously puts it, "Hegemonic masculinity can be defined as the configuration of gender practice which embodies the currently accepted answer to the problem of the legitimacy of patriarchy, which guarantees (or is taken to guarantee) the dominant position of men and the subordination of women" (77). In Connell's model, hegemonic masculinity maintains its legitimacy by remaining invisible, unchallenged, and normatively unmarked. It asserts itself through strength, silence, and distance, the values that underpin traditional cowboy archetypes in earlier Westerns. However, John Grady Cole departs from this model in critical ways. His masculinity is not invisible but emotionally readable, not entitled but wounded, not dominant but ethically conflicted. He becomes legible not through power, but through pain. Importantly, this departure does not dismantle hegemonic masculinity but reshapes and preserves it in a different key. Grady's ability to suffer, to reflect, and to endure loss becomes a new narrative mode for legitimizing male centrality. His marginality paradoxically functions as a tool of reintegration into the cultural core, exemplifying how masculinity evolves not by relinquishing its hold on cultural imagination, but by adopting new narrative and emotional strategies to sustain it. In this way, *All the Pretty Horses* illustrates how hegemonic masculinity can survive its own crisis by strategically embracing the language of injury, vulnerability, and ethical struggle. McCarthy's novel thus participates in a broader cultural mechanism whereby masculinity is not defeated, but softly reassured.

It is important to note that the figure through which strategic masculinity becomes intelligible is the cowboy, a historically loaded symbol in American cultural discourse. As a racialized and gendered archetype, the cowboy has traditionally functioned as an idealized embodiment of white, heteronormative, and stoic masculinity, associated with national myths of rugged individualism, frontier conquest, and moral autonomy. McCarthy's deployment of this national figure is neither nostalgic nor wholly revisionist, rather, it stages the cowboy as a contingent site where inherited masculine ideals undergo affective and ethical transformation. John Grady Cole performs the cultural codes of the cowboy as he rides, fights, loves horses and adheres to personal honor, yet his narrative trajectory is marked by emotional loss, ethical hesitation, and social marginalization. This rearticulation aligns with Homi Bhabha's concept of mimicry, wherein the subject imitates a dominant cultural identity but can never fully inhabit it. Grady performs the cowboy, yet remains "almost the same, but not quite" (Bhabha 89). His exile, romantic failure, and outsider status in Mexico mark him not as an authentic bearer of the cowboy myth, but as a hybridized version, one shaped by loss, dislocation, and postmodern doubt. Through this ambivalent performance, McCarthy's cowboy becomes a site of strategic negotiation, where cultural centrality is maintained through emotional complexity rather than mythic certainty.

Within the wider cultural imaginary, John Grady participates in the ongoing reproduction of the cowboy myth within the American literary tradition. From *The Virginian* (1902) to *Shane* (1949) and now to McCarthy's *All the Pretty Horses*, the cowboy remains a symbolic vessel for national identity and white male virtue. McCarthy does not deconstruct this legacy but infuses the cowboy figure with a soft heroic mythos, a revised narrative logic in which masculine virtue is secured not through conquest, but through affective endurance and ethical

suffering.

In sum, *All the Pretty Horses* does not merely narrate the emotional and ethical development of an individual cowboy, but engages in a broader cultural negotiation of masculinity under late twentieth-century conditions of crisis. By strategically rearticulating the cowboy myth, a historically rigid and hegemonic figure, McCarthy constructs a softened heroic model grounded in emotional vulnerability, ethical reflection, and narrative marginality. This reconfigured masculinity aligns with shifting cultural expectations of male subjectivity in the 1990s, transforming the cowboy from an emblem of dominance into a site of affective legitimacy and moral endurance. Crucially, this transformation is not a dismantling of masculine authority, but a recalibration of it, a strategy through which dominant gender norms are preserved in revised, more culturally sustainable forms. Moreover, this reconstruction of masculinity should not be viewed merely as a narrative shift internal to the novel, but as part of a broader cultural logic that seeks to stabilize dominant gender structures under the appearance of change. Rather than rejecting traditional masculinity, *All the Pretty Horses* repackages it through emotional vulnerability and moral introspection. In this way, McCarthy's version of the cowboy becomes a medium through which masculinity maintains its symbolic power by appearing softer and more ethical. At the level of cultural ideology, the novel thus participates in a wider process that translates a historically hegemonic myth into a form that feels emotionally authentic while preserving its foundational logic. Masculinity does not disappear under pressure, it adapts. By softening the heroic ideal rather than discarding it, McCarthy demonstrates how literature helps renegotiate gender norms not by dismantling old myths, but by giving them new affective and ethical forms that ensure their continued cultural relevance.

## Works Cited

- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. Routledge, 1994.
- Carroll, Hamilton. *Affirmative Reaction: New Formations of White Masculinity*. Duke University Press, 2011.
- Connell, R. W. *Masculinities*. University of California Press, 1995.
- Frye, Steven. *Understanding Cormac McCarthy*. University of South Carolina Press, 2009.
- Gleeson-White, Sarah. "Playing Cowboys: Genre, Myth, and Cormac McCarthy's *All the Pretty Horses*." *Southwestern American Literature*, vol. 33, no. 1, 2007, pp. 23–38.
- Kimmel, Michael S. *Manhood in America: A Cultural History*. 2nd ed., Oxford University Press, 2006.
- King, Meg. "'Where is Your Country?': Locating White Masculinity in *All the Pretty Horses*." *The Cormac McCarthy Journal*, vol. 12, no. 1, 2014, pp. 69–88.
- Lee, Susan Savage. "The Cost of Dreams of Utopia: Neocolonialism in Juan Rulfo's *Pedro Páramo* and Cormac McCarthy's *All the Pretty Horses*." *Confluencia*, vol. 30, no. 1, 2014, pp. 152–170.
- Luce, Dianne C. "The Vanishing World of Cormac McCarthy's Border Trilogy." *A Cormac McCarthy Companion: The Border Trilogy*, edited by Edwin T. Arnold and Dianne C. Luce, University Press of Mississippi, 2001, pp. 161–197.
- Malin, Brent. "Memorializing White Masculinity: The Late 1990s 'Crisis of Masculinity' and the 'Subversive Performance' of *Man on the Moon*." *Journal of Communication Inquiry*, vol. 27, no. 3, 2003, pp. 239–255.
- McCarthy, Cormac. *All the Pretty Horses*. Picador, 2010.
- Messerschmidt, James W. "Men, Masculinities, and Crime." *Handbook of Studies on Men and Masculinity*, edited by Michael S. Kimmel, Jeff Hearn, and R. W. Connell, Sage Publications, 2004, pp. 196–212.
- Moore, Jacqueline M. "'Them's Fighting Words': Violence, Masculinity, and the Texas Cowboy in the Late Nineteenth Century." *The Journal of the Gilded Age and Progressive Era*, vol. 13, no. 1, 2014, pp. 28–55.
- Morrison, Gail Moore. "All the Pretty Horses: John Grady Cole's Expulsion from Paradise." *Perspectives on Cormac McCarthy*, edited by Edwin T. Arnold and Dianne C. Luce, University Press of Mississippi, 1999, pp. 175–194.
- Robinson, Sally. *Marked Men: White Masculinity in Crisis*. Columbia University Press, 2000.

## Notes

<sup>1</sup> The Border Trilogy by McCarthy—*All the Pretty Horses* (1992), *The Crossing* (1994), and *Cities of the Plain* (1998)—chronicles the moral and emotional passage of young cowboys across the Mexico–United States border. Critics have often read the Trilogy as a unified meditation on the collapse of the pastoral ideal and the reconstruction of masculine identity in the late twentieth century (see Frye 2009). This paper focuses on *All the Pretty Horses*, where these thematic and ideological concerns are articulated in their most formative and transitional expression.

<sup>2</sup> Although King refers to "the late twentieth century," the phrase does not exclusively denote the 1990s. In this context, it broadly encompasses the social and economic transformations that unfolded from the 1970s through the early 1990s—namely, the shift from Fordist to post-Fordist labor, the rise of the service economy, and the impact of Second-Wave Feminism and related social equality movements. King situates *All the Pretty Horses* within this wider historical moment to suggest that the novel's portrayal of male "dislocation and emasculation" (70) resonates with the broader crisis of white masculinity emerging during this period.

<sup>3</sup> This paper's use of "dual liminality" draws on Victor Turner's concept of liminality as a transitional state between structures of identity or social order (*The Ritual Process*, 1969). Here the concept is used metaphorically to describe two intersecting thresholds in *All the Pretty Horses*. In historical terms, the 1950s represent a shift from the pastoral and ranching world to the modern capitalist and industrial order, as seen in the replacement of family ranches by oil fields. At the same time, John Grady's adolescence marks a personal threshold between dependence and autonomy. McCarthy's reconstruction of masculinity takes shape within the intersection of these two liminal conditions.

<sup>4</sup> Many critics have read *All the Pretty Horses* as a (dark) Bildungsroman (see Morrison 1999; Frye 2009), emphasizing John Grady Cole's passage from innocence to experience. While this paper acknowledges this interpretive tradition, my analysis departs from it. This paper argues that Grady's adolescence functions less as the subject of the narrative than as its structural condition, a liminal position that allows McCarthy to explore the lability of masculinity. The protagonist's youth does not merely signify development or

moral education but provides the narrative space in which masculine identity can appear in motion, negotiated between vulnerability and endurance rather than achieved as stable maturity.

<sup>5</sup> Here “affective” refers to emotional or relational modes of response rather than to the theoretical framework of affect studies. This usage remains consistent throughout the essay.

<sup>6</sup> The 1990s functions not as a narrow chronological category but as a transitional cultural moment often described as a crisis of white masculinity (see Kimmel 2006; Malin 2003). Following the end of the Cold War, the decline of Fordist industrial labor, and the increasing visibility of feminist and multicultural discourses, many cultural commentators argued that white heterosexual men had lost their central social and symbolic positions. Although *All the Pretty Horses* appeared in 1992, it reflects a cultural logic that came to define the decade.

<sup>7</sup> This reference to Leo Marx’s *The Machine in the Garden* (1964) is intended as a metaphorical allusion rather than a direct application of his historical framework. While Marx’s study focuses on 19th-century tensions between pastoral idealism and industrial intrusion, the concept is invoked here in a metaphorical sense to frame the symbolic disruption depicted by McCarthy.

Title

# 内発的発展論における「キー・パースン」の創造性の応答的生成過程—潜在的実在に着目した地域実践記述試論—

Name

村上 竜雄

## 抄録

本稿は、内発的発展論の中核的概念である「キー・パースン」の創造性をいかに記述しうるかという理論的課題に取り組み、創造性を制度的評価や個人の資質ではなく、関係のなかで生成される出来事として捉え直す「生成論的転回」を提起する試論である。

キー・パースン概念は、哲学者の市井三郎が「歴史的必然性」に抗して意志をもって参与しようとする例外的諸個人として構想したものであり、鶴見和子はこれを地域の名もなき実践者の創造性を照射する枠組みとして継承した。地域社会実践の事例研究において、重要な役割を果たしてきた同概念であるが、その一方で、語りや制度的評価の過程において特定個人が英雄化され、創造性が顕在的成果やリーダーシップへと還元される傾向をはらんできたことは否定できない。

こうした構造的問題を批判的に検討しつつ、本稿は創造性を環境・歴史・他者との交錯のなかで立ち現れる出来事的実在として再定位し、その生成的過程を捉えるための記述方法論を提示する。理論的基盤として、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの有機体の哲学、および、イザベル・ステンゲルスの応答的世界観を参照し、記述行為を出来事の網の目に参与しつつ意味を共に生成する倫理的実践として再定位する。さらに、批判的実在論の視座を導入し、創造性を直接観察可能な現象の背後で作用する潜在的実在として捉え、アプダクションとリトロダクションによる推論過程を方法論的基盤として位置づける。

事例分析では、著者が参与する人材育成事業を事例に、構造的記述の意義と限界を明らかにしたうえで、記述者の参与を通じた応答的記述の可能性を検討する。その結果、実践者に内在する感受の契機に着目することで、創造性が倫理的応答として立ち上がり、関係的発火を媒介として共に生成される創造性の動的過程が明らかとなった。

キーワード：キー・パースン、内発的発展、批判的実在論、応答的記述、生成論的転回

Title

## **The Responsive Genesis of Key-person Creativity in Endogenous Development: A Descriptive Inquiry into Regional Practice Focusing on Potential Reality**

Name

**Tatsuo Murakami**

### **Abstract**

This study explores the theoretical challenge of describing the creativity of 'key-persons', a central concept in endogenous development. It proposes a generative ontological turn that redefines creativity not as institutional recognition or an individual attribute, but as an event emerging through relational processes. The key-person was originally conceived of by philosopher Saburō Ichii as an 'exceptional individual' acting wilfully against historical determinism, and that concept was later inherited by Kazuko Tsurumi as a lens to illuminate the creativity of anonymous local practitioners. Although this concept has played a significant role in regional practice studies, it has also tended to heroise particular individuals through narratives and institutional evaluations, thereby reducing creativity to visible outcomes or leadership.

While critically examining these structural issues, this paper repositions creativity as an eventual reality emerging at the intersection of the environment, history, and other forces, and presents a descriptive methodology for capturing its generative process. Drawing on Alfred North Whitehead's philosophy of organisms and Isabelle Stengers's responsive ontology, this study reframes description as an ethical act of sense-making within the web of events. From a critical-realist perspective, creativity is understood as potential reality—a causal stratum underlying observable phenomena—while abduction and retrodiction serve as methodological foundations. The empirical analysis examines a human resource development project involving the author as a participant. By focusing on the practitioners' affective moments, this study reveals how creativity arises as an ethical response and unfolds through relational ignition, thus co-generating new possibilities within the relational field of practice.

Keyword: key-persons, endogenous development, critical realism, responsive description, generative ontological turn

## はじめに

内発的発展とは、人と人とのあいだに立ち現れる動的な過程である。筆者はこれまで、地域の内部から生まれる協働と学びの往還をその推進力と考え、約5年間にわたって人材育成事業の現場に関わってきた。しかし実践を重ねるほどに、特定の事象や人への注視自体が、創造の過程を取り逃がす構造的な罠をはらんでいることを実感するようになった。

人々の行為や実践を言語化し、既存の理論的枠組みに準拠して把握しようとする試みは、しばしば創造の過程を「成果」や「貢献」といった構造的語彙へと還元してしまう。とりわけ、「キー・パースン」という概念を用いるとき、その逆説は顕著となる。この概念は、哲学者の市井三郎が「歴史的必然性」に抗して意志をもって参与しようとする例外的諸個人として構想したものであり、鶴見和子はこれを地域の名もなき実践者の創造性を照射する枠組みとして継承した。しかし、現実の地域研究では、「誰が」「何を成し遂げた」「どのような人物か」という問い合わせが前景化し、名指された主体に過度に焦点が当たることで、名指されなかった実践や関係が不可視化されるという逆説が生じているのではないだろうか。

本論では、この逆説的状況を超克するため、キー・パースンの創造性を関係のなかで生成される出来事として捉え直し、特定個人に還元されない創造性の生成過程の記述可能性を探求する。

まず第1章では、市井・鶴見の思想的起源に立ち返り、キー・パースン概念に内在する創造性の構造を再検討する。とりわけ、市井の哲学的洞察に影響を与えた<sup>1</sup>アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの有機体の哲学と、その実践的転回を施したイザベル・ステンゲルスの理論を手がかりに、創造性を主体の属性ではなく、環境との交錯のなかに立ち現れる出来事的過程として捉える視座を導入する。第2章では、内発的発展論の事例研究を概観し、それらがもつ意義とともに、構造や制度に焦点を当てた記述の限界を確認する。そのうえで、創造性の探究を生成論的理解へと展開する必要性を示し、応答的記述の方法論的基盤を検討する。そして第3章では、与論島の人材育成事業をフィールドとし、キー・パースンの語りと実践を、まず構造的枠組みにおいて記述<sup>2</sup>したうえで、参与に基づく応答的記述によって非顕在的契機を可視化し、創造性が関係のなかでいかに立ち上がるかをあとづける。最後に、得られた知見を総括し、構造的記述と応答的記述の相補性、ならびに記述に内在する倫理的課題について考察する。本稿が提示する視座は、既存の構造的記述方法論を否定するものではない。それを前提としながら、創造性の動的生成を補完的に描き出す生成論的転回を提起するものである。

## 1 創造性の生成論的転回と分析枠組み点

### 1-1 キー・パースンの創造性の生成論的視座

市井のキー・パースン概念は、歴史的法則性のもとで創造的主体性を發揮し、社会変革を協働的に実現する複数の主体<sup>3</sup>として構想されたものである。その概念を理解する鍵は、彼の哲学的・倫理的課題意識にある。市井は、マルクス主義に学びつつも、社会変動の契機を歴史的決定論に委ねるのではなく、それを超克する個人の倫理的主体性に変革の契機を見出そうとした。この視座は、「個人歴史性と社会歴史性の結節点」を探ることを生涯に渡る課題として探究した鶴見（1997）の思索とも深く響き合っている（p.10）。

両者の差異は、市井が変革を歴史的な視座から巨視的・思想的に捉えていたのに対し、鶴見（1996）はそれを地域の具体的実践や日常的な変化のなかに見出そうとした点にある（p.215）。さらに鶴見が、「地域」を土着的かつ具体的な実体をもつ単位として考えていた点にも特徴が見出せる。鶴見は玉野井芳郎およびジェシー・バーナードの概念を引き、内発的発展の単位としての地域を「定住者と漂泊者と一時漂泊者とが、相互作用することによって、新しい共通の紐帯を創り出す可能性をもった場所」として再定義した（pp.24-26）。ここでいう「漂泊者」とは、いわゆる「よそ者」のことである。それに加えて、鶴見は現在で言うUターン者を指す「一時漂泊者」の存在を、社会変動を媒介する重要な存在として位置づけた<sup>4</sup>。

注目すべきは、鶴見が創造性を特定の人物に帰属させず、複数の主体が交錯する関係のなかから立ち現れるものとして捉えようとした点である。鶴見（1998）は精神分析学者のシルヴァノ・アリエティを参照し、デカルト的明晰判明な概念と、その裏側にある「内念（endocept）」——「もやもやしていて、形が定まらないもの」とが結びつくとき、創造性が生まれると述べている（p.426）。この視座に立てば、キー・パースンの創造性は、個人の属性や成果ではなく環境との応答的関係のなかで生成される出来事として位置づけることができる。鶴見（1989）が「小さき民の創造性」（p.59）として捉えようとしたのは、まさにこのような匿名的かつ生成的な民の創造性であったといえよう。

本論では、この視座の転回を「生成論的転回」と呼びたい。すなわち、創造性をすでに存在する個人の資質や静的な成果から捉えるのではなく、それが関係性のなかでいかに生成されているかを問う視座への転回である。この視点は、「誰が」創造的であったかを問うのではなく、創造性が「いかにして」立ち現れたのかという生成過程に事例分析の焦点が移行することを意味している。

しかしながら、内発的発展論の提唱以降に展開された少なくない地域研究において、個人の成果や資質、あるいは制度や集団としての機能に焦点を当てる構造的な記述枠組みが中核的手法として採用されてきた。その結果、特定の主体が地域発展の象徴的存在として過度に顕在化し、実践全体がリーダー的人物像へと収斂する傾向がみられる。このような分析視角は、創造性に内在する応答的連鎖を十分には捉えきれず、関係の中から立ち現れる生成過程を不可視化する危うさをはらんでいる。その傾向は皮肉にも、市井（1963）がキー・パースン概念を構想した際に批判的に退けた「英雄史観」（pp.35-40）と接近するものである。そして、鶴見が「小さき民の創造性」として焦点化した創造性生成の契機は、実践の表象の周縁に退いてしまう。さらに、構造的枠組みによる記述は、制度的な評価指標と結びつきやすく、創造性を静的かつ定型的な成果として捉える力学を強化しかねない。この逆説こそが、創造性の応答的生成過程をいかに記述しうるかという方法論的課題として、本論が再検討を試みようとする核心である。

## 1-2 応答的世界観と倫理的行為としての記述

前節では、キー・パースン概念の展開において、特定の人物への焦点化が創造性の生成過程を不可視化してしまう構造を確認した。本節はその逆説を超克するために、哲学的・理論的な補助線を引くことを目的とする。

ここで導入するのは、ホワイトヘッドの「有機体の哲学」と、それを実践的に転回したステンゲルスの応答的世界観である。ホワイトヘッドは、主客二元論を前提とする近代的思考を批判し、現実を「出来事」の連鎖として捉え直す哲学を構築した。彼にとって世界は、互いに関係しあう「現実的契機（actual occasion）」によって構成される。ここで重要なのは、この現実的契機が、他の諸契機の影響を受け取り、それらを自らの内部に取り込みつつ新たな意味や出来事を形成するという、生成の過程そのものであるという点である。この生成の根源的な働きは

「抱握 (prehension)」と呼ばれる。ホワイトヘッドにとって、現実的契機は孤立した単位ではなく、関係の網の目の中から立ち上がる出来事の結節点にほかならない。関係のうちにすべての出来事を捉える彼の哲学は、過程的に立ち上がる創造性の理解において重要な理論的基盤となる。

その思想を現代の実践知の領域に展開したのがステンゲルスである。彼女は *Thinking with Whitehead* (2011)において、ホワイトヘッド哲学を現代的課題に応答する思考の技法として展開し、断片化された専門知や権威化された知識に対して、応答的かつ信頼に基づく関係性の再構築を試みている。また近著 *Making Sense in Common* (2023) では、「共に知を創造する」という行為について、それがいかなる倫理的応答を含む営みであるかを問う実践論が具体的に展開されており、その射程は、ホワイトヘッドの宇宙論をメタ理論に据え、人間と非人間との関係性までをも包含するものである。本稿では、ステンゲルスによって実践的転回を施された宇宙論を、暫定的に「応答的世界観」と呼ぶこととする<sup>5</sup>。

この世界観において、すべての実在はそれぞれの「環境 (milieu)」との応答的な関係のなかで意味を形成するものとみなされる。ここでいう環境とは、固定的な外的条件ではなく、関係性が絶えず編み直される場としての世界を指す。各存在はその場において、それぞれの「重要性 (importance)」に基づき応答する関係を選び取り、自己と他者のあいだに新たな意味と価値を生成していく。言い換えれば、何を重要と感じるかという価値観が、そのまま世界との関わり方を決定づけるということである。したがって、この世界観における記述とは、客観的立場からの観察や記録ではなく、記述しようとする出来事への主体的な応答による直接的参与と見なされる。それは、関係の網の目の中から立ち上がる出来事に対して記述者自身もその出来事の一部となり、応答的に関わることで共に意味を織りなす創造的な営みである。その過程において、記述対象にどのように関わるのかが常に問われ続けるという点で、記述行為は倫理的なものとなる。

### 1-3 創造性の定義と分析枠組み

前節での議論を補助線とし、本論では「創造性」を関係の網の目の中から顕現する出来事的過程として捉える。創造性はあらかじめ主体の内面に属する能力ではなく、実在がそれぞれの環境との応答的関係のなかで、未分化の可能性を新たな形や意味として立ち上げていく生成の過程そのものとなる。この見方において創造性とは、関係そのものを変容させ、世界に新たな秩序が立ち上がる契機となる出来事的実在として位置づけられる。

本論が試みる「潜在的実在」に着目した地域実践記述は、この創造性を分析対象としようとするものである。すなわち、地域の実践において直接的に観察可能な行為や成果のみならず、その背後で潜在的に働く生成の契機を捉えて記述しようとする営為である。本論では、そのための分析枠組みとして、ロイ・バスカーの批判的実在論およびバース・ダナーマークらによる推論モデルを導入する。バスカーによれば、現実世界は「経験 (empirical)」「出来事 (actual)」「実在 (real)」の三層構造をもち、我々が観察できる現象の背後には、不可視の実在層があるとされる。本論が記述しようとする創造性は、まさしくこの実在層における潜在的な働きとして捉えられる必要がある。ダナーマークら (2015) による「アブダクション」および「リトロダクション」を中核とする説明モデルは、その実在層における潜在的実在を探究するための方法を提示するものとして有用である (p.167)。ここでアブダクションとは、経験的な観察を理論的枠組みによって再構成し、新たな仮説的理説を導こうとする推論形式であり、現象の意味を「再文脈化」あるいは「再記述」する手法である。一方、リトロダクションは、その仮説を可能にする構造的条件を遡及的に問う思考であり、観察されないまま作用しているメカニズムとしての実在的要因を析出すことが目的とされる。とりわけリトロダクションの実践において鍵となるのが、「反事実的思考」(p.153) である。

これは、「ある要因 X がなければ、この出来事 Y は生じなかつたのではないか」という問い合わせによって、通常の観察や語りでは見落とされる実在 X の重要性を照射しようとする思考方法である<sup>6</sup>。

ダナーマークらは、これらの推論形式によってこそ、「経験的実在において直接的に明らかにできない関係や構造を見て取ることができる」(p.149) と述べている。本論もこの思考方法に依拠し、語られなかつた創造性を、成果や語りの背後で生成する潜在的実在として捉えようとする。その際、記述者は対象を外部から観察するのではなく、生成の場に参与し、その変化の意味を共に構成する立場を引き受けることになる。ホワイトヘッドのいう「抱握」の概念に照らせば、創造性の記述とは、潜在的実在の痕跡を受け取り、その応答を新たな痕跡として刻む生成的実践、すなわち、創造的な営みにほかならないのである。

本稿は、限られた小論の範囲において、創造性を応答的生成過程として記述する可能性を開くための試論である。その探究の焦点は、特定の事象や人物によって語られた事実自体を追求するものではなく、むしろ文化人類学的な参与観察に立脚し、長期<sup>7</sup>にわたる地域社会との関わりのなかで生起した対話・出来事・気づきの累積を素材として、生成の背景にあるメカニズムを解釈しようとするものである。ここでいう「参与」とは、研究者が外部の観察者ではなく、自らも出来事に応答しながら新たな意味の生成に共に参与する営為を指す。この姿勢は、ティム・インゴルド (2023) が指摘する「存在論から発生論への移行」とも呼応し、創造性を存在論的属性ではなく、生成しつづける過程として捉えようとするものである。したがって、記述は経験的であると同時に省察的な洞察に基づく解釈的営みとなり、その信頼性は、出来事への参与の深度と応答の誠実さによって担保されるべき倫理的なものとして、記述者はその責任を背負うことになる。

## 2 地域実践におけるキー・パーソン記述の系譜

### 2-1 内発的発展論の事例研究とその意義

鶴見 (1989) の内発的発展論において、事例研究の蓄積は当初からの課題として位置づけられていた (p.59)。鶴見は上田敏との対話のなかで、自らの播いた種が各論的な成果として実を結んだ研究として、西川潤の『アジアの内発的発展』、佐竹眞明の『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論』、そして松島泰勝の『沖縄島嶼経済史』を紹介している (鶴見・上田, 2003, p.198)。

西川 (2001) は、アジア諸地域の多様な社会的・経済的実践を取り上げ、国家主導の開発モデルに対して地域実践からの視点を提示した。その序文において鶴見の内発的発展論の定義を引用し、いわゆる外発的な「上からの開発に対するオルタナティブを構成するもう一つの発展の諸要件を明らかにすること」(p.15) を目的とした同書は、内発的発展論を抽象的理念にとどめず、事例分析を通して具体化しようとした意欲的な試みであった。「発展事例の背景に横たわる思想と論理を明らかにする」(p.320) と編者が言及したように、同書は各地域での社会変化の展開を論理的にあとづけようとした点に特徴がある。また、佐竹 (1998) はフィリピンの地場産業を対象に、地域住民が既存の経済構造のなかで独自の生産・流通の仕組みを構築していく過程を詳細に描いた。松島 (2002) は沖縄経済の構造を歴史的視野から分析し、「経済思想と開発経済論を結合させる形で」(p.8) 論考を展開した。沖縄の経済通史において一貫して内発的発展が課題とされてきたことを指摘し、「社会運動として島嶼民を指導し、経済政策を生み出し、実施したキー・パーソンの経済思想について考察した」(p.13) 同書は、琉球王国時代から

今までという長期の歴史を分析対象期間としたものであり、沖縄が展望すべきもう一つの道を示した研究であった。

これらの事例研究群に共通するのは、地域社会の発展を、単なる経済成長や外部資本の導入による成果ではなく、地域に内在する社会的・文化的資源の再編成として理解しようとする姿勢である。内発的発展論を具体的な地域の現実に即して検討したこれらの事例研究は、複数地域の事例を比較可能な枠組みとして分析・記述することで、内発的発展の多様性を実証的に示したという点で、その後の地域研究に大きく貢献した。その一方で、多くの研究は地域外部を拠点とする研究者が一定期間の現地調査を通じて観察したものであり、地域社会の変化を主に構造的・客観的視点から分析する傾向がみられる。したがって、地域の内部から当事者として、環境や他者との応答のなかで創造的に立ち上がる変化の過程を描こうとする視点は、まだ十分には展開されていない。

## 2-2 創造性の探究の理論的転回

本節の目的は、内発的発展論が展開してきたなかで、創造性の理論的探究がいかなる転回を遂げてきたのかを整理し、次章で試みる応答的記述の方法論的基盤を確認することにある。

第1章で言及したように、市井は社会変動を歴史的必然としてではなく、創造的主体性を発揮する複数の諸個人——キー・パーソン (key-persons) ——の実践を通じて協働的に実現されうるものと捉えていた。そして鶴見は、この倫理的主体の構想を、地域社会という土着的かつ具体的な実体をもつ文脈において継承し、個人と社会の相互変容を理論化しようと試みた。鶴見の内発的発展論は第一義として社会変動の理論であり、キー・パーソンは社会的秩序を内側から更新する存在として位置づけられていた。人間と社会が相互に変化する過程を探究しようとするその姿勢は、変革主体となる複数のキー・パーソンが、それぞれの環境とのあいだに織りなす倫理的応答を、創造的変化の源泉と捉えていることを示すものである。

「内発的」や「発展」という共感を得やすい用語が用いられたことにより、鶴見自身が「矛盾をはらんでいる」と留意した「政策としての内発的発展」(鶴見, 1996, p.27)が、社会運動としてのそれよりも広く議論されてきた側面もある。こうした文脈のもとで、北野収 (2008) はその状況を批判的に捉え、社会運動論としての内発的発展論を改めて問い直し、南部メキシコをフィールドに「『オルタナティヴ』を追求しようとする人々や NGO の有様を考察」(p.13)する論考を展開した。また北野は、質的調査、関係者の語り、知的主体としてのキー・パーソン<sup>8</sup>の実践に重きを置きながら、「生命誌論」を展開する中村桂子と鶴見との対話を参照し、人間および自然、生命と社会との相互関係性を視野に入れた存在論的転回の必要性を提示している (北野・西川, 2024, p. 257)。この哲学的視座は、キー・パーソンの創造性を生成論的に再検討しようとする本稿に、従前の事例研究群との理論的な連続性を与えるものと位置づけられよう。

また、米川安寿 (2018) は、内発的発展論におけるキー・パーソンの重要性を主張するとともに、「自己実現的人間としてのキー・パーソン」という視角からその主体性について論じている。ここでは、個人の学びと実践がどのように地域の内側で意味づけられ、主体化されていくのかが検討されており、その形成過程が実証的に照らし出されている。この議論も北野と同様に、地域の社会構造を前提としつつ、個人の内面的な形成過程に焦点を当て、主体の変容と地域との相互作用を解きほぐそうとするものである。

以上のように、市井・鶴見から北野・米川へと展開してきた系譜は、創造性を社会変動の契機として捉える理論的探究を着実に深化させてきた。ここまで概観は、創造性をめぐる理論的探究が、当初の認識論的把握から存在論的視座へ、そして本論における生成論的転回へと連なる理論的水脈を形成していると見なすことができよう。本

論は、この理論的転回を踏まえ、創造性の生成を関係の出来事として捉える視座を展開するものである。

次章では、長期的な参与観察と変革主体の語りを通じて、構造的記述を土台としながら、創造性の潜在的契機を探究し、地域実践において応答的に生成される創造性の可視化を試みる。

### 3 キー・バースンの創造性の応答的記述

#### 3-1 フィールドと分析的枠組み

分析の対象となるフィールドは、鹿児島県の最南端に位置する与論島<sup>9</sup>における人材育成事業である。同事業は、新型コロナウィルス感染症が拡大し、社会構造や生活様式が激変するなか、多様化・深刻化する地域の課題を産業創出の機会ととらえ、新たな価値を作り出すことができる人材を育成、確保することを企図して構想された。その社会的背景として、「まち・ひと・しごと創生法」（平成 26 年法律第 136 号）の施行以降、いわゆる地方創生の機運が高まり、各自治体も独自の施策を模索していたことが挙げられる。加えて、同島ではこの取り組みに先立つ数年前から、鶴見が「一時漂泊者」として位置づけた U ターン人材による起業や地域活動が注目を集め始めており、地域内に新たな動きが萌芽しつつあった。こうした動向は、鶴見の言葉を借りれば、「共通の紐帯を生み出す場」としての地域のあり方を体現しつつある状況であったと捉えることができる。

同事業の制度設計は、地域住民自身が課題を受け止め、対話と協働を通じてその解決を模索するプロセスを重視し、外部の専門家への依存ではなく、地域の内発性に基づいた支援思想に立脚して構想されたものである。その中核をなす実践型講座は、約半年間・全 10 回の連続講義として構成され、中学生以上の地域住民という幅広い対象者に対して実施されている。講座では PBL（Project-Based Learning）形式が採用され、フィールド調査、関係者との対話、企画立案、プロトタイプの制作と検証、そして事業企画発表までを一貫して行う。

講座において特筆すべきは「デザインリサーチ」の手法が全面的に採用されている点である。それにより講座参加者は、単なるビジネスアイデアの創出ではなく、課題が生じている現場に深く入り込み、課題の本質を他者との共感を通して洞察することが求められる。いわゆるスタートアップのアクセラレータプログラムのように短期間でビジネスをスケールさせることを主眼にしたものではなく、あくまで「人材を育成すること」<sup>10</sup> が目的として明記されている点も同事業の特徴である。また、自治体だけでなく、地元金融機関や各種関係団体など多様な主体が運営に関与する産官学連携の体制が整えられている。参加者にとって、こうした制度的な支援が新たなつながりを生成する契機となり、課題の共有と解決に向けた協働の場が形成されている点も注目に値する。

以上の概観から、本フィールドは地域社会における内発的発展を支える基盤的装置として制度設計されたものと見なすことができ、分析対象事例としての意義を有している。また、次節以降において取り上げる A 氏は、その初年度の講座受講者であり、修了後も継続的に地域活動を実践する傍ら、コーチを経て現在は講師も勤めている。A 氏の実践は、地域の生活文化や住民との応答に根ざして展開されており、従来の構造的枠組みでは捉えきれない創造性の契機を体現している。その意味において同氏は構造的記述という方法論的限界を照射する存在であり、応答的記述の必要性を示す事例分析がなされるに相応しい対象として位置づけられる。なお、事例分析の実施は、調査目的と記述の利用範囲を事前に説明し同意を得たうえで進めたものである<sup>11</sup>。

### 3-2 創造性の構造的可視化

本節では、前章で理論的に整理した「創造性の応答的生成」という視座を、地域実践の具体的な記述を通じて検討する。焦点を当てるのは、地域のなかで長期にわたり多様な実践を展開してきた実践者A氏である。ただし、本論における記述の目的はA氏の個人的経験の列挙ではない。A氏という媒介を通して、創造的変化がいかに関係の内部で立ち上がり、地域社会の秩序や連関を更新するのか、その端緒を捉えることにある。特定の個人に還元されない創造性の生成過程を対象とし、その記述可能性を探究する本論において、A氏は複数存在するキー・パーソンの実践のなかに生起する変化の契機を鮮明に映し出す媒介的主体の一人として位置づけられる。ホワイトヘッドが論じたように、世界は個々の現実的契機を通じて生成し続けており、創造的変化は常に局所的な出来事として立ち上がる。したがって、A氏を分析の焦点とすることは、特定個人を地域の代表として取り上げることではなく、創造性の潜在的実在が顕現する一つの出来事を、関係的生成の視点から追う方法論的選択である。

また、記述内容は逐語的な再現ではなく、長期の関わりのなかで生じた対話・出来事・気づきを素材に再構成されたものである。ここでの記述は、単なる「調査データ」の提示ではなく、出来事への参与を通じて生成された応答的理解の記録であり、その信頼性は、外在的客観性ではなく、出来事への関与の深度と応答の誠実さによって支えられていることを留意しておきたい。

ここではA氏の語り<sup>12</sup>に着目し、鶴見が提示したキー・パーソンの三つの条件——(1)伝統の再創造、(2)歴史的選択性、(3)不条理な苦痛の軽減——(鶴見, 1996, pp.231-233)から照射してA氏の実践を記述してみたい。

A氏は、看護師として都市部で約10年間勤務したのち、子育て環境の困難を契機として帰郷し地域医療に従事するようになった。島に戻った同氏は、実家に子供を預けて地元の病院で勤務を再開し、第二子にも恵まれ「仕事をしながら必死に子育てを続けていた」。しかし、地域医療における制度的課題や医療・福祉の現場における限界に直面し、自らの役割を再考するようになる。とりわけ、新型コロナウイルス感染症拡大による入院患者と家族との断絶がもたらす影響を目の当たりにしたことなども重なり、「看護の専門性は病院に集まるのではなく、家庭に還元されるべき」という想いを強くしたという。こうした気づきは、同氏自身のライフ・ストーリーにおける選択として、医療従事者の立場から地域社会へのアウトリーチ型の支援活動へと軸足を移す契機となった。そして同氏の活動は、後日、構造的な課題解決へ向けた「訪問介護事業」創設の呼び水となるなど、地域社会における具体的な成果としても結実している。同氏の選択は、鶴見の重視する地域の漸進的な内発的変化における一つの契機と捉えることが可能であり、また同氏の人生において重要な契機となったが、地域のゆくえを決めるような歴史的な選択性とまでは言い切れない部分もある。むしろそこに見られるのは、日常の困難や不条理に対して自身の関わり方を不斷に見直していく倫理的主体性であり、そこから創造性の発露が生じている。

地域課題の解決を目指す実践型講座の案内を目にしたA氏は、それが自ら抱えていた課題を乗り越える手がかりになるという確信を抱き、仕事を退職する覚悟をもって参加を決意したのだという。参加当初は専門用語や抽象的概念に戸惑い、十分に理解できぬまま睡眠不足のなか復習と準備に追われる日々が続いたが、地域への問題意識を共有する仲間との協働を通して困難を乗り越えていった。やがてA氏は、「人生を自然に最後まで生きる( one's natural life)」という事業コンセプトを見出し、それをもとにした企画は最終発表で入賞を果たす。結果的に自治体からの支援を受けることとなったが、A氏自身は「たとえ受賞できなくても実践するつもりだった」と語っている。医療現場で直面した「不条理な苦痛」を少しでも軽減し、地域住民が安心して暮らせる社会の実現をめざして、職を辞して活動に専念するA氏の姿は、鶴見が特徴づけたキー・パーソンの条件と響き合うものである。

講座修了後、A氏は自治体からの伴走支援を受けながら、自身の提案した事業を実際に立ち上げた。しかし、現

実は計画通りには進まなかった。同氏は講座の準備段階でデザインリサーチを行い、地域課題を捉えたモデルを組み立てていたが、実際の現場では、地域住民、とりわけ高齢者層のニーズは想定とは異なるものであった。地域の高齢者は、健康への意識は持つてはいるものの、同氏の提供する講座型の予防教育には関心を示さず、むしろ雑談や身体を動かす軽い運動の合間にぽつりとこぼされるような生活上の困りごとへの即応的な対応が求められていたのである。

このような予期せぬギャップを前に、同氏は自らの活動内容を繰り返し練り直し、地域住民との対話を重ねながら事業企画をシフトさせていく。たとえば、当初は座学形式で展開する予定であった生活習慣病予防講座は、高齢者の集中力や身体的特性等に配慮し、雑談を基軸とした「おしゃべりの場」での学びに置き換えられた。また、生活支援の一環として導入を検討していたデジタル技術の活用についても、一方的に教えるのではなく、近隣の高齢者がスマートフォンを使えるようになった成功事例を共有しながら「わたしもやってみたい」という気持ちを引き出すような働きかけを重視するようになった。こうした同氏の実践は、固定化されたモデルの導入ではなく、既存の生活文化や慣習といったコミュニティの文脈に根ざして活動内容を柔軟に再編成し、住民の創造的関与を促す実践へと展開したものである。そのプロセスは、鶴見が提起した「伝統の再創造」の概念に照らして評価することも可能である。また同氏の実践は、地域に蓄積された経験知や相互扶助の文化を外部から一方的に変革するのではなく、対話と応答を通じてその価値を再認識し、新たなかたちで活かそうとする方法論<sup>13</sup>と見なすこともできよう。

こうして A 氏の実践を鶴見の三つの条件に照らし構造的に分析してみると、要件と実践が確かに交差しているように見える。しかし、同氏の行為は日々の活動を通した環境との関わりのなかで、他者の声や出来事に応答し続けるうちに漸進的に形づくられたものであり、その有機的に連なる実践を分解して画一的なキー・パースンの条件に明確に当てはめることは難しい。ここまで構造的記述によって、個人の成果やその資質、人物像、社会との関係性、ならびにそのなかでの選択的行為の実践については一定程度顕現されている。しかしその一方で、A 氏以外にも複数存在するキー・パースン、もしくは、条件に合致しない地域の内発的な社会変動に関与する多くの諸個人によって生起される創造性は十分には描き出されていない。構造的枠組みは創造性の重要な側面を示す有効なレンズであると同時に、そこからはみ出すことでこぼれ落ちる出来事や、分析されるべき対象さえも見逃す危うさをもはらんでいるのである。

無論、地域におけるすべての関係性や小さき実践すべてを記録し言語化することは現実的に不可能である。しかし、すべての個人や実践をつぶさに調査することは叶わざとも、創造性の契機を担う諸個人への洞察を通して、その生成過程に潜在する実在を捉えることはできるのではなかろうか。

### 3-3 応答的記述による創造性の可視化

本節では、第 1 章で論じた理論的視座に立ち、前節で捉えきれなかった創造性の生成契機に焦点を当てる。ここで採用するのは、記述者自身が地域実践に参与し、地域のメンバーシップのなかで交わされた語りに応答しながら出来事の意味を言語化していく応答的記述の方法である。したがって、本節の目的はインタビュー<sup>14</sup>の体系的整理ではなく、関係のなかで生成される創造性を、記述の実践を通して浮かび上がらせることにある。

以下、A 氏の語りの中に潜在する創造性の応答的生成過程を、語られた断片や葛藤、揺らぎのうちに現れる微細な兆しに着目することで顕在化することを試みる。

### 3-3-1 摆らぎから始まる気づき——抱握的違和と応答的生成の端緒

地域医療の場は、多くの患者が顔見知りという状況にある。その現場に従事していたA氏は、コロナ禍における患者の孤立を目の当たりにした危機感と、地域の未来への不安感のなか、自らの思い描く未来像を実現するきっかけを掴みたいという思いに突き動かされるように、講座への参加を決意したという。

本当に家族に愛されていて、家族がお見舞いに来てくれるからこそ、病院でもちゃんとご飯を食べて、元気を維持していた人たちが、コロナによって家族に会えなくなって、すぐに寝たきりになってしまい、歩けなくなって、食べられなくなって、やせ衰え、ついには亡くなっていくっていう場面を目の当たりにした<sup>15</sup>。

この語りには、医療という制度的な枠組みのなかで「正しく機能している」現場に対して、制度の内側から抱握された言語化されにくい違和——「何かがおかしい」という抱握的違和<sup>16</sup>——が含まれている。それは明確な理念や理論ではなく、医療機関で隔離された患者の姿や心に浮かんでくる家族や親族との関係の断絶を、同氏が身体的に感受した痕跡として表出している。それは「地域」という環境に埋め込まれた与件であり、同氏にとってきわめて重要な倫理的な呼びかけとして抱握されていた。「地域」という場には、抱握の対象となり得る関係資本が地層のように積み重なって実在しており、それが出来事的創造性の生成の与件となり、常に交錯しているのである。

また、同氏は、職場の研修で地域分析に取り組んだ際、「自分が地域のことを何も知らなかった」という失望を覚えたという。

自分が老いた時、高齢者しかいない地域でどうやって生きていくんだろうという不安と、本当の医療ってこうあるべきじゃないのかという思いが、悶々としていた。

この語りは、構造的な「当事者意識」や「地域課題の理解」という語彙で表せるものではなく、生活者としての実存的な揺らぎである。同氏が直面したのは、自らの生活と切り離せない未来への身体的・感覚的な問いであり、このような抱握の連鎖こそが、創造性の萌芽そのものと見なせよう。

これをやるなら、私は病院をやめて、地域に行かないといけない。「受け入れる場所」から、アウトリーチする側の方にシフトしなければいけないってすごく思った。

この決意において重要なのは、それが論理的決断ではなく、倫理的応答としての使命感であるという点である。その背景には、「自分の課題を乗りこえるきっかけになるという変な確信」があったという。同氏が語る「確信」は、制度的なインセンティブや到達目標によって動機づけられる合理性を超えた「呼びかけへの応答」として生成されたものである。この創造性は、言語化される以前に身体的次元で生起する創造性の端緒である。もし同氏にその抱握的違和が立ち上がらなければ、その決意は生成しなかったであろうという反事実的思考から、地域という環境からの倫理的呼びかけは、不可視の実在層に潜むメカニズムとして捉えることができる。

初回の講座で同氏が抱握した「嬉しさ」も同質の応答であった。

地域のことを思っている人はたくさんいるんだという嬉しい気持ちになった。

この感覚は、課題意識の共有という認識論的な喜びを超えて、共にいることの抱握が、すでに存在していた関係性に新たな意味と応答の余地を拓き、講座が始まる前の段階から、関係の網の目の中に創造性の土壌が育まれ始めていたと解釈することができる。ここで記述可能となる生成の過程は、個人の語りから得られたものではあるが、その創造性は個人に還元されるものではなく、むしろ関係における応答として記述されるべきものであり、ここに応答的記述の可能性が見出される。

本項で浮かび上がったことは、A 氏が制度的な枠組みに参加する以前に感受していた違和や危機感、そして他者との共鳴を通して立ち上がった創造性の萌芽である。これらは、構造的分析からはこぼれ落ちてしまう潜在的実在が、創造性の生成メカニズムとして作用するプロセスを示唆するものである。次項では、講座受講中に A 氏が経験した「絶望」の語りを通じて、創造性がいかに失敗や不安と結びつきながら再生成されていくかを確認する。

### 3-3-2 変容の契機としての場の倫理——創造性を育む関係のケア

A 氏にとって、講座の受講は想像以上の困難を伴うものであった。専門用語や抽象概念が飛び交う講義内容についていくために、日々の仕事と子育ての合間を縫って、ほぼすべての時間を学習に費やす日々が続いたという。

とにかく意味がわからなかった。追いつくのに精一杯で……本当に寝ても覚めても頭の中の 9 割が講座のことで、ずっと睡眠不足だった。

この語りから読み取るべきは、単なる理解不足という表層的な困難ではない。むしろ、学術的語彙との接触によって自己理解の枠組みが揺さぶられ、語りえぬ混乱の只中にあること自体が、創造性の起点として作用していたのではないかという仮説を導き出すことができる。

さらに、講座の最終段階である事業企画の発表の準備過程において、同氏は「こんなのでは世界は変わらない。くらいの絶望」を感じたのだという。この「絶望」は、単なる挫折ではなく、自己の変容を引き起こす決定的な契機となった。限られた時間のなかで、仲間たちとの対話を通して再構成された事業構想と、同氏の倫理的使命感に支えられた熱意によるプレゼンテーションは高い評価をもって迎えられた。その創造性の生成をもたらしたのは、同氏自身がその絶望を抱握し、絶望しているということを自己開示するという応答によるものであったと捉えることができる。ここで記述されたような「揺さぶられ」の抱握は、創造性が生成する一つの閾値と見なすことが可能である。

あの時はまだ、きちんとやったものを出さないといけないとか、失敗しちゃいけないと思っていた。ダメだったら変えればいいじゃんっていうマインドがまだできてなかった。今だったら、まいか、と思える。

この語りに表れているのは、成果へと向かう直線的な思考から脱し、応答と変容を肯定的に受け入れられる柔らかな自己の獲得である。こうした変容自体も、予期しない出来事への応答を通じて自己を再創造するという生成過程と捉えることができよう。そして、その創造は、以下のように他者との相互承認によって支えられたものであった。

情熱をもって失敗しにいくのは、悪いことじゃないっていうこと、形になってなくてグズグズでも、きちんと受け入れてもらったことが、自分にとって有り難かった。

この学びの場を、同氏は自らの専門性を通してこう表現する。

何を言っても受け入れてもらえるという体感がすごくあった。……医療福祉の利用者さんの安全を守るっていうケアにすごく通じている。……これは素晴らしいケアじゃないかと思った。

この言葉から浮かび上るのは、表面的な成果や評価を超えた「場の倫理」の発見である。同氏の語りは、創造性が特定の能力や目標に還元されるのではなく、倫理的な関係性のなかで立ち現れてくるものであることを示している。そこでは「失敗」や「未完成」であることが排除されず、応答可能性に開かれた関係が保たれている。この倫理的関係性こそが創造性発露の基盤をなしているのである。

本項で確認してきたように、創造性は個人に属する能力ではなく、関係を通じて媒介的に育まれるものである。同氏の創造性は、構造的枠組みでは捉えにくいかたちで生成されており、そこには常に複数の生成的契機が潜在的に存在している。次項では、そのような関係が同講座修了後の社会的実践にどのように展開し、「共鳴」や「発火」といった現象として表れるのかを探究していく。

### 3-3-3 共にあることの力——関係的発火と潜在的実在の条件

講座修了後、A 氏は自ら構想した事業を実際に立ち上げた。ときを同じくして、同島の取り組みが報道番組で紹介されることとなった際、事業を実践しながらコーチとしても貢献する同氏に取材依頼があった。「前に出たら、いろいろ言われそうで嫌だな」と感じながらも、「誰かの役に立てるなら」と同氏は取材を受け入れた。

小さな積み重ねの先に、地域が抱える問題が解決できるんじゃないかな<sup>17</sup>。

前節で述べたように、同氏の事業は想定通りに進んでいなかった。しかし、そのことを語る同氏から、失望感や悲壮感は感じられなかった。むしろ、応答と省察を繰り返すことによって実践知が深められていくことに手応えを感じているようにすら見受けられた。

思った通りやれていなくても、実際に引き続き自分が活動を継続していくことになって……活動の一つ一つが繋がっているんだということがわかった。

この語りは、実践の結果ではなくプロセスから創造性が育まれることを、認識ではなく経験知として内在化させていることを示している。

同氏はこの時期、その活動実績と地域に貢献しようとする姿勢から、仲間に対して勇気と安心感を与えるような存在になりつつあった。しかし同氏は、常に自分が役に立てているのかどうか半信半疑であり、コーチとしての立場についても「大変恐縮した気持ちでいた」のだという。外部からの評価と自己評価の間に葛藤を抱えるなか、次年度には同氏に講師就任の打診があり、同氏はこれを快諾している。コーチの役割にさえ躊躇していた同氏に、いったい何が講師としての依頼を引き受けさせたのだろうか。

今回はいよいよ島の人が創り出す講座が始まる感じがしていて。サポートにならないかもしれませんけど、

フェーズが変わる段階。がんばらなきやつて。

この語りからは、講師という制度的な立場が対象化されているのではなく、同事業の過去の痕跡から、まだ見ぬ未来の仲間に至るまで、重層的な関係性のなかで立ち上がった呼びかけに対する、真摯かつ倫理的な応答として役割を引き受けていたことが読み取れる。単に「講師就任」と構造的に記述するだけでは、この応答のなかで立ち上がる創造性の生成過程、すなわち、潜在的実在によって支えられた関係のメカニズムをすくい取ることは難しい。

来年なのか、5年後なのか、いつ、どのタイミングで発火するというのがわかんないなって思っている。つながりあって、応援し合うのは大事。……誰かががんばっていると、自分もがんばれる。誰かの小さいがんばりがたくさんあって、それを見ている人が、今ならやれるっていうタイミングで発火できたらいい。

この語りにおける「発火」という表現は、同氏が直観的に用いた感覚的なメタファーである。それは、他者の実践の痕跡を抱握し、その共鳴が内奥で灯をともすかのように、新たな行為を誘発していく過程を捉えている。誰のものであるかに限定されないその「火」の生成は、関係の網の目のなかで連鎖的に立ち上がる瞬間を象徴している。同地域における創造性は、特定の事象による直接的な因果関係ではなく、共鳴を通じて非同期に伝播していく動的な出来事として生じているのである。

約束は破っていい。これをすると言ったけど、やっぱりできなかつたっていうことをやっていい。目指しているのは、共鳴・共創できる幸せな地域づくり。

同氏の語りは、制度的な評価や到達点のある成果目標を超えた、倫理的実践の地平を指し示している。共にあることの力は、行動によって得られる直接的な成果ではなく、応答し続ける関係性の継続そのものである。それはまさに、鶴見のいう「共通の紐帯を生み出す場」と重なり合うものであり、創造性を支える潜在的実在としての基盤的土壤なのである。

本節での記述は、語りを構造的に整理するのではなく、その発せられた文脈や、言葉の背後にある非顯在的な契機に注目し、創造性の生成過程を応答的に探究する試みであった。応答的記述とは、あらかじめ準備された枠組みに語りを当てはめることではなく、記述者自身が関係のなかに参与し、共に生成していく創造的な営みである。この営みの意義は、構造的記述ではこぼれ落ちてしまう創造性の痕跡をすくい上げ、出来事として立ち現れる創造性に応答する点にある。その一方で、記述者の解釈が関係に影響を与えるという意味において、記述とは創造的かつ倫理的な姿勢が問われる営みであることも、留意し続けられる必要がある。

## おわりに

本稿は、地域実践における創造性を、個人の資質や成果ではなく、環境との応答的関係のなかで立ち現れる生成的過程として捉え直すことを目的としてきた。市井および鶴見によるキー・バースン概念の哲学的・倫理的視座を起点に、創造性を潜在的実在として捉える生成論的転回を提起し、記述行為そのものを応答的で倫理的な営みとし

て再構成することを試みた。

本稿の学術的意義は、第一に、創造性を静的な属性ではなく関係の網の目の中から立ち現れる出来事的過程として捉え直した点にある。これにより、内発的発展論におけるキー・バースンの英雄化傾向を内側から転換し、地域の創造的実践を特定個人の物語ではなく、関係的応答の連鎖として描く可能性を示した。

第二に、創造性を批判的実在論の三層構造における潜在的実在として位置づけたことである。これにより、観察や語りの背後で作用する生成の契機をアプダクションおよびリトロダクションの推論を通して分析し、経験的現象の水面下に潜む創造性発露のメカニズムに近接する方法を提示した。

そして第三に、ホワイトヘッドおよびステンゲルスの哲学をメタ理論とし、記述行為そのものを創造的出来事の一部と見なす応答的世界観を導入した点である。記述は単なる観察や分析ではなく、他者との関係のなかで共に意味を生成する倫理的実践であり、創造性はその関与のなかで生成する出来事として認識される。

応答的記述において重要なのは、記述者が対象を外部から分析するのではなく、出来事の網の目の中から巻き込まれながら、意味を共に構成していく立場を引き受けることである。そこでは、「揺さぶられ」や「絶望」といった否定的経験が、他者との関係を媒介として新たな意味へと変容し、創造性の端緒となる。すなわち、創造性とは特定の人物に属する能力ではなく、場の倫理に支えられた関係のうちに立ち上がる出来事である。記述者は、その生成過程をただ追うのではなく、自らの推論の痕跡と関与の過程を可視化する責任を負っている。この倫理的な応答こそが、記述を創造的営為へと転化させるのである。

一方で、本論にはいくつかの課題も残されている。まず、本研究は単一の地域フィールドに基づく厚い記述を土台としており、一般化には慎重さを要する。そのため本論は、普遍的な理論化を目的とするのではなく、生成論的視座に基づく試論的研究として位置づけられるべきである。

また、参与を伴う応答的記述においては、研究者の介入と解釈が同時進行するため、その過程をいかに可視化するかが常に課題となる。今後、事例分析をより広く展開していくためには、信頼性と倫理性を両立させる方法論的発展が求められる。そして地域という高密度な関係社会においては、匿名性と可視化の緊張関係を常に意識し、説明と同意形成の手続きを倫理的配慮のもとで徹底する必要がある。

これらの課題を踏まえつつ、本論で提起した生成論的転回および応答的記述の枠組みが、異なる地域や実践領域において適用され、潜在的実在としての創造性の発露に関する普遍的構造をより深く探究する試みへと接続されることで、地域社会研究および地域における内発的な社会変動を支える実践の広がりに資することを期待したい。

## 参考文献

### 【英語文献】

- Stengers, Isabelle. (2011). *Thinking with Whitehead: A Free and Wild Creation of Concepts*, Translated by Michael Chase, Harvard University Press.
- (2023). *Making Sense in Common: A Reading of Whitehead in Times of Collapse*, Translated and with an Introduction by Thomas Lamarre, University of Minnesota Press.

### 【日本語文献】

- 市井三郎 (1963) 『哲学的分析』岩波書店。
- (1980) 『ホワイトヘッドの哲学』レグルス文庫。
- 上田敏・鶴見和子 (2003) 『患者学のすすめ—“内発的”リハビリテーション』藤原書店。
- 北野収 (2008) 『南部メキシコの内発的発展と NGO—グローカル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房。
- 北野収・西川芳昭編著 (2024) 『人新世の開発原論・農学原論—内発的発展とアグロエコロジー』追補・新装版、創成社。
- 佐竹真明 (1998) 『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論—鍛冶屋と魚醤』明石書店。
- 玉野井芳郎 (1979) 『地域主義の思想』農山漁村文化協会。
- 鶴見和子 (1996) 『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- (1997) 『鶴見和子曼荼羅III知の巻—社会変動と個人』藤原書店。
- (1998) 『鶴見和子曼荼羅IV土の巻—柳田国男論』藤原書店。
- 鶴見和子・川田侃編 (1989) 『内発的発展論』東京大学出版会。
- 鶴見俊輔・花田圭介編 (1991) 『市民の論理学者・市井三郎』思想の科学社。
- ティム・インゴルド (2023) 『応答、しつづけよ。』奥野克巳訳、亜紀書房。
- 西川潤編 (2001) 『アジアの内発的発展』藤原書店。
- バース・ダナーマーク、マツ・エクストローム、リセロッテ・ヤコブセン、ジャン・Ch・カールソン (2015／2024) 『社会を説明する：批判的実在論による社会科学論』佐藤春吉監訳、ナカニシヤ出版。
- 松島泰勝 (2002) 『沖縄島嶼経済史——一二世紀から現在まで』藤原書店。
- 米川安寿 (2018) 「内発的発展論における主体性に関する考察—自己実現の人間としてのキー・パースン」『ボランティア学研究』第18巻、99-112頁。
- ロイ・バスカー (2009) 『科学的実在論の理論』式部信訳、法政大学出版。

<sup>1</sup> 終戦直後から哲学者としての市井と歩みをともにした鶴見俊輔は、市井が自らの哲学的諸問題を考えるための最初の手がかりを与えたのはホワイトヘッドであると指摘している（鶴見・花田, 1991, pp.204-205）。

<sup>2</sup> 本稿でいう「構造的記述」とは、外在的観察・類型化・時間の均質化などを通じて、実践を一定の構造として可視化しようとする作業上の定義である。これに対置される「応答的記述」とは、参与と相互行為に立脚し、出来事の立ち上がりと関与の倫理を可視化しようとするものである。

<sup>3</sup> 市井三郎は「キー・パースン（複数）」として、意図的にその複数性を明記している（市井, 1963, p.36）。

<sup>4</sup> 鶴見は「定住者」「漂泊者」「一時漂泊者」を社会変動の分析枠組みとして使うことに着目したのは「柳田国男の仕事を通してである。」と注釈している（鶴見, 1996, p.31）。

<sup>5</sup> この「応答的世界観」という用語は、本稿独自の表現であるが、ステンゲルスがホワイトヘッド哲学とともに考え、

実践的展開を施した思想的射程を要約するものとして用いる。

<sup>6</sup> 市井（1963）はその思考方法について、「反事実的条件命題」として2つの節をあてて論じるほどに重要視していた。

<sup>7</sup> 著者は対象となる地域において10年以上居住しており、また対象とする事業およびその構成メンバーとは2021年の事業開始当初より活動を共にしている。

<sup>8</sup> 北野は「キー・パーソン」と表記しているが、本稿では「キー・バースン」に統一する。

<sup>9</sup> 対象となる基礎自治体は鹿児島県大島郡与論町となるが、本稿では生活者の共同体としての「地域」という概念に重きをおき、為政者によって変更される行政区域としての「与論町」ではなく「与論島」という名称を用いることとする。

<sup>10</sup> 2025年7月現在、同事業は実行委員会形式で運営されており、委員会規約の「第2条（目的）」において、「地域の活性化及び発展に貢献する人材を育成すること」が目的として明記されている。

<sup>11</sup> 本論における事例分析は、インタビューの実施およびその記述の目的と公開範囲を共有・同意を得た上で、信頼関係に基づき構成している。また、再構成された記述についても本人の確認を得たものである。語りや行為の記述は可能な限り個人が特定されないよう留意しているが、島嶼地域という特性上、関係者が特定されうる可能性についても事前に説明し、本人に内容の確認・了承を得たものである。なお、本研究は筆者の所属機関における研究倫理指針に準拠して実施しており、すべての記述はその理念に基づき、調査対象者との相互の信頼と応答の関係のもとで構成されている。

<sup>12</sup> A氏への定式的なインタビューは2024年9月11日、同氏が講師を務める人材育成講座の内容を検討するための会議の後、約90分間に渡って行われた。しかし、本論における記述の素材はこのインタビューによるものに限らず、長期の参与によってもたらされた気づきも多分に含まれている。

<sup>13</sup> 市井は、能動的諸主体の中で「対立的契機をいたずらに増大させることによって相殺の帰結を招くような方策はとらず」、それぞれの対立勢力が役割を果たしつつ、全体として彼らの未来のイメージの方向へ動く方策を「変革方法論」と規定し、キー・バースンの要件として位置づけた（市井, 1963, pp.45-49）。市井に対し、鶴見が創造性を日常的な変化の中に見出そうとした視座から捉えれば、同氏の事業実践におけるアプローチは、キー・バースンの変革方法論として位置づけることができる。

<sup>14</sup> 分析対象は前節と同じA氏への半構造化インタビューおよび参与観察による。

<sup>15</sup> これらの直接引用は、2024年9月11日に行われた聞き取りにおいて語られたものである（以下、特記のない引用についても同様）

<sup>16</sup> 言語化以前の微細な感覚を表すため、あえて「違和感」ではなく「違和」と表現した。

<sup>17</sup> NHK (2022) 『情報 WAVE 鹿児島』 NHK 鹿児島、2022 年 11 月 30 日放送の A 氏インタビューより。

## 投稿規程

### 1. 投稿論文の要件

以下の全てを満たすこと。

- (1) 投稿資格者は、東京科学大学（Science Tokyo）に所属する教職員（非常勤講師を含む）・大学院生・学生とする。なお、非投稿論文（査読を行わない研究ノート等）は、Science Tokyo に所属する教職員が執筆する。
- (2) 原著論文として他誌に投稿されて査読が進行していないこと。
- (3) 原著論文として他誌に掲載されていないこと、掲載される予定となっていないこと。
- (4) 使用言語は和文または英文とする。
- (5) 倫理指針に反していないこと。倫理指針は「倫理規程」に定められている。

### 2. 字数

原則、日本語の場合は 20,000 字以内、英語の場合は 8,000 words 以内とする。ただし、査読過程で論文委員会の判断により超過を認める場合がある。

### 3. 論文の受付

論文投稿日（オンラインで投稿完了のメールが著者に届いた日）を原稿の受付日とする。

### 4. 採録決定時の提出書類

採録決定時には以下の書類を提出すること。

- (1) 最終論文原稿
- (2) 著作権譲渡書
- (3) 倫理に関する誓約書

著作権譲渡書、倫理に関する誓約書については、原本の提出を採録の条件とする。最終論文原稿については、電子ファイルの提出を求める。詳細は、事務局からの指示に従うこと。分量の超過については論文委員会に問い合わせること。体裁については「執筆要項」を遵守すること。最終論文原稿の体裁が指定されたものと著しく異なる場合には掲載を拒否する場合がある。

### 5. 論文の著作権

採録になった論文の著作権はコモンズ著作権規程にしたがい、未来の人類研究センターに帰属する。

### 6. 引用にともなう著作権・肖像権等

他の著作物等からの引用にともなう著作権や肖像権等については、著者の責任においてその利用許諾を得る必要がある。

### 7. 倫理指針の遵守

提出された論文について倫理指針違反が疑われる場合には、論文委員会が調査委員会を設置して事実関係の調査を行う。その際、関係する学会あるいは組織などとの間で論文の内容に関する情報交換を行う場合がある。調査結果

をふまえ、必要に応じて罰則が適用される。

## 8. 異議申し立て

査読のプロセスに問題がある場合には、理由書を添付の上、申し出を受け付ける。ただし、手続き上の不備以外の理由で査読のやり直し等に応じることはない。

## 9. 投稿の取り下げ

理由書を添付して申し出ることができる。掲載決定後の取り下げは認めない。

## 論文委員会規程

### (目的)

第1条 論文委員会は論文誌の発行を行う。

### (構成)

第2条 論文委員会は委員長、副委員長、委員により構成する。

第3条 委員長の任期は1年とし、再任を妨げない。

第4条 副委員長の任期は1年とし、再任を妨げない。

第5条 副委員長は委員長の補佐を行う。

### (業務)

第6条 論文委員会は次の業務を行う。

(1) 論文募集と査読業務を行う。査読業務とは、査読者の決定、査読過程の管理、採否の検討と決定を指す。

(2) 特集のテーマを決定し、依頼を行う。

### (論文の査読)

第7条 論文査読は次のプロセスによって行う。

(1) 投稿論文は論文委員会が受理した日を受け付け日とする。

(2) 論論文委員会において査読者（2名、第一査読者、第二査読者）を決定する。2名の査読者のうち、少なくとも1名は学外者とする。第8条（2）にもとづいて行われる第三査読においては編集委員会構成員1名による第三査読者の兼務を妨げない。

(3) 査読者、投稿者ともに匿名とする。査読期間は原則として1か月とする。（特別の事情がある場合はこれよりも短い期限でよい）

(4) 論文委員会は査読過程を管理し、期限を過ぎた査読者に対しては催促を行う。催促に応じない場合には、別の査読者を選定する。

(5) 必要に応じて、投稿者に論文の修正を求める。論文の修正は1回のみとする。修正期間は原則として1か月とする。期限が過ぎても返答がない場合および著者から申し入れがあった場合は、取り下げとする。

(6) 査読結果にもとづき論文の修正が行われた場合、2名の査読者に対し再査読を依頼する。再査読の期限は原則として1か月とする。期限を過ぎた査読者に対しては催促を行う。催促に応じない場合には、論文委員会が最終的な判定を行う。

### (採否の判定)

第8条 採否の判定は次の方法による。

(1) 採否判定の責任は、委員長にある。

(2) 論文委員会は、査読者の結果報告に問題がないかを確認し、問題がなければ以下の原則に従って採否の判定を行う。

（2-1）2名の査読者がA判定（このまま、あるいは軽微な字句の修正のうち掲載可）とした場合、採録

とする

(2-2) 査読者のうち1名がD判定（掲載不可）とした場合、採録しない

(2-3) 1名の査読者がA判定とし、もう1名の査読者がB判定（部分的な修正のうち掲載可）もしくはC判定（内容面あるいは構成面に関して大幅な修正が必要）とした場合、あるいは2名の査読者がともにBないしC判定とした場合、投稿者に論文の再提出を求める。論文が再提出された場合、再査読を行う。その際の判定は、AもしくはDのいずれかとする。査読者による判定結果がいずれもA判定となった場合にのみ、採録とする。

#### （附則）

- 1 本規程に関し疑義が生じた場合は速やかに未来の人類研究センター会議に諮り、その決定に従う。
- 2 本規程は2024年4月1日より実施する。
- 3 規程を変更する場合は、未来の人類研究センター会議の議決を経る。

